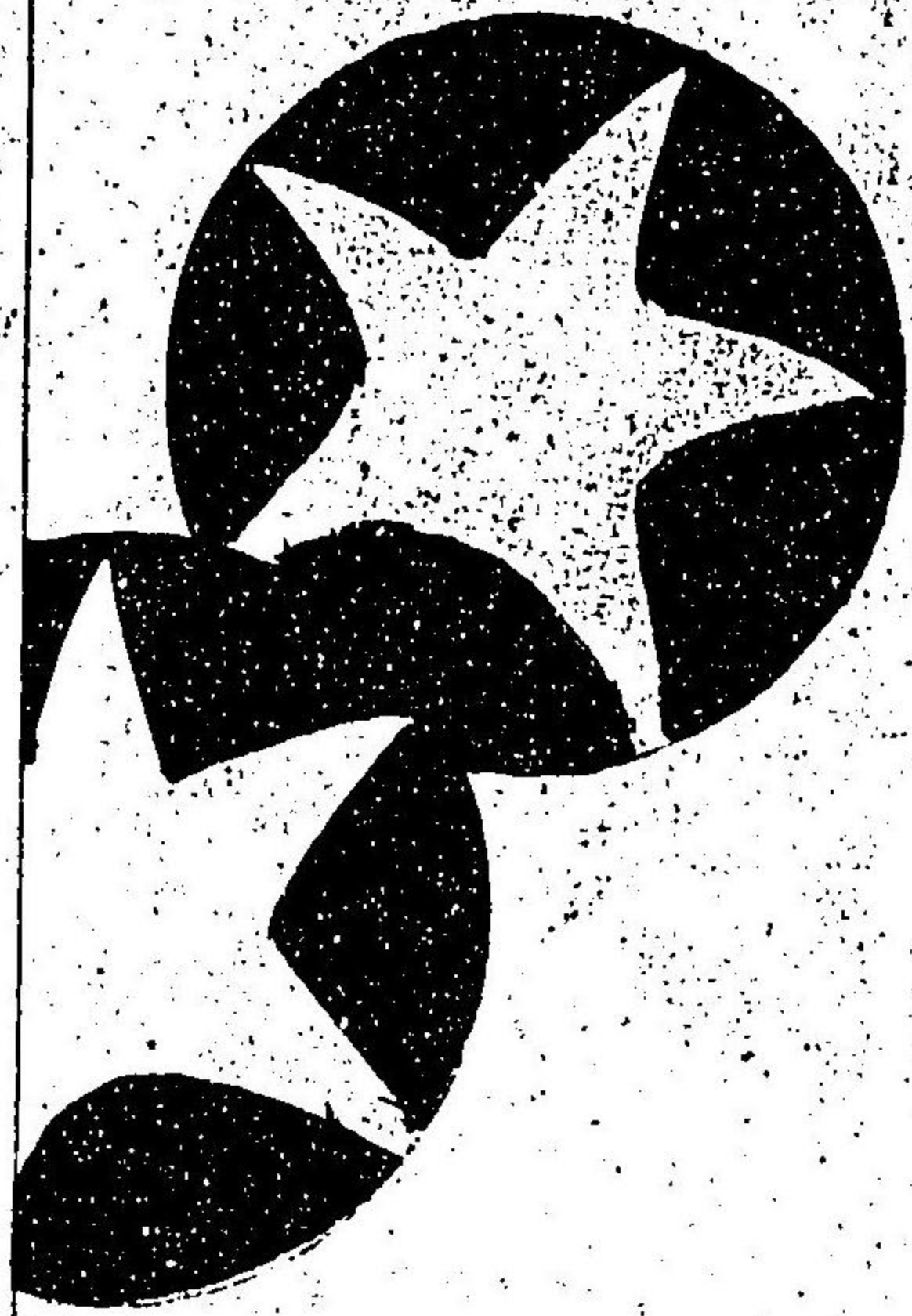


妹

小笠原白也著



092906-000-2

特71-422

妹

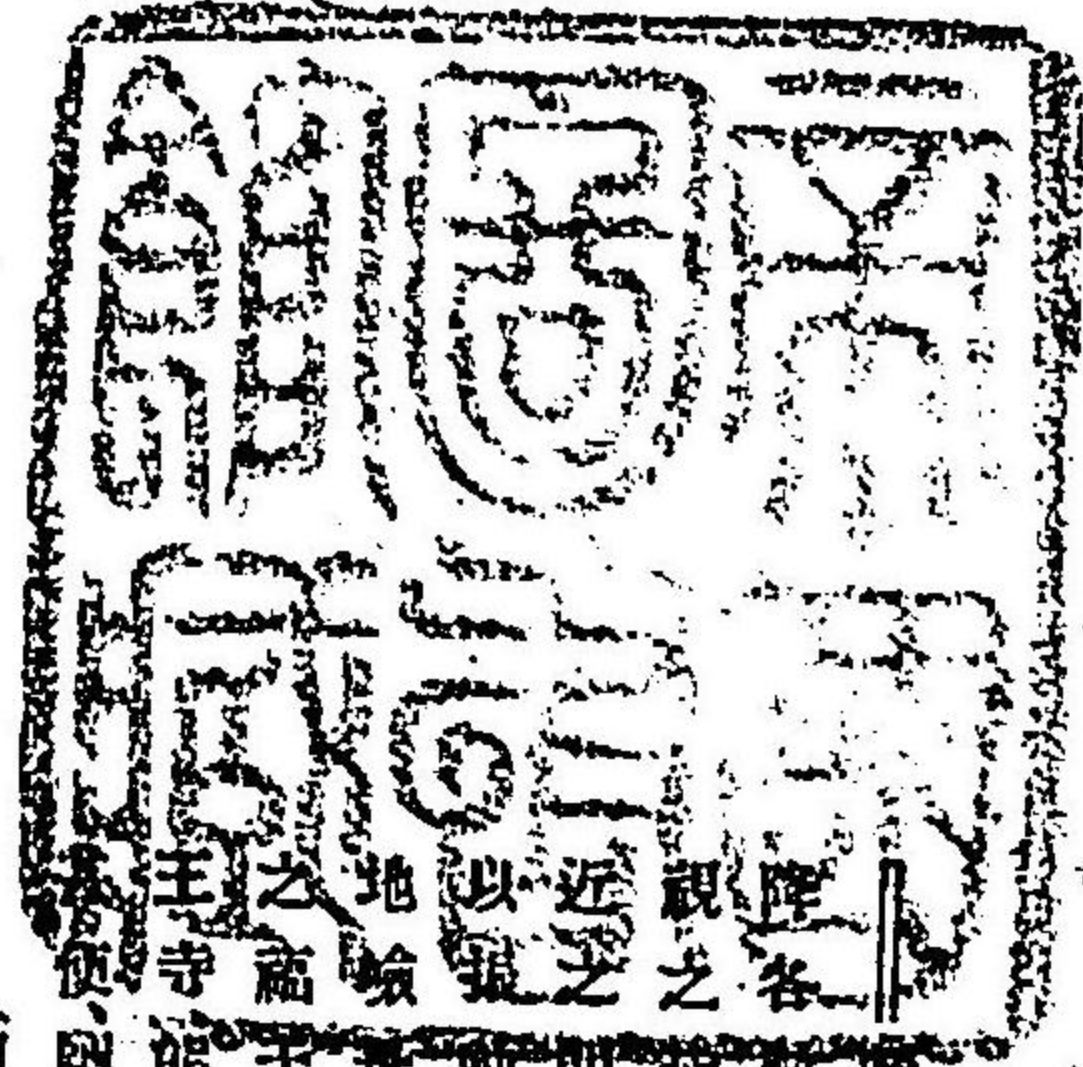
小笠原 白也/著

M43

DBQ-0207



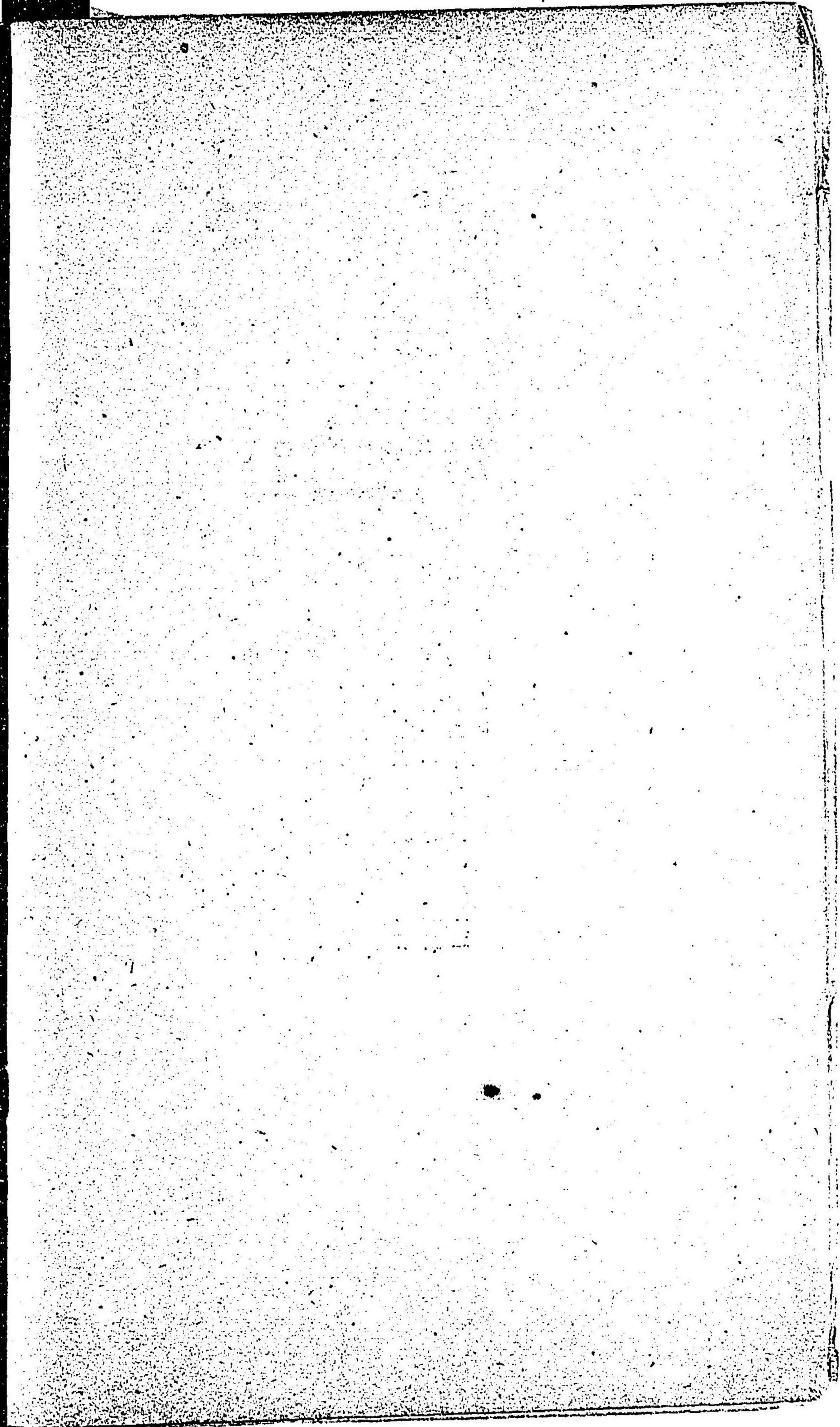
特71
422

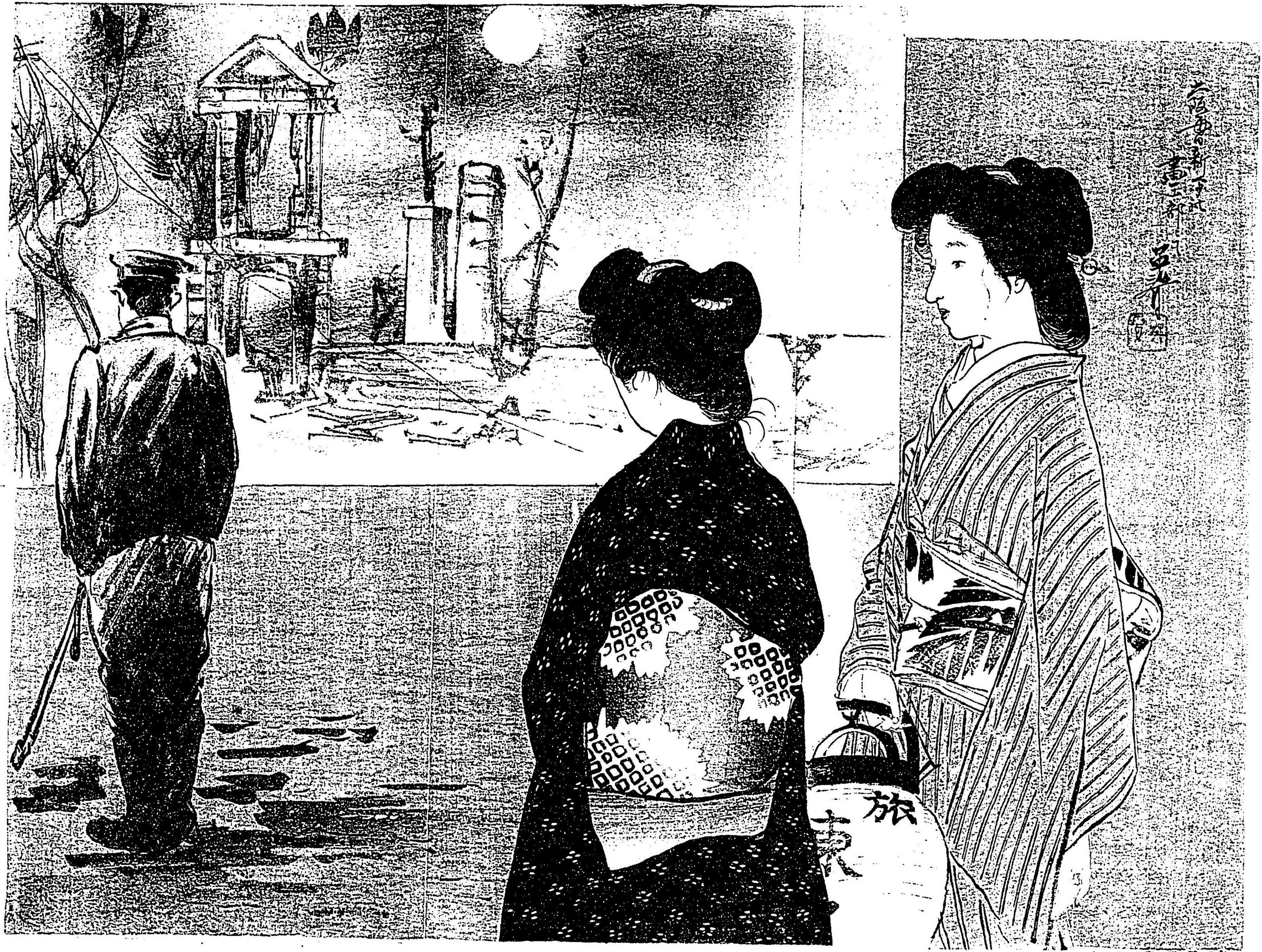


遊石稿

中山、今田諸村、宿本地驛、五日、踰可部坂、登
數里、峻甚於諸坂、頂嶺有一茶店、人馬歇停者
皆懸水百丈、其瀉下長者數仞、短者數尺、嗚咽
動崖谷、其石突怒、偃蹇、皆臨淵水、爭爲懸壑矣、
景奇、若地險、無景之奇者、其將如之何、造物者
予人豈可不思乎、數涉一水、以傳可部、右視福
能城、山皆奇、可部、其寬甚、盛去國部五里、舟運
便、堅鐵之利、聚此而散、
(賴杏坪先生)

明治
43. 7. 23
丙寅





旅
新
月

旅
新



小
妹

第
壹
回

小
笠
原
白
也
着

お琴は今年十九で、四人の同胞中、一番父母に可愛がられてゐる。
お琴には遊ばしふ十一になる一人の弟がある。それ、今もあの大陸の軍歌、

「今から昔六百年、
元の國より我が國に、
頃は弘安四年の夏、
寄せたる敵は十餘萬。」

と、隣家の松ウや新やと戦争事してあはれ廻つて居るのがそれで、その悪作
が甚しいので、毎日のやうに父母に叱られるけれど、また伶俐で、「姉さん、姉
さん。」とお琴を尊敬ひ慕ふ。お琴は潔を一番好く。
お琴にはまたお清といふ一人の姉さんがある、隣村の郡會議員有田といふ素

封家に嫁入つて居るが、お琴とは年が十二も違ふ同胞中の姉で、お琴が十年ばかりの時に嫁入して、自然親愛の心がうすく、姉とはいふものゝ、姉らしい思がしないのと、その有田が素封家なのを鼻にかけるやうな舉動で、父母や、殊に大阪に居る兄さんのことを悪く言ふのが、甚だお琴の氣に叶はぬ。

その大阪に居る兄さんは名を基といつて、今巡查を勤て居る。十九の時に廣島の中學校を卒業し、直に東京に行つて帝都大學に入り司法官となる積りで六度も試験を受けて皆落第し、今年また、七度目の試験を受けるといつてゐる。

お琴はこの兄の基が最負で最負で、今年こそは此度及第して下さるやうにと、毎年々々祈つて居るものを、お清は如何にも馬鹿々々しい、腑甲斐のないやうに言ふのみならず、一家が次第に貧乏になるのも、この基がやうな惣領があるからで、世間に對しても面目ないと言ふことがある。

そのお清が嫁入先の有田といふ家は、近在に稀れた四五萬圓の地主で、其人の仙次郎が一昨年郡會議員に選出せられてから、家運がますます繁昌といふ有様であるに、お清が吝嗇はいよゝゝ甚だしうなつて、「奥さん、奥さん」と村人

から崇められる身分でありながら、下女や下男と共に稻をも刈りに出る、田の草をも掻きに出る、見たところ小作共の女房と變らぬ身装で、夜から夜へと、家内でも野外でも立ち働く、今宵も尻切れ草履を突つ掛け、この春産れた男の嬰兒を抱き、供をも連れず提燈も持たず、さつさとやつて來た。

一家はもう夕餉を済して、お琴は奥の間の縁側に涼んでゐたが、お清の甲高い聲が玄關に訪れたのを聞いて、「あら、また、お清姉さんが大阪の兄さんの悪口を言ひに來られたぞ。」と、團扇の手を休めて聴いてゐると、果してそれである。

今日は土用の三郎、七日の月は向ふの高い山端に傾いて、澄み渡つた大空には一面の星が磨き出され、地には膚に障る風もない。弟の潔は夕餉の箸を投げたや否や、碁方の戦の續きをするとして隣家へ遊びに行き、臺所には、下男が下手な尺八の聲がするばかり、低い追手を取り廻して、聞とした庭の柘榴の樹蔭に、何時でも置き捨てゝある長い腰掛から談話の聲がする。お琴が居る奥の間の縁側とは、庭を隔てた門が一つあるばかり。

「どうも今年の熱いこと、今日でもう丁度二十日、雨といふものは一滴も降ら

ん近年にない熱さで、大阪あたりも定めし熱いことであらう。」
と、優しい母の言葉を打ち消すやうに、「少々熱くても、この熱さが稲には薬
ですよ、土用の天氣がこれで續くと、今年はお作米も取れませう。」

と、口早に言つて退けるのはお清である、お琴は此方から、「兄さんが居なさ
ればこそ、大阪も熱からうと有仰るにお母さんに對して、何といふアノ情ない
ものゝ言ひ方であらう。」と、もう怫然としてなほ耳を澄してゐると、お清は大
辭に、

「お母さんもう田の草掻きは済みましたかね。」

「あゝ、昨日からやうく二番草に取りかゝつたよ。」

「さう、昨日から？ 何故そのやうに手間取るでせう、私共の内には、もう昨
日二番草を了つて、明日からは畠物の草取りを初めやうと思つて居ます位です。
お琴も少しは草取りに出ますか、晝でも内で小説位読み読みして居るのでは
ありませんか。」

と、故意と、聞けがしのやうに、餘り嬉しいものゝ言ひ方ではない。

「いゝわ、お琴もこの節は、よう働いて、毎日野外の仕事に精出して呉れます
よ。」

と、お母さんは、言譯をなさる、お父さんの辭は聞かず、をりく貰盆を叩
かれる音ばかり。

第貳回

お琴が家は姓を本地といふ、此邊では誰知らぬものもない家柄で、名主庄屋
の時代には相當の權勢を利かし、所有の田畠山林滅らしもせず増しもせず、代
代五六千圓の地價もちにて、旦那様、奥様と今も門閥で村人を壓へてはゐるも
のゝ、小作の件からも陸軍の少尉が出て來る、汝が汝がと呼び捨てにしてゐる
小百姓の息子に立派な醫者が出來る、世はだんく理窟がましう開けて、門閥
ばかりでは行かぬことゝなつて、お琴が父の六郎治も、庄屋から戸長村長と勤
めて來たが、政友會だの進歩黨だのと、近頃は村會議員の中にも騒ぎ立てる輩
が見はれ、議員の選挙といふ選挙には、何時も紛争が絶えず、學校の建築や道

路の布設や、共有金の處分基本財産の取り扱ひにまで、黨派の喧嘩がうるさく
 てたまらず、殊に一昨年の郡會議員の騒ぎには、お清が良人の有田仙次郎、即
 ち自分の婿が候補者であつた關係から、二度ばかり警察に引つ張られて、理窟
 の言へない、小心な、お人よしの六郎治は大變に怖けて、もう村長などするも
 のでない、斷然それを罷めてからは、今年還暦の齡で、せつせと百姓仕事を
 働いてゐるが、悲しいことには、惣領の基が、立派に及第するのを待つてゐる
 甲斐もなく、毎年々々落第するばかり、加へて村長在職中から、何時とはなし
 に負債が出来たものゝ、その門閥に對しても、苦しい内處の體裁は他人に知ら
 せたくない、何とかなるであらう、何とかなるであらうと考へながら、去年村
 長を罷めて事務引繼の際には、少からぬ金を婿から借りて吐き出した。だから、
 我が娘ながらお清に對しては、兎角言葉まで控へ勝ちな。なほその他の負債を
 合せて差引したなら、五六千圓の財産は、その半分も残るまい。けれど、その
 古い家柄を潰して、田畠山林家倉を賣り拂ふて了ふことは、先祖に對し世間に
 對してどうしても思ひ切れず、利息の日々蓄むのをも、見す／＼別に善い分別

もなく暮してゐる。これが爲に大阪への學資も、一昨年からは止めて了つた。
 お琴は家の此有様を知らぬではない、いや、能く知つてゐるから、姉のお清
 がまたしても、我こそ顔に、お父さんやお母さんに指圖がましいことを言ひ、
 兄さんのことを悪くいふのが腹立たしく、どうぞ、兄さんが及第して下さるな
 ら、たとひ身代では姉さんに及ばすとも、裁判所の察い判事になつて、郡會
 議員位に頭は下げることなからうにと、秘々と悔しく思ふ。
 お清はまた、我が里方の身代に容易ならぬ疵が出来、弟は試験に負けてばか
 りになると、舅姑の手前も、連れ添ふ良人の手前も面目なく、初のはごは、身
 代ではとても肩を並べる譯には行かないけれど、家柄を比べたなら、嫁入先の
 有田よりも我が里方の本地家が數等の上、現在良人の仙次郎よりも、弟の基が
 學問では勝い、どうぞ早く試験に及第して呉れるやうにと祈つてゐたが、その
 甲斐もない落第續きに、家柄の古いといふだけでは、我が肩身を廣くすべき誇
 とならず、到底弟の基は、裁判官になるだけの智慧はないものと見限つた後は、
 是非とも里方の身代を回復し、負債だけは辨濟させねばならんと、烈しい勞働

の人となり、折々来ては生計向の世話を焼くのである。

母はお袖といつて今年五十八、前齒は三四年來上下ともにすつかり抜けて、髪も半ば白くなつて、形ばかりの小さい圓鬘を後に結んで、ものゝ言ひ方起居動作も上品である、誰の言ふことでも、「おゝ〜、然だ。」と、逆らうことはない、まして、お清に對して何を言ひ張らうぞ、お琴が小説など讀む暇もなく、この節は下女や下男や雇人等と共に、毎日野外に出て田の草掻きをするその有りのままの事實を、申開のやうに話すと、お清は反つて疑はしいと言はぬばかりの口吻で、

「まあ〜、それなら宜しいけれど、あの娘もごちかといへば仕事は好きな方ではない様ですから、お父さんでもお母さんでも、可愛もありませんが、百姓は娘でも尙且野外の仕事も教へておきませんと嫁入してから難儀しますよ、餘りに甘やかしますと、兄弟は皆詰らんものばかりだと人に嗤はれます、何時でも浴衣に廣帯位で居るやうでは、第一家内の經濟も保てますまい……………」と、ますます大辟に言ふを、此方で聽いて居たお琴は、美しい顔にぶり〜

して、衝と起つて一間に入り、手早くその浴衣を脱ぎ捨て、洗ひ晒した紺の單衣と着替へ、しごきの細帯をぐる〜と、再びそつと椽側に出た。

第參回

かん〜と熱りつけるやうな土用の日の光を背中に浴び、下女や下男や雇人等に立ち雜つて、汗たら〜、稻葉の茂つた田に這ひつくばひ、今日も朝から草を掻いて、やれ〜とばかり、夕餉を喰べて行水を了つて、それから着た浴衣も去年買つて貰ふた井桁紵の木綿物、結んだ帯とても友禪の古びたもの、それを何ぞや浴衣が白うて、赤い模様帯にあれば、お清姉さんは伊達にでも着るかのやうに思ふのかと、お琴は負けぬ氣象の敏捷く、平素の單衣と着替へ、ぐる〜帯の姿で、椽側に出た。

お清は依然高聲に話してゐる。

「……………」落第せられましたは基に如何な思慮があるか知りませんが、第一世間に對して面目ないではございませぬか、寧ろこの際呼び返して、百姓さ

せてもよし、またあの身體が情けて、百姓仕事が出来ないならば、村長なり助役なり、役場に出るもよからうと、良人は昨夜もさう言ひますの、お父さんあなただの威光で呼び返しなされるが善いではございませんか。」

「それが僕も度々戻れ戻れといふのぢやけれど……」

と、始めて父の寂びた低い聲がする。

「戻れ戻れと手紙先でいふ位のことでは間に合ひませんよ、あなたの威光で、歸つてしまへ、いよく歸らないのなら此方にもその積りがある、といふやうに乾度言ひ渡してしまふか、それとも迎へにやるか、たいしはお母さんでもあなたでも急病だといふ電報でも打ちますか、早く引きもどしておしまひなさい、それでも頑固に戻つて來ない基なら、相續人についてもまた考もあらうぢやございせんか。」

と、お清が一人で喋々つてゐるやうだ。

「それもさうだけれど……」

母が何事か言はうとするを、お清はまた打ち消して、

「お母さん、さうだけれど位のことではありませんよ、この安藝の山縣でも可部峠から北で、本地といふ村の名さへ苗字にして、身代は兎も角門閥からいへば、まあ二番とは下らない家の相續人が、わざわざ大阪迄出て巡査を勤んでも善からうぢやございせんか、私は耻しくて他人があなたの弟さんは大阪で何を爲て居なされますと問ひましても、何とも能う答へませんわ、その上、當家に負債が出来たのも、一つは基が學問の資本ではございませんか、中學から大學へ、八年の仕送に、毎年の試験料でも十圓づつで、書籍代まで勘定したなら、何千圓になります、こんな詰らんことかも一つございませうぞ、過ぎたことは仕方がございせん、急病だと言つて、早く引き戻しておしまひなさい。」

「それやアお前、僕もこの年齢になるのだから、彼が居て呉れると何かについて仕合すから、歸れ歸れと言ふてやつたのは一度や二度の話ではないが、もうこの三四年といふものは、學資は一文もやらず、基も亦、今年だけでも一度といふから……」

「それがサ、お父さん。」と、お清が聲はますます尖つて流暢に、

「あなたは基が及第すると思ひなさつてか、基はあれだけ落第したから、歸りたくても歸られずまい、反つてあなたの威光でか、急病といふのでか、歸つて来いと言はれるのを待つて居るだらうと思ひます、口ではもう一年と言ひませうが、今までの試験振を見ましても、とても及第は請合れません、彼も中學校では特待生にもなり、大學だけは優等で出たにもせよ、何千人といふ志願者の内で、僅三十人か四十人しか及第するものゝない困難しい試験に、今年とて及第がなりませうか、一日でも長くおけばおほくほご彼が身の爲にも家の爲にもなりませんわ。」

いよく父母を言ひ込めて、基引き戻しの説を弛めない。

折柄、隣家で騒いでゐた弟の潔の大聲、野にも山にも響くほど、

我が日本の武士はみな、おのれ憎つくい元軍め、

日本男子の腕見よと、進んで敵を敗りたり。」

と歌ひながら、元氣よく歸つて来て、

「お母さん、隣家の松ウは馬鹿だなあ。」と、喚めく。お清は、

「まあ、亂暴な悪い子だこと、この子も試験に負ける落第坊主になるよ。」と、窘めると、透さす、

「何あに、姉さんところの金太郎がほんとの落第坊主だ、僕等は落第や何かせんよ。」と遣り返す、金太郎はお清が良人の弟で、村の高等小學の落第坊主である。

此方から聽いて居たお琴は、愛弟がこの一語の痛いほど氣味の快いに、覺えず二つばかりボン／＼と手を拍つて、

「潔や、潔や。」と、呼び立てた。

第四回

潔は直にお琴が側に駆けて来た。

まん圓な大きい黒眼をぐる／＼させてころりと横になり、細い二尺ばかりの根鞭を宙に振つて、ピニ／＼と鳴らしてゐる、何時何處から持つて来たのか、自分が大將となつて戦争をする指揮刀で、今宵も此鞭で隣家の松ウを降参させたのである。

お琴も潔が側に横になつて、お父さんでもお母さんでも負けて居なさるお清姉さんを、たい一言の下に遣込めたこの勝利者を歡び迎へて、

「ねわ、潔、お前能う姉さんにあんなことを言つて。」

明るい洋燈の紙笠の下に、わか／＼しい血に肥れた二重頤が、黒く冴れた眼を笑はせて覗くと、

「それでも落第したことのない僕を落第坊主だといふもの、落第坊主は大きい姉さんどころの金太郎ぢや。」

潔は誰憚らぬ大聲にいふ。お清を憚らぬものはたいこの潔ばかりである。

「アア、そんな大聲で、姉さんに聞ゆるよ。」

お琴は可愛い呪む真似をする。

「聞わたつて善い、僕は金太郎が一番嫌いだ、僕より二歳も上のくせに泣虫だ、今度来たなら戦事してまた泣かせてやらう。」

「オホ、、。そんなこと。」と門の方を指して、「怒られるよ。」と、お琴が辭は細く、潔は平氣で、根鞭を壁の上に投げ出し、

「何かに、怒られたつて、大きい姉さん位怒くも何ともないや。」
「恐くない？。では姉さんが好き？」
「嫌ひやー。」と喚めき立てる。お琴はこの辭がお清に聞かせたくもあり、恐しくもある。

「さう、では大阪の兄さんは？」

「大阪の兄さんは嫌ひぢやない。」

「それ、その通り、潔でも大阪の兄さんが嫌ひぢやないでせう、それに大きい姉さんは今晚も来て大阪の兄さんの悪口を言ふのよ。」

「如何いふて悪口を言ふの。」

「落第坊主だど。」

「失敬だなあ、僕聴いてやる。」

起きて耳を飲てるお清、潔が大聲の悪口が聞けたらしく、

「小作だ貧乏人だと馬鹿にしたものゝ中から、たつた一通でむつかしい醫者の試験に及第するものもあり、陸軍の將校になるものもあるのに、私等の一家は

落第坊主ばかり、せめて學問でなりとどうかこの門閥が保つて行きたいと思へば、それも出来ないことになつてしまひます、これからはお父さんお母さん、身代を起して、あまり親類などに迷惑をかけないやうにしませう、内の基見たやうに落第坊主に、何千圓といふ資本を注いでも、とても學問で出世はなりませんから……。」と、お清は變に拗けて、「あの私が來ました時、お琴が浴衣姿をちよいと其處で見ましたが、何處に居ますか？」

お琴は惘然とした、叱られるであらうと、間もなく、

「お琴や、お琴や。」

母の聲である、

呼ばれて是非なく、不性無性に行く、潔も直に跟いて起つ。

「あゝ、お琴か。」と六郎治とお袖とが中間に腰をかけてゐたお清は、胸部も見はに嬰兒を抱き、ぐる／＼と管捲にした髪の亂を片手で撫で上げながら、

「お前は基が落第を如何思ふ。」

詰るやうに問ひかける。その野仕事の日焦れた顔は痛く老けて、お琴が白

い顔とは、姉妹とは見ねぬ位である。

お琴はかける床几がなく、柘榴の下の石に腰を据ゑ、何とも返事をせぬ中に、「兄さんの試験はむつかしいからだ、大きい姉さんのところの金太郎君も落第した、大きい姉さんはあれを如何思ひなさる。」

第五回

年齢よりも早熟た潔がこの反問は、如何に小兒とはいへ、お清が胸にはグツと障へた。

「マァー」と言つたばかり、睨めつけたやうだが、如何な怖い眼であつたかは柘榴の暗い陰になつて分らない、お袖は驚いて、

「潔ッ。」と叱つて、「何をいふ。」と寄り着いて來た潔が背中をば、團扇を舉げて軽く叩く真似をすると、敏捷い潔は、するりとその下を潜つて逃げて、玄關から座敷に跳び上り、臺所の方に走つて行つて、下男が吹いて居た尺八を引つ奪

り、自分でスーッとやつて見る。

これが恰度、お琴が斯うせよと教唆へた舉動のやうに見れて、お清はますます怒る、懐にスヤッと乳を含んで居た嬰兒は、俄に泣き出す。

「わうるさい。」

その聲の鋭さに、お袖は嬰兒の機嫌を賺るのか、お清の機嫌を迎へるのか、
「お、お、如何した、お前が、お前が、可愛い〜。」と抱き取つて、門の邊を揺ぶり歩行く。

お清は屹度膝を繕ふて、お袖が捨てた團扇を取り、氣忙しく煽ぎながら、

「お琴、お前は……、何でがんすか……。」と、嫌に叮嚀な方言で、「この頃は野外に出て能う働いて呉れますさうで結構だけれど、基をあのまゝ、大阪におくが宜いと思ひますか、事によつては良人が大阪へ迎へに行つても宜いと言つて居られますのでね、お前の了見も聞いておきたいと思ひますの。」

こは、お琴位に可否の意見があらうとは思はないが、父の六郎治がこの問題になると、何時でも黙つて黙つて、戻すとも戻さないとも断然と言ひ切らぬも

どかしさに、お琴をまで撥いて、自分の言條を立て貰かうといふ考からである。

お琴は身動きもせず、黙つてゐたが、

「姉さん、私はね、兄さんが氣の毒ですよ……。」

「それやお前、氣の毒なのは誰もです、それでお前の了見は？」

「私はね、も一年、今年だけは試験が受けさせてあげたいの。」

「アア、お前は……。」

お清は乗り出すやうになつて、

「基が今年は及第すると思ふのかへ。」

その言葉の調子が如何にも基を輕蔑み、お琴を嘲笑るやうに聞けたので、お琴の胸には反抗の氣がむら〜と昂進つて抑へ切れず、

「わゝ、思ひます。」と言つて退けた。

「オホ、いゝ、お前は何をいふの、私には分りませんよ。」と、嘲笑は急に憫笑といふ形相になつて、

「基が及第せうと信ふものは、儘かお前一人でせうが、もし及第がなるなら、

今までに爲てゐるさうなもの、それともお前は、この家が潰れて了ふのも何とも思はないの？」

斯うなつては、優しいお琴ももう恠へられない。

「今年もう一年、兄さんが試験を受けなされると、この家が潰れて了ひませうか。」

「アア、お前は姉さんに向つて理窟を言ふの？」と、更に腹立たしく、「潰れるではがせんか、これまで基の爲に、何千圓のお金が費つたと思ひなされる。」

「それは私は知りません、今年一年だけで……………」

「いゝね、さうではがせん。」と、お清はますます堰き込み、「お前は潔と一緒

に私を何とも思つてゐません、理窟です、窟理です、もし、今年また落第した

なら、お前如何します。」

お琴は、斯うまで嚴しう談判られるのが残念でならぬ、お清の爲に掻き廻ら

れるやうが氣がして、

「私、謝罪ります。」と言ひ放つたときには早くも嗚咽あげて、

「兄さんと一緒に手をついて謝罪ります……………」もし、兄さんが及第なすつた

……………」

お清は、この、兄さんと一緒に手をついてといふ一語が、自分一人を退けも

のにしたやうに受取つて、少しも逡巡れの場合となつた。

「オヤ、お前泣いて、可訝な人でがんです、基が萬に一も及第しましたなら、私

は良人と一緒に謝罪りませう。」

當初から黙つてばかり、貰盆を叩いてゐた六郎治は、

「何をいふ、姉妹で……………」

第六回

蕪水草を周囲の境に植わせた脊戸の畠には、大角豆菜豆などが藪のやうに茂つて、その花ばかりが星あかりに白く見える、丈の高い玉蜀黍といひ葉の出来盛つた青芋といひ、今年は豊年の上々作、土用昨今の照る日は眼の眩むほど熱いけれど日が暮れて夜になつて、團扇を片手に裏座敷の室から、この畠を見越して、隣村の遠い山まで横く野外を眺めながら、さて膳の上でゆるく一本を傾

けることは六郎治に取りては一日の楽しみであるのが、今宵娘のお清が来て、基のころからお琴と姉妹喧嘩までしたので、寝るにもどうも気が落ちつかぬ、その鬱々と物思はしげな、顔を見兼ねて妻のお袖、夕方買ふた香魚を焼いて、吹めてまた一本を膳の上に持つて来ると、六郎治が機嫌は急に直る。元氣な潔は終日の戦争事に疲れて寝て了つて、親子三人は此室椽側に、お清が怒つて歸つた後は、大風が凧いだ後のやうに、家内は寂寥としてゐる。

「真人。」

お袖は小銚子を取り上げて、膳の上の猪口に注ぎながら、尙且浮かぬ心配顔。「お清が言ひ方もあんまりですよ、彼女は小兒の時から勝氣な性分なのと、嫁入先が身代の善いので、負けまいといふ心から、あんな強いことを言ひますので、まあ餘り心配なさらぬやうに……。」と、真人と娘とを團扇で煽ぎ別ける。六郎治は黙つて腕組したまふ、膳の上の盃を眺めてゐると、お琴は側から、「私、残念ですわ、いくら姉さんが勝氣だつても、あんなに言はいでも宜いわ。」泣いた目元まだ赤く、父と母との顔をぢろく見比べて居ると、眼には慈悲

の光を湛わながら、削けて来た兩頬に寂しい微笑を含んだお袖は、娘をちらとながめ、

「親でもう、年寄ると兒等に負けねばならんよ、お前でも潔でも、毎時も、お母さんを負かすぢやないか。」

「それやお母さん、姉さんがあまりに酷い言ひ方でせう、私腹が立つて、あの通り言ひましたの、お清姉さんのやうに、お父さんやお母さんを負かす考で、何も言つたことはありませんぢやありませんか。」

「ほんとにのうオホ、お前と潔とは善い兒だけれど……。」と甘やかされてお琴は、

「いやよ、お母さん、お母さんはまたしてもあんなことばかり。」

「ほんどよ、それに大阪の兄がお父さんやお母さんのむねやまで……。」とまた情け返る母を見て、

「それは私も残念に思ひますわ、今年といふ今年は屹度ね、お母さん……。」お琴は自分の膝を軽く拍つて、またも涙ぐむ。

「もし良人、少とも盃が乾きませんこと、注ぎませう。」と、お袖はまた銚子を取りながら、「大阪の兄がことなぬ、良人の考は如何つきました、お清が言ふ通り、急病だといふて歸らしますの？」

「さあ、そこだ、基が落第についてお清は強いことを言ふやうだが、お清とてそれが言ひたくて言ふのぢやない。」

六郎治は徐に腕を解いて、盃を取り舉げ、たゞ一口に飲み干して、また注がせて膳の上におき、

「一度や二度の落第なら、その困難しい試験をどうくこの通り及第しましたといふ自慢にもならうが、五度六度となると、世間の人が皆嗤ふ、その嗤ふものは皆お清とおなじやうに、巡査やなごさすよりは、寧ろ呼び戻しなすつては、儼に向つて勤めて呉れる、そりやお清ばかりぢやないよ、ところが基も全然の馬鹿ではなく、もう今は學資も送つてやらないのだから、序にもう一年放つておかうか、家倉田地も賣つて借錢も拂ふた上、基が望む丈の學資を與つて、も一度東京へ出して、何處までもやらして見るか、それとも親の威光で呼び戻

すか、三者について先程から色々考へたが、どうも引き戻す方が一番上分別かと思ふ、戻つて役場へ出るもよからう。」

また俯視いて熟考へ込む父の横顔を見ると、後に撫でつけた白髪は亂れ、凹んだ眼はやゝ潤んで、太息が洩れるか肩さへ動く、あゝお父さんは年寄られた、傷はしいことゝお琴は思つた。

第七回

兄の基を引き戻すといふことは、母のお袖はさすがに大賛成である。お琴とても、家や田地を賣つてまで、兄の學資にしたら善からうとは思はないが、今呼び返すといふことは、どう考へても、兄に對しては氣の毒なり、自分はお口惜しくてならぬ。

「けれどお母さん。」と、口には母を呼んで、目には父を眺めながら、「兄さんは今年は屹度及第なさるですよ、私、さう思ひますわ、もう一年だけどうぞ……。」と、謝罪るやうにいふ。

六郎治はにつここと笑つたが、その笑は直に消えて、もとの寂しい顔となり、
 「お琴ばかりがさう思ふても、その及第がどうも覺束ない、今年また落第して、
 落第が七通にもなると、彼もますます歸り悪うなるであらうし、僕等もだんだ
 ん年寄つて来て、何時如何ことがないにも限らんから、一日も早く呼び戻して、
 嫁でも貰らうて、家の世話をさすのが善からう。」

「それでは如何あつてもですか、お父さん、今年もう一年待てなくて？」と、
 お琴は跪き直して父の方に向く。

「待て待てないとはないが、僕も年が年なり、親類は嚴しう言ふ、かたぐ戻
 した方が好い。あれが判事なり検事なりになつて、廣島へでも戻つて呉れるな
 ら、それは家の譽ではあるが……。」

六郎治はまた太息を吐きながら、乾した盃をまた取上げた。

「それも然うだけれど、私はあれが判事などになつて呉れるよりも、世間の手
 前や親類の手前、今戻つて呉れるが善いと思ひます、惣領に生れたものが、何
 時までも他國へ出てゐるは見ともないことでもあります、なあ、良人。」

お袖はまたくり返す。六郎治が胸にはまだ、成業の名譽といふことが繫つて
 ゐるらしい。

「ですけれどお母さん、兄さんになつて見ますと、残念でせう。待つて待てな
 いことはないとお父さんも有仰るのですから、もう一年だけ是非、辛抱して……。
 お父さん、私がね、いつそ……。」と、お琴は兄もるにもう徐と坐つても居られ
 め膝を父の側に進め、

「私が寧ろ、大阪へ行きました、お父さんやお母さんも斯う有仰る、お清姉さ
 んも斯ういふ家の生計も困難しく、村の人も嗤ふから、今年の試験にはどうで
 もかうでも及第して下さいと頼みませうか。」

と、思ひ詰めた涙が、ちよろく黒い眼を走しる。

「アハ、。」と六郎治は笑つて、「お琴が頼んで及第がなるものなら、僕がそく
 から頼んで居るのぢや。」

お袖は娘の大膽に驚き且つ呆れて、

「マア、何をお言ひだ、この兒は、私下さへ長年の京脂を今だに能うしません

に、お前一人で大阪へ行かうと思ふのかわ？」
「わい、私は一人でも行きます、参りますお父さんやお母さんが許してさへ下さつたなら……。」と、逡巡もせぬ娘が決心の色を見て、

「お前それほごまめに兄さんのことを念ふのかわ？」

「わい、お母さん、私、どうしても兄さんに及第させたいの。」

「そればかりはお前がなんぼ念ふても及ばんことだよ、そんなことは云ふても呉れな……。良人、お琴にまで斯な心配を懸ける基ですもの、これは呼び返すに限りませう……。」

「ところが、僕が病氣だといふてやれば彼が魂消るであらうから、も一應手紙を出して、それで歸らねば病氣といふことにせう。」

「それでは、どうあつても、兄さんを呼び返しますの？」

兄思ひのお琴が建議は、遂に両親の採用にならなかつたと共に、全然姉のお清に負けて了つたやうな聞い心の裡に、「いつを脱けて遁げて大阪へ行つて、私から兄さんに頼んで見やうか知ら。」といふ心が、バツと稻妻のやうに閃めいた。

第八回

脱けて遁げて、大阪へ行かうか知ら——といふントした心の閃は、兄が及第の名譽を想像ひ、落第して空しく歸る笑止さを考へて、いよいよ烈しくなり、お琴が心は混乱に紛糾れて眠られず、夢現の間に、夏のその夜は早くも明けて、脊戸の細道を往來する人音がする、可部阪畔の方に行くのであらう、大群の追分節と共に、駄馬の鈴がナヤロン、カロンと響いて過ぎる。

平常ならば、三度も四度も起されねば目覚め難い朝を、昨夜姉のお清に言はれたこともあるので、お琴は直に刎ね起きて、手水もそこへ、下女や下男と朝餉を喰べ、直に田の草掻の身支度にかゝつた。

手には手甲を足には脚絆を、矢筈紵の帯をかつちりと、藍の香の高い十字紵の單衣の裾を襷げ、白い襷に袂を絞つて、梳き上げたばかりの大束髪に、雪見笠を軽く戴き、ボツナリと肥わ太つた圓顔の二重願に、その紅紐を締めた姿は、どうしても兄の爲に苦勞するやうな氣があらうとは見ねぬ無邪氣な娘、小走り

に走つて門に出ると、七八人の雇人は男も女も打ち連れてがや／＼とやつて来て、

「お早うがんです。」

「善いお天気でがんです。」

「お手傳に参りました。」

と、口々に言ふ、お琴は一人々々に叮嚀な挨拶をして、すらりと並んで門田に入る。やがて東の山端にさし覗く日はきら／＼とする。見る眼も眩いほどに茂つた稲の葉は、屈んで草を掻く身の笠の端を見すばかり、尖つた葉末の錆は、顔や手首をつまみまはす中を、田から田へと、汗すら拭ふ手もないけれど、大勢が連節の歌、他愛もないことに笑ひさ／＼めく調子に紛れ、昨日までは苦しきとも思はなかつたが、お琴は今日、少ともうさ／＼せすたゝ湯のやうな田の水をばさ／＼と掻いて行く、百姓の仕事ほど辛いものはなからう。

「お嬢さん、あんな今日は気分が悪うがんですの、少とも面白さうにないぢやが

んせんか。」と草を掻き掻きいふて呉れる。

「いゝわ、私、少とも気分が悪かありませんがね……………」

「それぢやあ歌ひませうや、昨日のやうに、——歌でご懇綴が下りやせんと、歌の文句もがんです。」

「オホ、／＼、どうぞ歌ふて下さいね。」

「やりませうかい、お嬢さんも合けて呉れんさいよ。」

「わゝ、合けますとも。」

女房は歌ひ出した。

『幼なじみは七度もどせ。』

糸のやうに長く波のやうにうね／＼と、稲葉をわたる風と共に美しい聲で音頭を取ると、がや／＼と噪いでゐた六七人の雪見笠は聲を揃へて、

「ヤレ／＼、どうなら／＼。」

『二度と戻すな後連を。』

「ヤレ／＼、どうなら／＼。」

お琴は歌ひもせねば和しもせん。歌はそれからそれへと變つて、日はますます

す熱く、はや十時の晝時となつて、皆々一度田から上つて家に歸つた。臺所で
はこれが大車座になつて、また一しきり賑しいことである。
お琴は手足を洗ひ、笠を脱ぎ捨て、奥の間に行つて見ると、父の六郎治は手
紙を書いてゐる。どうやら基に遣るのらしい。

第九回

半紙を横に半分に截つて糺合せた長い巻紙を手につけて、六郎治は手紙を
認めて居る。お琴は斯くあらうと思ふて、田の草搔も面白くなく、晝食を待ち
かねて歸つて来たのであるから、直に父の側に來て、斜に跪いて覗き込む。
「お琴か。」と、六郎治は眼鏡越しに娘を見て、「熱がる、お前が顔の汗よ、此處
に團扇がある。」と、床を顧て起たうとするを、
「いや、お父さん、私が……………」
お琴は團扇を持つて來て、手巾に汗を拭ひながら、三度に二度は父を煽ぐ、
「僕はよろしい、お前熱がる、紙が動く……………」

「オホ、お父さん、兄さんへ？」

「お、今書いて居るのぢや。」

「さう……………」

お琴は父の遅ひ筆の運びの終るを待つてゐると、お袖も亦臺所から來て此處
に跪き、

「お前、お晝食は？」

「まだです。」

「喰べて來なさい、皆が賑かに喰べて居る。」

「はい。」

とは言つたが起たない、やうく手紙を書いて、その端を剪刀で切り、兩手
に持つて、此方に向き、

「斯う書いたぢや。」

お袖は膝を進めて聞く、先づ時候の挨拶、當方にも皆々恙なく候へばご安心
なさるべく候と、何時何方へでも定つた文言で、偲と談辭まで改めて、

「二三年前より度々手紙にて申上げ候らへ共、其許様一向兩親の申すこと御聞き入れなく、歸國成されざる條、その儀心得ざることに御座候、拙者ならびに母兩人とも、もはや定命を過ぎたる老年に相成り、親類のつき合にも難儀致し、その上近年は暮し向き萬端手元難澁にて、別けて當年は米價わづかに九圓にて豊年が豊年とも相成らず、税金さへ滞り勝と相成り、如何とも致し方これなく候らへば、巡查など相勤めてまで、六ヶ敷試験に及第無用に候、左様に候らへば、この書狀着次第速に御歸國成さるべく、その積りにて家内親類皆々待ち入り候、呉れぐも頼み入り候也、以上、

「斯う書いたが、これでよからう……。」と、六郎治は眞益を引き寄せて一服する。いつもの手紙には似ず餘程劇しい文句である。

お袖は感心して聞いてゐたが、これで基は屹度歸るものと、

「あの、ちよつと書き添へて下さいな、彼が戻る折の支度に浴衣を送つてやうかあんまり見難らしい身装をして歸るも嫌でせうから、なんなら羽織も……。」

「さうだなあ……。」と六郎治は首を傾けて、「いや、それはいよく歸るといふ

ことになつてからでよからう、でないよ、甘いことを見せると、歸りたくなからうから、また歸るとなるよ、僕が迎へに行つてやる。」と、親の情は何處までも深い。

お琴はもう胸が通つて、危い涙を見られまいと、衝と起つて裏座敷の室に入り、箆筒の前に伏しついた。

折柄、弟の潔がどたばたとやつて来て大聲に、

「姉さん、姉さん、お晝飯をお上りよ。」と、呼び立てたが、この様を見て、

「姉さん如何した、わ？。お晝飯をお上りよ。」と、急に小聲で側に寄りつく。

「あゝ、姉さんは後から喰へますよ。」と邪慳にいふ。

奥の間では六郎治が、潔、潔と呼び立てる、潔は直に走つて行く。

「お前、この手紙を郵便函に投れて来い。」と父の聲。

「隣家の松ウ等と戦争事して、途中で遺失すぢやないよ。」と母の聲。

あゝ、兄さんは、どうくお歸ることになつたかと、思ふと同時に、今晚脱けて出て大阪へ行かうと、お琴は倏ち決心した。

第十回

六郎治は奥の間に、下婢や雇人等は臺所から表の間に、下男は裏の涼しい荷棚の蔭の物置部屋に、それ／＼晝寝をして、お袖は裏の菜園に蒔子や大角豆を摘みに行き、手紙を入れに行つた弟の潔はまだ歸つて来ぬ。この暇にと、お琴は脱けて行く準備に取りかゝつた。

竊と箆筒を開いても、怖しう抽斗の環が響く。曾て父母の庭訓を破つたことのない處女には、盗賊するやうな心がして、自然手も顔ひ足も戦くを、音せぬやう取り出したのは、阿波縮の浴衣一枚に、伊豫紵の單衣一枚。お召の單衣と博多の帯とに手をかけても見たが、脱げ出す身には荷物が邪魔になる、兄さんに及第を頼みに行く身には善い衣類は入らぬこと、この秋の末までは大阪に逗留して、歸る時には兄さんと一緒に。と思ふと、冬物も欲しいけれど、それも止めて、友禪と桃色縹子の打ち合せ帯一筋を取り添へ、此方の小抽斗から、小学校以來、二十錢三十錢と蓄へて、五十餘圓となつた郵便貯金の通帳一冊、こ

れだけは手早く木綿の風呂敷に包んで見てさてこの隠し場につたが、背後に立てゝある屏風に眼がついて、それと壁との間に押し込めた。

先づ、これで一つは安心したが、次には大阪までの小使錢である、鏡臺の抽斗を開いて、自分の紙入を取り出して見ると、一圓紙幣が二枚と、五十錢銀貨が三枚、外に小錢を讀んで見ると、僅に四圓の額に足らぬ。それでは汽車貨車賃を如何せう、お父さんの用箆筒は鏡前を卸してもなく其處にある、昨日米を賣つて三十圓餘り、そのまゝその中に納めてあることは知つてゐる、お母さんの財布にも二圓三圓の金はあらうが、貧乏すればこそ、兄さんをも呼び戻すといふ家の生計に氣が注くと如何してもそれには手がかけられぬ、ままよ、なるべく使はないやうにして、廣島まで行つて、郵便貯金を拂ひ戻して貰つてもよし、何處かの旅人宿で立て替へて貰ふてもよし、このまゝ行くこととせうと、前の先までも考へながら、確に臨機の分別があるのではない。

次には長い道中である。可部阪峠の舊道を越ねたなら可部驛まで四里、國道を俥で走つたなら六里、それから廣島まで四里半は馬車、廣島へ着いたなら汽

車でもう譯はないが、厭なのは實にこの可部阪峠である。
 お琴は去年の五月父に連れられ、峠を越えて初めて廣島に行き、賑かな招魂祭を見たことがある、今この裏座敷から脱け出で、大角豆や茨豆の茂つてゐる畠の藪に隠れ、田圃の中の間道を傳ひ、雑木林の小山を抜け、可部阪に出で峠を越さうか。と考へて見ると、上り一里に下り二里、三里の間の山路に、絶頂の一軒茶屋の外に人家はない、胸突七曲やら蛇ヶ淵やら、深い谷に臨み高い峰を仰ぎ、女の一人夜道を越すべき峠でない、まして或る時強盗が出て旅人を殺したこともある。さればとて國道を俾で廻らば、里程二里餘も遠く、追人に引つ捕へられるは必定である。「如何せう、あの可部阪峠がなければよいに。」と、椽側に覗いて眺めると、陸地測量部の三角臺を建てた峠の最高峰には、崩潰れとも落ちさうな黒雲が、さも憎さげに湧き出でゐる。「あゝいやな山だこと。」
 さすがに氣が弱くてはならぬと、小さき心を大きく振つて、「わゝ、ごちらにか通れやう。」取り出した信支袋には、櫛と鏡と、新しい草履一足とを入れ、さし足ぬき足に、これも妻の青芋畠の葉蔭に隠した。

第十一回

これで準備は大方出来たと、ほつと大息を吐き、考へて見ると、自分が脱け出した後、お父さんやお母さんが、どんなに心配なさるであらう、如何なに怒りなさるであらう、洵に濟まないこと、一筆書き残して置かうと、晝寝をしてゐる父の枕頭の硯箱を見れば、六郎治の寝顔も見ゆる、何の夢を見てかしきりに眉根を動して、憔悴した兩頬に軽い瘰癧が苦しうな。あゝ濟まないぞ。お琴、兩手を合せて伏しつくと、
 「お琴、何をするぢや、わらいユト〜と音をさせて……。」と、六郎治は目を覺した。

丁度雇人等が大勢晝寝から覺めて、藝所がまた歌や笑話で賑かになつたので、それを機会に、父に咎められたお琴は、
 「あの、私ね……、帯を仕立直さうかと出して見ましたばかりで……。」と、そのまゝ次へに逃げて、晝食からまた大勢と一緒に、門田の草を掻きに出たが、

如何して家を脱け出て、どの道を走らうかなど考へると、まだ一度も汽車に乗つたことのない身は、それさへ氣にかゝり、屏風の蔭の風呂敷包、芋島の信玄袋、それを發見られはしないかと、もう平氣で田の草を掻いては居られない、ヤアお琴さん歌ひませう、話ませうと、相手にせられるのが厭でならぬ。

「小さい姉さん、ちよつと家へお歸りよ。」

お琴はぎよつとした知りつけられたのではあるまいかと、泥手を漑いで田の畦に出で、走つて弟の側に、

「何の用事？」

「僕は知らんわ。」

例の根椀で大きな蛙をつゝいてゐる。平生ならば、小言の一つもいふべきところを、

「お父さんは何をなすつて？」

「手紙を書いてよ。」

「怒つて？」

「いや、今日はまだ怒られやせん。」

「いや、姉さんを怒つて居なさる？」

「なあに、姉さんは一度もお父さんやお母さんに怒られたことはないわ、何時でも怒られるのは僕だ。」と、一つ劇しう蛙を目蒐けて撲つたが。鞭が外れて、蛙は大限玉を刺いて稻の中に飛びこんでしまつた。

恐れ、家に歸つて見ると、

「お前これからお清が家まで使に行つて呉れ。」と、何を知りつけられた様子もなく、母のお袖は平素の通りに優しう言ふ。さて、困つたなど、胸は一時に騒ぐを、「何のご用で？」とさり氣なく問ふと、

「お清も昨夜来てあの通り心配したが、今日大阪へ手紙を出したから、安心するやうに悉しく話して、お父さんからの手紙を持って行くのだよ。」

「さう、では今晚一夜姉さんの家へ泊つても善いです？」

「お、お。」

お袖は昨夜の姉妹が衝突にも似ず、お琴が方から折れて出たこの言葉を聞いてにこ／＼しながら、

「姉さんが泊れと言ふなら、泊つても善いとも善いとも。」

お琴はこの刹那に、使の途中から容易く脱けて大阪へ行かうと決心して、泊つても善いとの許可に、更に胸の蕪くばかりの嬉しさを覺え、いそ／＼と手足を洗ひ、着物を着更へ髪も梳きあげると、お袖は、

「あれだけ平生嫌ひなお清が家へ、お前今日は大變嬉しさうなことなあ。」

「あら、お母さん……。」と、お琴は寒心としたが、「嫌ひではないのよ……。」

急に我が手で我が口を覆ひ、勿體ないと思ひながら、

「私、着物について、姉さんに相談したいことがありますから……。」

屏風の後に隠しておいた風呂敷包を、今は公然に膝に載せ、六郎治やお袖が口上をば、たいハイ／＼と聞いて居るが、何のことやら心は浮々として耳に入らぬ。

されど六郎治もお袖も、現在娘に、こんな心があらうとは夢にも知らず、「泊

つても善いから、明日朝早く歸れ。」お清にまた来いと言つて呉れ。そしてお清が何と言つても、怵へて、喧嘩やなどしてはならんよ。」と、かはる／＼慈悲な言葉ばかり。時計を見るともう七時二十分、何時鳴つたか氣もつかなくなつた。「それでは行つて参ります。」と、何となく足が戦へて、門まで出ると、潔は倉と物置部屋との間から跳んで出て、
「姉さん、姉さん。」と、さも仰山に、圓い眼珠をうろ／＼させて、「姉さんの信玄袋が脊戸の畠に放棄てあつた。」と喚き立てる。

第十二回

母のお袖は玄關の柱に倚つて見送つてゐる、たゞ一夜のほどの離でも、わが兒等の出る折は毎時も斯うである。
お琴はいそ／＼門を出かけて、弟の辭に愕然し、見れば潔は、信玄袋を高く持つて、功名顔に走つて来る、先程から取り出さうとして氣は氣でないながら、お袖が始終側を離れず世話をするので、とう／＼畠から取り出す暇もなく、思

ひ切つた品である。

お琴は狼狽て、潔が手から引つ奪つて、

「それは私のだよ……。」と、袖の下に隠して了つて、身はぶる／＼と顫ふ。

「姉さんのでも如何したのだい、芋畠の中に放棄であつたのを、僕が見つけてあげたのに。」

盗人の所爲で、いもあるかも知れぬを、自分が取り返したに對して一言の禮もはく、反つて引つ奪られて見ると、潔は聊か不平である。

「有り難うよ。」と、有り難げにもなく、

「犬が匿へて行つたのだよ。」

「犬が？。」と、潔はますます眼を圓めて、

「何處の犬が？」

「もうよろしい……。」と、お袖を顧ると、別に怪しむ様子もない。小走りに走り出さうとする、潔はお琴の袂を捉へて、

「姉さん何處に行く？」

「私な、お清姉さんの家へよ。」

「今晚歸つて？」

「いゝね、一と晩泊るの。」

「それでは僕も一緒に行くよ。」

「まあ、この兄は何を言ふ、お父さんに怒られるから……。」

捉へた袂を振り拂ふと、潔は泣き聲に、

「僕も行く、僕も行く。」と叫ぶ。

玄關からは、「潔は今日行くぢやないよまたお祭にお母さんと一緒に行くのだよ。」と、臆し和める優しい聲がする。お琴は後に振り向いて、「お前は金ちやん

を落第坊主といつたぢやないか、お清姉さんに怒られるよ。」と、平生ならばお

父さんお母さんに頼んで、姉弟が縫れ合つても行くべきものが、今日は邪

魔ものを振り捨てるやうに、門から直にたらく、阪を走せ下つた。

阪を下つて土橋を渡ると、我が家は隣家の竹林に隠れて見なくなる。これから廣島へは左に、お清の家へは右に、砥石のやうな国道を、お琴は躊躇もせ

す左に向ひ二三町ばかりを走ると、道側を少し離れて、茅葺や椿や桑の樹や、夏草の繁茂に隠れて、枌葺の小さい一軒家の屋根ばかり見わたるのである。こは、若い折には十何年お琴が家に下男を勤め、今は少しばかりの田畠を小作して、始終出入を怠らぬ長助老爺が、老嫗と二人の住家である。

お琴は直にこの家に駆けつけた。

「老爺や。」

「へえ。」

裏の牛部屋の間から見はれて来た老爺は、六十を越えてもなほ頑丈な筋骨逞しい赤銅色の大肉袒で、薬罐頭の鉢巻を取りつゝ、小腰を距めて、

「これはお嬢さんでがんですか、途方もない申譯もないことで、あの極は今竹の節を抜いて居るところでがんさあ、今晚儂が持つて行つ置いて、明日はちやんと水の来るやうに懸けてあげまさらあ。」と、悠々と上り框に腰を卸す。

「老爺、さうぢやないのよ、老爺ちよつと硯を貸しておくれよ。」

「硯？、字を書く硯でがんすかい。」

長助は不思議さうに、彼が手造の不細工な猿滑の箕盆を引き寄せ、徐に一服せうとする。

「さう、硯を磨る硯よ、ちよつと貸してお呉れよ。」

「アハ、アハ。」と、長助は大口を開いて笑ひ出し、

「老爺が家に善む硯ががんすかいお嬢さんところになんぼでも善むのががんひやうに。」

「そんなことぢやないのよ、私急ぐわ。貸してお呉れ、何處にある、私が出すから。」

「アハ、アハ、さあ、何處にがんひやうか。」

長助はさよろ／＼と、座敷の棚を胸す。

第十三回

父と母とに一筆書き残したのであるがどう／＼その逸もなく脱け出て見ると、いよ／＼申譯がなく心配でならず、今は一刻もじつとしてゐられる時では

ないがその爲に硯を借りに立ち寄つたのであるに、長助老爺は腰を上げもせず、悠々たるものである。

「僕は、お嬢さんが樋の催促に來なされたのかと思ふて、びつくりしましたぢや。硯は何處にがんすか、老嬢は知つてをりませうが、今先程、今晚の油がなといふて、石油買ひに行きました。追附け戻りませう。一年中字を書くことのない家でがんすものアハ、ハ。」

「老爺、嫌よ、私、急ぐわ、硯はないのか。」

お琴は長助が胸す視線を追ふて棚の方を眺めると、簡照だの木枕だの、黍籬だの才榎だのと、貧しい小道具が雑然と並べてあるばかりである。

「いや、待つてつかあされよ、去年死んだ孫めが學校へ持つて行き居つたのがある筈でがんす、あいつが生きて居りますとなあ、直ぐ分りますが、あんたところの旦那様に、伶俐奴だと褒められて、潔坊つちやんと同じ年でがんさあ。」

「その、硯が何處にある、わ？、老爺や……。」と、お琴がもどかしがるを、

「さあ、何處にがんひやうか、この間老嬢が見て泣き居りましたが……。」あの

棚の隅にがんひやう。」

漸く起たうとするを、お琴は自ら跳び上つて、翹足つて棚を探つて見ると、塵埃だらけの小箱がある、蓋を開くと、いかにも硯箱ではあるが、大きな虎石の硯に海の邊は缺けてゐる。何時から磨らない墨か、矢筈に減損た片屑が一個、軸の破れた大筆が一本、これでも嬉しく、老爺が鑽研ぐ小池の水を五滴六滴、手早く磨つて、懐の半紙を取り出し、

「何とも申譯がございません、どうぞ、どうぞ、お許し下さいませ、私は兄さんの大阪へまわりまして、今年の試験には是非及第して下さるやう願ひます。琴より、御父様、御母様と走り書して、くるく」と巻き、

「老爺、お前のところには状袋はあるまいね。」

「熱々とお琴が手元を感心して眺めて居た長助は、

「アハ、ハ、ハ、状袋やなんどががんすかい。廣島に縁ぎに行つてる伴の處へ手紙を出しますにも、旦那様に書いて頂いて、状袋まで頂戴しますぢやものアハ、ハ。」
「それではね、老爺、この手紙と、も一つこの手紙を……。」と、父からお清に

宛てた手紙とを懐から取り出し、

「明日の朝廻くても善いから、お母さんに渡してお呉れよ。乾度、善いか。」

「お母さんに……？。でがんすかい。」と、長助は初めて小首を傾け、お琴が顔を恠しきりに眺め、

「お嬢さん何處へ行きなされますか？」

「私ね、私は姉さんの家へ行つて二つ三つ泊るのよ、善いかね。今晚では不可のよ。明日朝だよ。」

「ハ、ア、有田の奥様のお家へでがんすか。」

「さうよ。その私の手紙を見ては嫌だよ。乾度ね。」

「アハ、ハ、ハ、僕の文盲が見て分りませうか。」

「いや、大切な手紙であるから、他人に見せたら悪いよ……、明日の朝だよ……。」

と、言ひながら、信玄袋の中から草履を取り出して足に穿き、

「それから老爺や、この下駄もね、一緒にね……。」と、お琴はそのまゝこの白屋を出た。

もう日は西の山端に傾いた。お琴は、編組傘を斜にして、さも身を忍ぶかのやうに、しかも走らんばかりにさつさと行く。

正直一途の長助老爺も、合點の行かぬ小首を掉つて、

「お嬢さん、どうも奇異しい、變だわい。」と、獨言しながら、やがてまた竹樋の節を抜き初めたが、どうもお琴が舉動が氣になつてたまらず、托された手紙を懐に、下駄を手に、長助は仕事を止めて家を出た。

第十四回

お琴が長助老爺の宅を出た丁度その時刻は大阪では兄の巡查基が、時の遞信大臣男爵平群高知の爲に、その頭部を毆打られた時であつた。

この朝基は、一晝夜の勤務を終つて、無事に下宿に歸り、今日は一日非番の筈であつたが、同僚の止むない事故の爲に、五六時間を代つて勤務すべく、正午過ぎから再び自分の受持たる出入橋の派出所に出た。

この派出所は、曾根崎から福島へ、福島から曾根崎へ、往來の人通り賑しく、

新地の狭い街路の盛きたところ、近い梅田驛にも阪神電車停留場にも、遠い川口の波止場にも通ふ要衝である。

派出所の正面に向つて照りつけて居た七月中旬の烈しい夕日も落ちて、街衢の電燈が軒毎に輝き初め、涼みがてらに浴衣着た人々の去來が一入劇しうなつた時、基は恰も見張の勤務で、派出所の軒近く運動して居た。

折柄、出入橋の此方に渡つて、山の如うに箱包菰包を積み載せた荷車を輓いて一人の仲仕が汗を拭き、這ひ跡はんばかりに曳々と、出入橋を渡つて新地の方に行かうとする。

基は見るより駆け寄つて、手を振りながら、

「荷車、荷車、そこは車の通行止だよ。」と樹てゝある制札を示すと、諸車通行禁止とある。此處から三四十間も新地の街に入ると、水道工事の爲に今朝から車の通れない處があるのである。

仲仕は驚いて俥を停め、

「へい、へい、知りまねんので……。」と、頭を掻き、謝罪る。

「宜いさ、宜いさ、早くその車を曳いて行かないと、邪魔になるぢやないか。」仲仕はまた手に唾して曳き出さうとしたが、車は重くて容易に動かない、と見た基は、後から、

「ソラ、行け。」と、五歩六歩を押してやつた。

その荷車が行つたと思ふと、また人力俥が来る、自轉車が来る、可愛い小兒を眠らせた乳母車が来る、來ては皆此處から外へ拂はれて行く、高い制札もあり、一條の繩を胸高に引き渡しての注意もありながら、なほ疎忽にも行き過ぎやうとするものが多し、人の通りが劇しいのである。

基が見張の時間もかくしていそがしく、今五分間ばかりで終らうとする時しも、郵船會社の運河を隔て、派出所から斜に望む、商業學校正門前から、柳橋を渡り緑橋を渡り、大道を疾驅して来る二輛の俥がある、夜目にも見ゆるばかりの砂埃を煙と驅つて、翔るが如く、忽ち基が目の前を塵れ塵れに、何事ぞ禁制の繩を突破して、新地の巷に疾走入つた。

「ユラッ。」と、一聲呼び止めた時には早くも先頭なる俥の勢は鋭く、十間ばかり

りも飛び過ぎて、後なる俾は勿論それと厲行んで行く、
 その前なる俾の巨人が即ち、逕信大臣平群男爵で、後なる俾は、大阪の富豪
 黒崎貞廣である。

基は斯くとは知らない、自分の制止も肯せず、注意の張綱をも破つて、駈け
 行く様の、如何にも警察を無視した舉動と嚇と怒つて、後から群を罵ましたなが
 ら一散に追つ蒐けて行つた。

第十五回

某元帥が知遇の縁に攀ちて、今から二十四五年前までは、静岡邊の一中學校
 の教師であつた平群高知、順風に真帆を擧げて高潮を駛る巨船の如く、内務省
 の屬官から忽ち邊要の民政長官に、關東鐵道の總裁に、異數の昇進は一世の目
 を驚かしめてゐたが、この春政友内閣倒れて、再び官僚派の内閣となるや、忽
 然擯でられて國務大臣となり、遞相の椅子に就いた。

この新進の大臣を、宛然小兒のやうに視てゐる高輪の豪語伯の機關新聞は、

この大臣が新任の際、無遠慮に評したことがある。「平群なかくの才物だけれ
 ど、謂は、東洋流の豪傑を装ふ一つの影辨慶のみ、見よ、その眼その口その眉
 毛その鼻、その殿しい鬚髯といひその奇麗に禿げた頭顱といひ、その威風四邊
 を拂ふ體格といひ、如何にも下僚どもを俯伏しつけるに十分な七つ道具を備へ
 て居るけれど、彼はまた大臣たるの技倆に於て、餘りに政海の波濤に慣れない、
 小兒らしい舉動が失せぬ、なほ關東鐵道の總裁かもしくは、新領土開拓の副椅
 子に於て、あの稜々の圭角を磨き落して、偕十年の後大臣たらしむるも遅くは
 ない。」と、けれど平群大臣は儘に現内閣の一名物である、評者の豪語伯は今では
 官邊に何の役目もなく、某政黨の黒幕であつて、多年大臣とは政見を異にし、
 その系統に屬する幕僚等の軋様こそ小兒らしく、電話の度敷制、國債の償還、
 鐵道國有などの問題につき、一方が官僚政治の横暴だと叫ぶと、一方は野黨の
 無責任な豪語だと應へ、日々の新聞に愛嬌の種を蒔くほど、今は堂々たる政見
 の争ひよりも、寧ろ感情的の賣言葉に買言葉といふやうな間柄であるから、豪
 語伯の品隲が適評であるとは言へない、兎に角平民的な豪傑大臣とは誰も信ず

るところである。

この平群大臣、何の用事あつて来たのか、今日正午頃、忽然梅田驛に見はれ、たゞ一人の屬官と共に、大臣らしい行列もなく、二人曳の俥を飛ばして、この派出所の前を駆けさせ、直に義弟黒崎貞廣が築港あたりの別荘に入つた。

その黒崎貞廣は、大阪に於ける實業界の統領である、今年僅に三十八歳の青年で、黒崎銀行の頭取を始めとして、十幾個の會社工場の取締りの監査だのといふ役を兼ねて、財産二千萬圓と傳へられてゐるが、兄大臣の氣質には肖すして、毫も政治に干與することはない。その夫人は黒崎家の一人娘であつて、同族某の元帥が媒介で、十年許り以前、まだ兄大臣が民政長官たりし頃、出でこの黒崎家を繼いだのであるが、其金権の融通は、兄大臣をしてますます清廉に、ますます高潔に、樂傑錢を愛することを知らざる俠骨たらしめ、爲に兄大臣の爲にならば命をも惜まざる後輩、新聞紙はこれを、乾兒とも、平群系の策士ともいふのを、朝にも野にも夥しう作らしめた。これが兄大臣が異数の出身をせしめた一つの原因であると共に、黒崎家が大阪實業界に於て、この頃覇權を掌

握ることゝなつた一つの原因ともなつて居るといふ噂である。

この日、兄の大臣と、弟の富察とは、茅渚の浦曲の波靜なる風景を、市岡邊の別邸の深い奥より眺望めて、この溽暑の炎熱も知らず、俱に政治の劇務よりも、經濟の煩累よりも脱れて、閑談に晷の傾くを待ち、一夕の微行を北陽狭斜の巷に試みるも面白からうと、兄弟揃ふて俥を此處に飛ばしたのであるが、固りこの諸車通行禁止を破らうとの故意があつたのではない、俥夫の疎忽がこの制札を見通したのであらう。

巡查本地基は、大聲に叫びながら突つ走つて、直に後なる俥を追ひ抜き、先なる俥の前に駆け付け、兩手を張つて身を大の字に、

「ユラッ！ユラッ！」と號んだ

俥夫は進むにも進まない、走る俥の情勢の爲に、思はずひよろ／＼と斜に避けて停まらうとした際、基はその轅の危険を轉す爲め、反つて水道工事の爲に墜り抜いた溝に挫と顛落た。

顛落るが早いか再び跳上つて、その轅を捉へた時、一條の洋杖は電の如く車

上に閃いて、殿に冠つた基が制帽は何處へか飛んで了ふ、アツと驚いて身を除けたと思ふ瞬間、大童の頭より獅子吼の一喝が下つて、
「無禮者奴ー！」

第十六回

左の頭が頭と鳴つて、同時に耳が裂けたかと思ふと、黄金の蛭巻をした黒珊瑚柄の洋杖は、早くも基が両手に歸して居た。

「下れー！」

敵いてまた一喝、慄悍な平群大臣は身を跳らせて車から飛び下り、鹵獲られた基が手の洋杖を奪ひ回して、右手の小脇にグツと搦込み、

「貴様、巡查ぢやないか、名刺を出せ。」

さすがに基も愕いた暫時は逡巡ひながら、じつと熟視れば、眞白な Panama 帽子を眉深に冠つて、鬚のやうな眉毛は逆にピリ／＼と顔ふて居る。何物の無禮もただ睥め殺して了はんづる眼は隆い鼻眼鏡の奥に燦々ついでる。遠東の互

寒を凌いで茂つた針のやうな髭髯、邊士の酷暑に焦げた権色の顔の色、形相既に射向ふ敵ありとも見わざるに、新に臺閣の宰相として、溢るゝ權威は見上ぐるばかり丈高き軀に充満して、バツと吹き拂ふ夏寒き風は、その肥満したるフロツクコートに體より起る。

「出せ、名刺を……………」

白い手袋箆めた手は、直に基が面前に延びて来る、その寸分の暇もない峻烈しい敏捷い身の舉動は、基をして應接の隙をも有たしめない。

「アツ、如何したのです。」

と、後の俾から跳び降りて來た弟の富榮黒崎は、兩人が間に入つて、後の兄大臣を圍ふやうに、

「如何しました？」

「有何、無禮の巡查だ。」

「君、君は人違をしては居ませんか。」

と、二人の紳士に圍まれた基は、帽子もない尋常の巡查、白い制服の姿は殊

に瘠せて、蒼白い面に何の威嚴も見えない。

「怪しからん、人違ひではないです。」

初めて一語口に出ると、心臓の鼓も漸く収つて来る、勇氣も漸く回復して来る、基は一步を進んで、先づ富葉の愕ける顔より、次に怒れる大臣の顔を睨め廻して、左手に佩劍の柄頭を握り締めながら、

「見た處、貴下方も紳士でせう、尋常の車夫でも荷車でも、掟ごあれば破らぬいのに何故賭車通行の禁止を破りました、先づ貴下方の住所姓名を承りませう。」胸のポケットを探つて手帳を出した。

「此處は諸車通行禁止の場處ですか。」

と、富葉が四邊を見廻して聞く。

「然です、水道工事の爲にご覧の通り。」と、今自分が墜落んだ溝を指して、

「制札は向ふに樹てゝあります。繩まで危いとの注意もしてありました。しかも派出所の前面で、巡查の制止も肯かず、法を犯された貴下方の行爲と、また貴下の危険に對しては、職務上黙過することは出来ません。氣の毒ながら、

派出所まで同行を願ひませう。」

基はこの兩人を紳士と見て、言葉も穏かに、少しも侮辱がましき態度をばせぬ。

通行の人は一人佇み二人止まり、五人七人、前からも後からも、浴衣が来る

厚司が来る、袴も墨染の衣も赤い帯も来る、今は二三十人が輪になつて如何なる珍事の出来かと眺めて居る。

「ヤアイ、巡查が撲られて叱られどるわ、ワイイ、ワイイ」

大きな荷物を背負ふた一人の小丁稚は喚きながら逃げてしまふ。

「傳で通つて搦はんなら、乃公も通るぞ。」と、兄哥らしい腕捲が呟いて行く。

「何ぢや何ぢや、喧嘩か、見せ〜。」と泥酔の法被が人を押し除けて覗く。

これが一々、基が耳には除くべからざる勇氣を充奮めるのである。

富葉も大臣も、初の怖しい權威に似ず、初めて自分共が通行禁止を破つたことに心付き、次には寄つて来るこの群衆には妙からぬ迷惑を感じたらしく、

「甚だ困りましたな、此處が諸車通行禁止の場處であらうとは少しも知らなかつたのですからね。」

第十七回

富察は初めて、その冠つて居た帽子を取つた。

富察黒崎は近く基が側に寄つて、

「悪かつたです、このまゝ後に引き返しますから、どうか悪しからず……………」と、さすがに聲を細めて、ますます寄つて来る人を左右に顧ながらいふ。

「いや、兎に角御姓名を承りませう。」と、基は鉛筆を咎める。

「姓名ですか、實は全く犯意のない行爲で……………」

「イヤ、それは此處での問題ではないです、御姓名を……………」

基が言葉は簡單で、寸鐵の容易く曲りさうにもない。

黒崎は竊と兄大臣の傍に寄り、何事かを一言二言囁いて、また此方に向ひ、

ポケットから取り出した名刺を基に渡しながら、

「どうかこのまゝ……………」と、僅に點頭いてその髭を捻る。

基は街燈の光に透し眺めて、驚愕の眼を睜き、

「貴下が……………」

「黒崎です。」

鷹揚通らざる微笑を故意として、更に敵手を見下した姿の、基が驚愕の色を察ると共に、傲岸不遜の態度となつたのを憎んでか、

「何だ察さうな、謝罪らんかい。」と、立て廻す群衆中から罵る聲が聞けた。

勿論、黒崎の心では——この名刺一枚で、巡査は許して呉れると思ふてゐる。

「あの方は？」と、基が願でしやくつた時には、平群大臣は徐に俚に登つて居た。

「僕の兄ですが……………」

名前は言はずとも知れよといふやうな舉動は、ますます基が癪に障つて、

「ご姓名は？」

黒崎はまた仕方なしに俚に寄つて、一葉の名刺を取り次いだ。

基はそれを瞥見るや、俚の大臣の顔と見くらべつゝ、

「相違ございません？」

「無いです。失敬しますよ。」

黒崎が俚に移らうとするや、有つて生れた負け嫌ひの氣概は赫と燃わて、
「待つて下さい！」基が聲は鋭く、且つ顔わて居た。

「法は、たとひ貴下方のご身分をでも許しますまい、私は巡査です、職務執行の上から、黒崎さん、本署まで貴下のご同行を願ひませう。」

「わ？」と、黒崎は振り向いて、「困りますね。」と、富塚等が權勢を笠に、逃げ
て行かうとする様に、反抗の憤懣はますます熾ねる。

「不可ません、ご身分に對して敬意を拂へばこそ、派出所へとは申しません、
公衆中に於てご姓名も口にしませんですが強いてお拒みになりますと、私の職
務が相當の處置を執るべきを餘儀なくしますが、宜しいですか。」

基は凜乎として宣言を立てた。

折柄、群衆中より、忽然と見はれた婦人一人、高い島田、長い縮緬の袂、風
と香の風を送つて、憶しめせず、衝と基が側近く妖しい微笑を含んで、基が敵
き捨てられた制帽をば、何處で拾つてか、一語もなく靜に捧げた、年は廿一二三
めでたき御代の今までに、曾て例もない盛閑の重臣が、微行の通とはいへ、

一巡査との紛争には、通り懸りの男子でさへ、容易ごとならずと見ても、僅に
此方の闇の蔭から、悪口の一言二言を瘡犬の逃げ逃げ吠ゆる中に、さりとは不
敵な濃艶姿、群衆は一齊にこの婦人一人を眺めて、雨とならうか、風とならう
か、形勢の成行如何にと氣遣ふ。

基は願て亦ものをも言はず、直にその帽子を冠つた。日章を抱いた櫻花の徽
章は正しく鮮に燦爛と輝いて、瘡せた姿も、威嚴整ひ、犯し難い品位も見わる。

富塚黒崎が不遜の態度はがらりと轉つて、急に柔順しく、

「よろしい、僕が本署まで一緒に参りませう。」

「ご迷惑ながら、さう願ひます。」

「基は収めて直立不動の姿勢となり、俚上の大臣に向つて敬禮して、

「どうかお徒歩を願ひます。」

第十八回

長助老爺が許を出たお琴は、後から追人が來はしないかと思ふばかり、おの

づと足も軽う、今まで抱へて来た風呂敷包を、片襟に背中に負ひ、出遇ふ人をばなるべく避けて、編編傘を斜に隠し、片袂裏げて急ぎに急ぐ。日はもう暮れて、氷のやうな半輪の月が、行路の空の森に覗く、涼しい風はそよくと、盛夏の野山の茂を渡つて、髪の縫れを吹き過ぎる。これが晴れての旅であつて、お父さんやお母さんと一緒に京詣をでもするならば、夏の夜道の反つて面白くもあらうがなと、一と村過ぎ二た村過ぎると、しばらく人里を離れた小川の邊を行かねばならん。

川瀬の音は滔々と流れて、片山岸の道傍には、並木の杉が月光も洩さず、ただ真間に續いてゐる。その三町あまりの程に、古橋の地藏といふのがある、祠は朽ちて、楯は二抱にも餘らう、川は恰も此處で、音もない深い淵となつて、晝なればその碧い水の上に、徐に幾個の渦が溢ふてゐるのが見える。昔から人のよく死ぬところ、去年はこの下流に、まだ年若い旅の巡禮の屍體が漂ふてゐたとか、人は祟の地藏ともいふ。お琴は今までにたつた一度、用事あつて日中此處を通つたことがあるが、今宵たゞ一人、この淋しい處を通らねばならぬ。

何となく胸は悸々する、襟元は冷々する、歩む自分の草履の音が、何ものにか追ひ蒐けられるやうな心地がする、明日朝の天明までには、六里半の道を可部町まで行かねばならぬ決心がすすがに織い處女の身、お琴は一人道傍に、佇立み、同伴はないかと後を見る。

けれど田舎の夜道には、来る人もなく往く人もない、「何、何事があらうぞ、可部阪崎三里の険しい山路を思へば、胸突七曲もあり、蛇が淵もある。追人に捕へられるやうなことがあつては大事。」とお琴は更に急ぎ出した。

杉林の中に入つて、地藏堂の前邊では浮雲にでも乗つたやうに、足は自然で軽く進む。

走つてやう／＼林を抜け、もう戸を締めて談話聲ばかりが洩れてゐる小店の前に來ると、全身は爽々と汗に濡れて、顔はさながら燃ゆるがやうな。幸ひ其處に笕の水音がする、近寄つて水槽の柄杓に喉を潤してゐると、背後にパツと灯影が射した。

驚いて顧ると、赤條入の提灯振り照して、帯剣の音鏗々と、白い帽子に白い

服脚絆草鞋のいそぎ足は、嬉しや巡査である。

これからこの方と一緒に、直に跟いて行かうとすると、巡査は提灯を高く掲げて、お琴が顔を熟々と凝視める。お琴は叮啷にお辭儀をして、

「済みませんが、どうぞお連れなすつて……………」

左の手に提灯を持ちかへ、右の手を舉げて軽く禮式をなした巡査は、眞黒な顔にピンと美しい髭を生して、聲まで顔まで何處やらに聞き覺わ見覺わがあるやうに思ふ。

「貴嬢は。」と、莞爾して、「本地の嬢さんぢやありませんか。」

「ハ。」と言ひながら、如何しても思ひ出されぬ。

「僕は三好です、貴嬢の村に居ました時には、貴嬢のお父さんには大變懇意に願つてゐました。如何です、皆お壯健ですか。」

斯ういはれて見ると、如何にも三好である。

「おや、まあ、お見外申して居ました。」と、お琴はよき伴侶を得たのを嬉しく思ふ。

「どちらへです?。」

「私、鈴張まで参らうと思ひますの。」

鈴張とは可部町へ出るこの國道の中程に當る驛で、これから二里ばかり、三好はそのこの駐在巡査である。

第十九回

三好巡査が一昨年の春頃まで、お琴が村の駐在所に勤めて居た時には、度々お琴が家へ来て、父の六郎治と碁を打つたこともあり、酒を飲んだこともある。お琴はこの三好が、何時の間にも何處へ轉勤したのかすら知らなかつたが、今宵はからすこの淋しい夜道で出會ふて見ると、救けられたやうな心地もし、また兄の基も大阪では、この通り勤務めて居るであらうと思ふと、他事ならず懐しい。

三好は行く／＼元氣な口調で、

「貴嬢、この夜中にお一人ですか。」

「は、たつた一人で……………」

「能くもまああの祟り地蔵が怖くなくなつたですね。」

「いへ、あなた怖くて怖くて、如何せうか知らと思ひましたの。」

「大體貴嬢お一人で、この夜中を、鈴張の何處へ入らつしやるのです。餘程の急用ですね。」

お琴ははたと答辯に行き詰つて、黙つて行くと、三好は村で身分ある家柄の年若い娘が、俵にも乗らす供をも具れず、風呂敷包を負ふといふほどの夜道は、頗る怪しいと感ふてか、

「貴嬢、お家を脱けて出ましたね。」

と、見て来たやうな一句に。お琴は喫驚して、

「は、……………」

「如何です、貴嬢は鈴張へではないでせう。」

三好は忽ち歩行を止めて、

「失禮ですがお嬢さん……………」と、聲を低くして賺すがやうに、

「貴嬢萬一お心得違ひで家出をなされたのではありませんか、もし、お年若い

身でそんなことでもありますと、僕は十分貴嬢を保護せねばならん身ですが、たつたお一人何處へです。」

此處は何處か知らないが、登りの阪路で、人里を離れた山手の林の中である。お琴は顔も得擧げず、杖いてゐる蝙蝠傘の柄の尖で、ユトくと地面をつゝいてゐると、

「おさしつかへがありませねば、そのご事情が聞かして戴きたいですな、事に因つては、これから貴嬢のお宅までお送りしてもよろしいです。」と、事情が分らねば一歩も行くまじき構である。

お琴は仕方がなく、

「あの、私、大阪へ参りますので……………」

「大阪へ？、お一人ですか。」

「は、兄の許へ……………」

「兄さん……………」

「は、基と申しまして、やつぱり警察に勤務めてゐます。」

「あゝ、あゝ、僕は一度も會つたことはないですが、お話は聞いてゐます。その兄さんの許へ如何してゐす。」

お琴は簡単に、自分が脱け出して來たことゝ、途中一時も猶豫ならず、斯うしてゐるほども心配でならぬことを語つた。

「いや、さうでしたか。僕は大笑誤解をしてゐました、感心の外はありません。では急ぎませう、貴嬢歩行けますか。」

と、三好は眞實感心して、一倍早く歩行みながら、
「そんなことでしたら、何故車にお乗りなさらないです。」

「實は旅費を少しばかりしか持ち合せませんので……。」と、これも藏さず語ると、
「よろしい、此處から鈴張までもう一里で、その間には車がありませんが、其處まで辛抱なさい、廣島までの車を僕が雇つてあげませう。」

三好は、司法官試験の容易でないこと、六度や十度落第しても、兄さんの側で奮闘を興へられたなら、必ず成功すべきことを、調子よく話して呉れる。お琴はますます覺悟して、兄さんが及第せられるまでは、再び國へは歸つて來ま

いと思つて行く、後から一輛の俵が威勢よく、自分を追ひ抜けて來るとは知らず。

第二十回

三好巡査が親切な談話を聞きながら、一時も早く大阪に行きたく、お琴は足の疲勞をも覺えず、何時しか道は再び下り阪となつた時初めて、その俵が、恰も自分を追ひかけて來るがやうに、ガマンガチャンと、夜はひとしほ閑寂な夏木立の深い山に、身に沁むやうな反響を立て、次第く近づくに心着いて、幾度か背後に振り向いては、警戒に警戒を加へ、三好の高い背丈に隠れるやうに竝んで行くと、俵はもう追ひついた。

「エンサー、オイサー。」と、田舎には珍らしい前曳後押の掛け聲勇しく、下り阪の勢に乗じ、兩人を追ひ抜いた刹那、三好巡査は大聲に、

「ユヲ、ユヲ。」と、二足三足追ひかけたその警察の提灯に、車はたちくと漸くその惰力を止める。

「なんぼ人通りのない山路でも、夜は車に火だけは燈して呉れないと困るよ。」

と注意せられて、

「へ、へ、あんまり急ぎまして、祟り地藏で火を奪られました、摩附木はがんせす、月夜ではがんす、へ、へ、濟まんことをやりまして……。」と、俵の上で謝罪するのは長助老爺である。

愕くまいことか、冷水を浴せられたやうに、お琴は全身に粟立つばかり驚いて、咄嗟に身を隠すべき處もなく、撞と叢の上に倒れた。

「旦那、濟みませんが、どうぞその火を貸してつかあさらんか。」

長助俵から下りるや、倒れたお琴が姿を眼敏く見つけ、手早く貸りた提灯を翳して、お琴が伏しついてゐる姿を照し、

「ヤア、お嬢さんぢや、お嬢さんぢや。」と頓驚聲を絞つて、「お嬢さん！、お嬢さん！。」と、抱き起さうと両手を掛ける。

夜露の冷かな叢に顔を埋めてゐたお琴は、もう觀念めて争ふ力はない。長助が頭丈な両手を拂ひ退け、自ら衝と體を起し、立たうともせず、そのまゝ草を藉いて跪き、襟の亂を掻き合せながら、儼乎長助を寄せつけず、

「老爺、お前は何の爲に來た！」
赤い灯影に映る白い顔は、萎々と茂る四邊の草木の翠色の中に、宛然生ける女神のやうである。

「やれ、まあ、お嬢さん、あんたに追附かうと思ふて、何ぼう急ぎましたことぢや、儂、生れてから人力ちうものに乗つたことアなし俵の上で心配して、心配して、どうでも斯うでも可部町までにや、追ひつかにや、旦那様や奥様に申譯がいんすまい、あんたが人力で走られた日にやア、どうもならんのだが、此處で追ひついて、こなん嬉しいことアがんせんよ。」

また抱きつかうとするをまた拂ひ退ける。長助は提灯を地面におき、「オイ、皆や。」と、三人の俵夫を呼びかけ、

「皆能う走つて呉れた、汗が出たろ、もう安心ぢやに、一服してくれ。これからまたこのお嬢さんに乗せて走らにやならんから。」と、自分も草の上に跪き、ぬつと見はした兩膝を叩きながら、

「あゝ、お嬢さん、あんたが足痛かる能うまあ此處までも來られたもんぢや、

三里の道は十分がんすよ……。」と、身體を揺り動して一人で喜ぶ。
三好巡査も、事の意外に驚いたが、如何にもしてこの可憐なお琴を助け、大
阪に送つてやりたく、つかく」と長助が側に進み、

「ユラ〜老爺さん、お前お嬢さんを如何する、僕が祟地藏から此處まで一處
に來たのだが、無法なことをしては困るぞ。」

長助はその藥罐頭をしきりに上げ下げしてゐたが、

「ヤアー。」と、喫驚して、「あんたさんは三好さんで、ご機嫌よろしう……。あ
なたさんがこのお嬢さんを此處まで連れて來て呉れんさつたのでがんすか、ど
うも有り難いことのでがんす。實に〜大事なく〜なお嬢さんでな、このお嬢さ
んは……。」と、地面に頭を擦りつけて悦ぶ。

第二十一回

三好巡査は心からお琴を氣の毒に思ふけれど、さりとて長助老爺を叱る譯に
も行かず、

「いや、勿論大切なお嬢さんに送ひはないが、老爺さん一體お前さんはこのお
嬢さんを無理にでも連れて歸らうといふのか。」

「へ、へ、何の僕が無理をいひますかい。四十何年僕はこのお嬢さんの家
へお世話になつて、烏の啼かん日はありましても、お嬢さんの家へ顔を出さん
日はがんせんもの。なあ、このお嬢さんがまだ蜻蛉番結ふて學校へ行つて、い
かは習ひなされる頃には、僕がこの脊中に何遍食ふてあげましたか分りやませ
ん。お嬢さんもそれもある僕を老爺や老爺やと呼んでつかあさつて、今日此方へ
脱けての來がけにも、僕ところへ寄つて、老爺や硯を貸して呉れとお言ひなさ
るんでがんす、僕、嬉しうて〜、なあ、お嬢さん善う寄つてつかあされまし
たよ。」

またお琴が手を取らうとする。お琴は振はらつて斜に向を更へ、
「老爺、お前はあれだけ私が善く頼んでおいた手紙を、直ぐお父さんへ持つて
行つたね。」と、その聲は曇つて亂れてゐる。

「へい〜、僕が持つて行きました。お嬢さんは明日の朝と被仰つたが、どう

もお嬢さんの様子に合點の行かんところががんす、もしお嬢さんの身の上に奇禍なことががんしては濟まん、まあ早く届けて悪い手紙でもがんすまいと思ふて、持つて行きましたぢや。」と、地面の膝を進めて長助老爺は額の汗を拭き、

「丁度その折旦那様と奥様とは玄關の縁側で涼んでゐがりましたが、旦那様は貴嬢の手紙を見て、ヤレ／＼お琴は可愛いことをしたと喫驚なさる、奥様は獻歎あげてまだ遠くは行くまい、お琴を大阪見たよな遊園へ一人やることは厭だ、直ぐ迎へに行つて呉れと泣きなさる、深坊さんも姉さん姉さんと泣きなさる……老爺まで悲しうて貰ひ泣きました。」と、自分にも涙を拭きながら言葉までうるませて、

「ところが流石は旦那様ぢや、いや／＼さうでない、それほどまでに兄を念ふて試験を合格さうといふ心は可憐いもんだ。兄妹は斯うでなければならん、お琴がその爲に大阪へ登つたなら、兄も嘸かし勉強するであらう、行かしてやれ、無理に引き戻してお琴を泣かすが親の慈悲ぢやない、サア、路銀を何程持ち出したか調べて見いと、急に旦那様も奥様も箆笥や鏡臺を詮索されたが、お

金は一文も不足がない。借如何して大阪へ行くのであらう、旅は金ぢや、老爺、此處に米を賣つた金が三十圓ある、大急ぎ、大至急、前曳き後押し、三人がりの俵に乗つて、汝、直ぐ、お琴が後から追つかけて、金をしかと渡して、それから廣島までその俵にお琴を乗せて行かしてくれと言ひなさる。儂は嬉しいやら悲しいやら、なあ、お嬢さん、親の慈悲は斯したものでがんすよ。大阪へ行きなされても、寝るに足を此方へ向けるではがんせんよ。」

長助は長い紐を首に懸けて、懐にしかと納めてゐた財布の中へ、その太へ手を突き込んで、幾重の紙に捻つて疊んだ紙の中から、十圓紙幣を摘み出し、一枚、二枚、三枚と、提灯の光に透して読み、

「さあ、お嬢さん、これでがんすよ、儘に渡しますぞよ。上方には拘摸が多うがんすから、油断して奪られなさるな、わ、お嬢さん、貴嬢泣いてか。」

「お琴は先刻から泣いてゐる。これほど親の慈悲が深いものとは知らなかつた。今の今までそれとも知らず、追つ蒐けて引き戻されるであらうとばかり思ふた自分の心が勿體ない、兄さんの許へ行けと許して下さるさへ有り難いに、不如

意の生計の間から、如何してこのお金が戴かれやうぞと、兩袖で顔を掩ふてゐたが、遂に露深い叢の上に突伏した。

「なあ、お嬢さん、なあ、お嬢さん……。」と、長助は膝行り寄つて、お琴が背中を軽く撫る。

第二十二回

夜は幽靜である。二個の提灯の赤い灯影にちらちら映る草葉の末の露の玉を、露さぬほどに風は涼しい。折柄遠い山田の邊の松林に、哀な聲で杜鵑が鳴く。

「老爺や……。」

お琴は漸く起き直り、深く兩袖に顔を掩ふて嗚咽ながら、

「お父さんやお母さんのお心は、ようく、私この胸に染み込んで、大阪に行つたなら、兄さんに、一番先にこれを話しますよ。だけれど、老爺、家の生計の思ふやうにないのも私、よく知つてゐる。此處に貯金の通帳を有つて居るから、そのお金は、どうぞお琴が泣いてお禮を申しましたといつて、お前持つて

歸つてお呉れ……。」

「いや、それはお嬢さん、いけません折角旦那様や奥様のお心持ちでがんすものその爲に老爺が乗つたこともない人力に乗つて追ひかけましたのぢやもの、サア〜。」

長助は再び紙幣を財布に入れてしかと締め、その長い紐をお琴が頭から首に掛けやうとする。

先程からこの有様を見て、叢に腰を卸してゐた三好巡査は、

「お嬢さん、それは貴嬢頂戴しておきなさんの方がよろしい。生計が如何の斯のと言つて、貴嬢がこの金を辭退なさるまでに心配は入らない本地さんぢやありませんか現在貴嬢旅費が足りまいかと有仰つたでせう、旅は金です、頂戴しておきなさん。」と懇に勧める。

「それと覽なさい、三好さんも然う有仰る。老爺が如何してこのお金を持つて旦那様のところへ歸られませう、柔順に持つて行きなさん。」

長助は我子に説くやうに、とうく財布をお琴が首にかけた。

「それでは頂戴します。老爺どうぞ、お父さんやお母さんや、潔にもよくお禮を願ひよ。」

「へい、へい、申しますとも申しますもそれではなあ、お嬢さん、行きなされ。旦那様も奥様も、後から金を持たして追つかけたといふやうなことが、有田の奥さんに聞かしてはならん、お清には内証だよとお言ひなされた位だから、急ぎなされるが善うがんです。」

「さうだ、さあ、お嬢さんお起ちなさい。」

右からも左からも勤められると、お琴は家を脱け出た勢もなく、今更名残惜しく起ちかねる。

黙つて路傍に腰を据わ、用意の團飯を喰べて居た三人の俵夫は皆草鞋を穿きかへる。

お琴やうく俵に登ると、長助は車輪の泥除に片手をかけ、片手に灯を高くして、

「それならお嬢さん、大阪に着きなされたなら、直ぐ無事で着いたと電報を引

きなされど、奥様からの傳言でがんしたよ。随分道中を用心なされど、これは旦那様からの傳言でがんした、いや、まだ、暑氣を用心して、生水は飲むな、寝るにも寝衣をちやんと着て、寝冷をすなど。それから着物は後から送つてやると、なあ、奥様が……………」

「あゝ、老爺、お前も壯健で……………。三好さん左様なら……………」

お琴俵の上から慰撫に首を垂れると、

「へい、へい、有り難う、どうぞ早く戻つてつかあされよ、これは老爺が願ひでがんです……………」と、長助は眼を擦る。

「では、折角ご大事に、基君によろしく。」と、三好巡査は手を擧げる。

三人の俵夫はエイ、ヤ、オーと蒐け聲する。

「あゝ、これ、勝ウに作ウに豊キ、儂を引つ張つたやうに急くなや、お嬢さんは女だから、危いぞ、危いぞ……………」

第二十三回

家を脱け出た時には、ひた急ぎに急いで、追人のみが怖しかつたけれど、父母の重い情を負ふ身になると、勿體ないやら、嬉しいやら、今更のやうに悲しいやら、お琴は胸が痞へるやうで、も一度家に歸つて、父母に謝罪つて、改めて出て来たいやうな心もするを、身は俵の上に揺られて、氣遣ふた鈴張も可部町も夜中に過ぎ、祇園邊で夜が明けて、道傍の茶店で暫く憩ひ、廣島で懇意の旅人宿に着いたのは朝の八時頃であつた。

去年陸軍の招魂祭に、父の六郎治と一緒に来て宿つた二階の一室に通ると、引き續いて働いた野仕事の疲勞と、一夜睡まなかつた困憊とが一時に出て、身體は綿の如うになつてしまひ、朝餉の箸も取るや取らずに横になると、頭が岑々ど痛み出した。「まあ、お氣の毒な、初めて汽車にお乗りなさるですならば、緩くり休んで、この次の急行になさるが善しうがんせう。」と、親切に勞つて呉れる旅舎の主婦の厚意に甘へ、うとくと眠つたと思ふたが、起されて見ると早午過ぎ、湯にも入り、髪も櫛々に、またも作と勝と豊とが俵に曳かれて廣島驛に着いた。

三人は皆村の倅者である。午後二時の汽笛と共に、これにも別れて、初めて汽車といふものに乗つて、ナラ／＼駛る野山の迅速き程から考へても、今晚の十二時何分まで、十餘時間も経たずは大阪へは着かぬと聞くと、兄の許へといひながら、さても遠い心がするに、父母の側を離れて一夜でも寝たといへば、お清が許より外にはない身の、過ぎ行く驛を數ふる毎に、何となくも悲しく、別けて、姉さんの許へ一緒に行くこと泣聲した潔が、淋しがつてゐるであらうと、可愛くしてならぬ。

熱困しい三等車の窓の下に細くなつて糸崎で初めて海といふものを見、岡山を過ぎて日が暮れて、昨夜の月今宵は汽車の窓に、夢のやうに上つたり下つたり、移り變る野山の景色は、全然で國元の山川と違ふ。入り代り立ち謝る人々の言葉には了解りかねるのが多くなる。姫路あたりから睡んだともなく普々として、神戸で覺めて、間もなく「大阪、大阪。」と呼ぶ聲、乗り勞れた人々は先を争ふて降り立つ。下駄の音靴の響、辨當、すし、正宗、眞、マツチ、新聞と賣り聲も一入盛に、走せ交ひ行き交ふフラットホームと煉瓦登の騒々しさ、お

琴には何が何やら方角は分らず、譯もなく人々に雑つて歩きながらも、陸橋から吹札口までに、巡査と見れば、暫時立ち止まつてその顔を覗いた。多勢の人は皆直に何方へか散つてしまつて、一人茫然ステーションの廣場に出で、お琴が第一に驚いたのは、白晝より明るい敷基のアーケ燈である。續いて驚いたのは眩しいばかりの電車の駛る有様である。立ち並ぶ廣場の前の大店小店は、美しい招牌と店飾とで花のやうな。幾百千の電氣燈は、玉と砕け星と散ばつて、紅きものには紅き光、白きものには白き光、青黄様々に輝いて居る様は、可部阪時の麓の草村で毎夜二つ三つの夜業の燈火を見てのみ育つた身には我が行くべく方も知らずに呆れてゐた時、待合室の方から、丈の高い巡査が一人來るのを見て、どうやら兄さんによく似た姿と、走り寄つて、

「もし、もし……。」と、

「はる。」と立ち止まつた顔は、やつぱり基ではなかつた。

第二十四回

新しい權勢並ぶものもなき時の大臣平群をも、大阪經濟界の新盟主を以て自分も許す古き門閥の富彙黒崎をも、その場からことごとくと歩かせて、再び派出所の前まで歸らしめ、さて改めて大臣には嚴かな敬禮を捧げ、その俵に駕つて一散に來た道へ引つ返すを見済し、自分も亦俵を命じ黒崎と共に本署に向ひ、事の次第を當直警部に具申し、そのまゝ代理の勤務を終つて自分の下宿、蜷川の流れ一つを隔て、北陽狭斜の絃歌も手に取るやうな堂島裏一丁目とある路次の奥の二階の六疊に歸つて、柱にかけた鹽たれ浴衣と着更へ、心易い机の前にこゝろと横になり有り合せた刑法講義の二三冊を引き寄せて枕にした基は、ここに六年の不平が一時に消えて、低い窓から吹いて來る蒸し熱い風も、宛がら春の初風の心地がして心の奥の堅い氷も、忽ち融て流れて終つたやうだ。怒つて怒つて、もう相手にもならぬとまで、姉のお清は怒つたであらう、この一年は何の便もせず、年賀のはがきさへ今年は越さなかつたが、その以前は、もうお前のやうな言ひ甲斐ないものが、連も試験に及第など思ひも寄らねば、一日も速に歸つて來いと、矢のやうな催促を放つてゐた。父の六郎治からは、

年々家政が困難になつて、この分ではもう五年と家の體面が保てない、さうま
で落第が續ては郷黨の手前も面目なく、自分も遂々と老衰して、村長も勤まら
ない有様だから、巡査などは罷めて歸つて來いと、月に一二度の手紙が皆腸を
抉るやうな文句ばかりである。

基が小兒の時には、弟の今の潔をそのまゝ、戦好きの負け嫌ひの、毎日隣家
近處の友達を撲り泣かせる悪作の大將であつた。中學に入つてからはますます
負け嫌ひが増長して、滿身功名の外はなく、理窟を好んで能く論じ、しばしば教
師とも言ひ争ふて快としてゐた。その卒業の際には、軍人となり、實業の學校
に入り、進んで高等學校に行かんと言ふ者が多かつた中に、基のみ一人、我は
私立の大學に入り、三箇年間法律政治の學を修め、判檢事登用試験を受け、立
法の議員や行政の役人共が、啄を容るゝこともならぬ判官となり、控訴院長よ
り大審院長に進み、法律の裡面を潜つて賄賂を貪り、我儘を振ふ役人共を片端
より刑罰に處し、以て、現代政治界の廓清を企圖するも男子一生の快であるとい
ふやうなことを考へ、直に東京に出て帝都大學に入り、父が仕送る豐なる學資

に思ふ程の書籍も求め、學年の試験々々には優點を得、撰裁判擬國會、討論會、
雄辯會には缺席したことなく、いよゝその雄辯を揮つて、判檢事試験の如き
は殆どその限中になく、亦優等を以て業を終り、一旦國元に歸つて、その政治
法律の大議論に村人を驚かし、更に東京に出で、初めて試験に應じたが、自分
が及第の姓名は當然としてゐた官報に見はれなかつた。

此の時の基が落膽は譬へやうもなかつた。朋友の二三子が及第の名譽を見る
も忌々しく、腹立ち紛れに東京を去つて大阪に來たが、國元での豪語を思ふと、
もう學資をとも言つて遣られず病氣の爲めに我が最も得意とする憲法の試験を
受けなかつたので、今年は及第することが出來なかつた、しかし試験は本年限
でない、明年を待つて居て下さいと家に言ひ送り直に此處で巡査となつた。

お清も六郎治も、この時は少しも基が落第を悲しまなかつた、反つて學資は
幾程でも送つてやるから、一心に勉強せよと言つて越したが、基はこれを斷り、
もう自分で働いて自分で目的を達しますと、その當時は學資とも言はなかつた。
勿論その落第の不名譽を幾分にも償はうといふ負けじ魂から。

第二十五回

巡查の勤務にて得る毎月十三四圓の俸給では、とても基が身を支ふることは出来ぬ。三個月ならずして月々五六圓の補助を國元に仰ぎ、その翌年また試験を受けたが、この度は筆記試験でもう落第した。

この時の基が失望は、實に死んでも了いたいほどであつたが、職務の劇しい爲に勉強の時間がなかつたので、容易な試験にも落第した、何卒許して下さいとの旨を六郎治とお清とに手紙で言ひ送つて明年こそはと、再び氣を取り直し、その一個年は實に多くを眠らずに勉めた。

お清も六郎治も、まだ怒らなかつた、反つて奮勵を與ふる手紙を以て慰藉めて呉れたが、第三回の試験には亦口述試験を以て刻ねられた。

能辨を以て自ら許して居た基は、口述試験で落第し、その能辨なる爲め部長や警部に愛せられず、また愛せられやうと思はず、今に一巡查たる身であるが、この落第よりして全く沈黙の人となり、國元へは、斯くまで容易ならざる試験

に及第の名譽を得んには兩三回の落第は覺悟せねばならんことを言ひ送つて、しかも自身は聊自暴となり、時には勤務も缺き、時には好まざる酒を仰いだこともある。

けれど基は、自暴となるも自棄とはならなかつた。友人が幾度か落第の後、遂に目的を達したるを見て、更に自ら奮ひ、四度試験に落第したる際には、餘りに多くを嘆かなかつた、お清が書面には、この頃より不平が交り、父からは學資が一切止まつた。

基は黙々、今までの自分を顧て、たゞ、然ゆるやうな功名心に驅られてのみ居たことに氣が注いだ。而して自分が今までに國元より仰いだ學資の如何に多きかに思ひ及んだ。この頃また基は、收賄某辯護士を拘引し、瀆職某議員を逮捕した、その收賄や瀆職やが、皆二三百圓の金故であつたを憐むと共に、我が學資の爲に我が家の傾かんとするを知り、我が村債の爲めに我が故村の自治が危からんとするを聞き、茲に好んで經濟の書を読み初め、反つて家を思ひ故村を憂ふる心が増して來ることとなつた。

しかし、落第の身一つを齎してこの際故郷に歸らんことは、基が氣象として到底出来ないことである。五度の落第の後には、落第を何の苦痛とも覺えず、法律條文の末に係る穿鑿は一切顧なかつた、只管町村自治法と、その經濟について眞面目な研究を始め、今は法冠法服の榮譽は少しも望まず、昨年六度の落第にも笑つて、今は、今年もし及第せば、直に郷里可部阪峠の故村に歸り、村長とならうと決心つてゐる。

基がこの六年間の警察勤務は、實に基に取りては生ける社會學の教科書であつた、世間一般の罪惡は言ふも更なり、骸骨の上を裝ふた肉と髑髏との集團が、權勢を食ひ、弱者を凌ぎ、賄賂を收め請托を容れ、眼中公利公益を認めざる一派政治惡徳の暗流を眺めて、憤慨遣る方もなき此頃、今日からはからず國務大臣を誰何め、富強を本署に引つ立て、初めて胸に支へられたる不平も残りなく吐き出した心地となり、常よりも安く、そのまゝ蚊帳を布べて眠つてしまつた。

明くれば殊に機嫌よく、正服姿の勇しく、出勤せうとて路次を出ると、後から呼ぶものがある。

「本地はん、本地はん。」

「は。」と振り向くと、路次の入口に沿う格子戸ががらりと明いて、今起きたばかりらしく、高い島田の黒髪が一線二線亂れかゝる顔に、愛嬌笑を見せた婀娜姿が朝顔を染め出した阿波縮の浴衣に、緋の伊達巻しどけなく、

「昨夜はね、ほんまに失禮しましたよ。」

基を視て、石入の金環輝く手を前にしての挨拶、見れば昨夜の紛争に帽子を拾つて呉れた女、小六といふ此家に住む藝者である。

「あ、失敬。」と、基はそのまゝ出て行つた。

第二十六回

出入橋巡查派出所の時は今夜の十二時。
「私共は船で四國へ渡りたいと思ひますが、川口の船着場へ参りますには如何

邊へ参るのでござりますか。」

二人連の旅の青坊主が斯う問ふのを、親切に教へてやつた髭の美しい巡査、見張所の八角時計が氣忙しく鳴るを聞くや縮めておいた硝子障子を引き開けて内に入り、勤務表に印を押しながら、

「オイ、本地君、時間だよ。」と、呼んでまた籐椅子に腰を卸す、

「よし、よし、お蔭様で一時間眠りました。さあ見張らして貰ひませう。」

休憩室に聲があつて、靴を穿く音。帯剣を佩く響がしてやがて界の引戸が開いて出たのは基である。大欠伸しながら上衣の釦を一つ一つ、篋める。

「君、餘程ご機嫌ですね、珍しい夢でも見たのか。」

美しい髭が眼を細くして起つた跡に、基は代つてその椅子に掛け、歪んで冠つた帽子を取つて埃を弾き、時計を見ながらまた正しく冠つて、

「見た、善い夢を……。三分、四分過ぎたねアハハハハ、見附けられたらちよつと待罪書といふところか。」と、また微笑ふ。

「待罪書？、待罪書は恐縮の至りだが、善い夢が聞きたいな、派出所の夢……」

も奇抜な歌枕ぢや。」と、髭は頭を傾けて、

「呼びさまさるゝ派出所の夢……如何ぢや、善い下の句だらう。」

「その通り。君も随分駄句るな、驚く、何處で何時學んだ、風流巡査と、三號見出しの新聞種にもなりさうだ。」と、二人は共に所外に出た。

「いや、新聞種には君の方こそだ、大臣を歩行かせ黒崎を本署へ同行する杯實に痛快だ、僕は聞いて溜飲が下つたさ。」と、髭はその美しい髭を撫でながら、

「僕は平生から君には推服して居たが、君が昨夜の態度には全く感服した。これから署長が如何な處置を執るであらう、見物だね。」

「アハハハ、まあ、俵夫位が罰せられるのかね、それとも、大臣のご威光で我輩が首になるかも知れんアハハハハ。」

基は大口を開いて笑ふ、髭は急に姿勢を正して、眞面目に、

「恠しからん、署長は決してそんな人ではないが、萬々一、君が首にでもなるやうなことがあつたなら、それこそ天下の一大恠事だ、巡査は何の爲めの巡査だ、君、構はんさ、殿打の告發を遣り給へ……」

陳慨に堪へず、髭は遂に官吏の職務権限論をも持ち出し、現代の實業家、富豪共の隠れたる犯罪を痛罵り、職權職務を亂用して愧ぢざる官公吏どものあるを慨き、公明にして、正大にして、賄賂も取らねば權威にも屈せず、朝から晩まで、夜から朝まで、薄い俸給に不平も言はず、せつせと勤勉めて怠らぬものは、我輩、巡查が第一であらう、この點に於て、巡查は大なる誇を有す、と決論つたが基が黙つて微笑つて居るのに拍子抜けした如く、髭は新地の街路に廻り出かけた。

派出所の見張を一時間、部内の巡廻を一時間、二時間勤務の後の一時間を、一疊に足らぬ休憩室の一間に潜り込み、終日汗に塗れた體軀を狭い蚊帳の裡に投げ睡んだともなく、夢は故郷の空に還つて、年寄つた父母や、弟妹の顔を見た嬉しさ。話して話して話し盡して、結ばれた我が心の有り丈を訴へやうとして、たゞ一語を交ゆる暇もなく、呼び覺まされたので見果てぬ夢を更に現に見張つた居る。

不動の姿勢で、派出所の軒に小開き警燈に照さるゝ顔は、疎な鬚髯のやゝ延

びてゐる爲か、病に疲れた後のやうに、雨頬や、憔悴けて、帽子の庇深き眼も凹んで見れ、これが、平群大臣を咎め、黒崎富豪を引き立てた人とは思へぬ、ただ折り、佩劍の鞘を前に握つたり後に握つたり、今しがた呼び起されて同僚に見せたあの機嫌のよいにこゝろは空もない。

十二時を過ぎての後は、此處も人通が少く、通行禁止を犯さうとする俣もななく橋の袂に残つて居る二輛の俣ばかり、家には待つて居る妻子もあらうに、まだ歸るべき勞銀のない爲か、まばらに通る人毎に、「行まッ」「送りまッ」と勤めるが、勤めに乗るものもなく、派出所前の氷屋の門前に涼んでいた老仁も亦、大欠伸しながら店を収めだした。

折柄、一輛の俣が梅田の方より蔦地に走つて來て、派出所の前にパツタリ止つた。

第二十七回

派出所の前に停まつた俣の上から、危さうに降りた女、自分の拳の中に堅く

握つて、臑に濡れた銅貨の幾枚を俵夫に渡し、

「まことに有り難うございました。」

と叮嚀に腰を折つて禮を言ふ、俵夫は黙つて踏け取つて、また梅田の方にごろ／＼と歸る。

女は蝙蝠傘と風呂敷包とを地面に置き、

「失禮でございますが、ちよつともものをお尋ねいたします。」

両手を膝の下まで垂れてお辭儀すると、基は舉手の禮儀正しく、二歩三歩進み寄つて、

「は。」と、一語答へながら、淡閑い軒燈の影に背いて臑げな女の横顔を睨てゐる。女は戦々しながら、

「あの、これが出入橋とか申します交番所でございますか。」

「さうです……………」

基は更に一步前に、「お前……………」

覗き込む、その顔を見てびつくり、

「あら、まあ、あなたは、兄さん……………」

慎しんで来た言葉も、嬉しさのあまり、故郷訛と共に飛びついて、基が両手をしかと握つた。

「まあ、兄さん……………、兄さん……………、私ね、私ね……………」

と、さながら慈母を待ちかねし小兒のやうな。

「お琴かい、如何して……………」

痛いほど堅く握つた手の熱く熱く、口は吃つて、私ね私ねとばかり、暫時何事も得言はざる妹を見て、何だか先に見た夢をまた見るやうに、嬉しいよりも先づ胸が騒いで、基は慌しく、

「お前、如何して来た、わ、一人なのか……………」

またそのまゝの故郷言葉。

「わ、私ね、嬉しうて嬉しうて……………、たつた一人、兄さんに會ひたいばかりに、汽車に乗つて今、梅田に来て、その巡查さんに俵を雇ふて戴いて來ました。心配で、心配で……………」

そのまゝ兄の手を放して、両袖を顔に、俯向いて歎歎り泣く、廣島で結んだ髪ももう形が崩れて、護謨の小櫛が地に落ちた。

憐らしいことも可愛いことも、泣く兄には勝たれぬ親の心もして、じつとその崩れた鬘を視てゐた基は、落ちたその櫛を拾ふて、砂を吹いて、手の拳で拭ふて、無細工にも妹の頭に挿いてやりながら、

「泣くな。さう泣くな。泣くことはない。他人が見て唾ふ。」

心から出る聲はおなじ言葉の色にも違ふ。「もう僕が此處に居るぢやないか……」顔を掩ふた妹の袂を取り除けやうとするも、夜目には見違へるほど大きくなつた、六年振りの顔が見たいからである。

「もう善い、まあ、内に入れ。」
基まづ所内に入つて椅子に倚ると、お琴も續いて硝子障子の内に入つて、卓子の側に立つ。

お琴は頻りに、滾れる涙を袂で拭く。その母によく肖た懇願な目元、父によく肖た細い口元、美しく無事で成長したことよと、基は嬉しく、しげく眺

めて、洋燈の心を捻ち上げ、

「まあよく来た、毫も知らなかつた。」と、にこくする、お琴も亦、兄の變つた巡查姿を不思議さうに見遣りながら、

「兄さんに會ひたくて來ましたのよ……兄さん大變に瘡せて、それでも健康でしたの？」と、寄りついて覗く。

基は鬚髯の延びた頤を撫でながら、
「瘡せたか……。お前はしかし、肥れて大きくなつたね、もう途中で知らずに

遇ふたとして、そのまゝに行き過ぎるであらうアハ、ハ、ハ。」お琴もまた、
「私もですよ……。」と、情分とする。

第二十八回

不眠不休の警察に身を處いて、劇しい勤務の裡にもう六年、今年二十九になつて、なほ試験といふものゝために、屹々と勵む苦學に憊れた兄の顔と、平和な田舎の平和の家庭に、慈愛しまれて養育てられた、世故の風は少しも知らな

い福相の妹の顔とが、互に向き合ふて、派出所の洋燈の影に並ぶと、廣い顔や圓い顔、さすがによく肖た兄妹ながら、見たところは親子ともいひたい位である。

「大きくなつたことー。」
基はまたくりかへす、見れば見るほど、一人の妹が斯うも美しう大きくなつたのが嬉しくて、

「お前、もう十九……だね。」

飛び立つほど嬉しいところへ、斯ういはれると、お琴は押捺れるやうな、羞しいやうな心地で、俯向く。

「何か、お父さんやお母さんも健康でか。」

「わゝ、健康でゐられます。」

いよく禁めがたく溢れた笑聲は、雪の下から初雉の、ホ、と鳴くやうな。「アハ、ハ、ハ。」基も調子づいて「まあよう来た、よう来て呉れたが、僕は今晩は當務だから、明日の朝まで歸れない。お前傳に乗つて僕の下宿へ行つて呉れ。」

「わ？。」と、お琴は不思議さうに、「明日の朝まで兄さんは此處に勤めてゐらつ

しやるの？」

「さうだ、明日朝九時までには歸るから、此處から傳に乗つてね。」
基が立たうとするど、

「いゝわ、兄さん、それでは私も此處で明日朝まで兄さんを待ちますわ。」

「アハ、ハ、ハ、此處は派出所ぢやないか、そんなことがあるものか、お前も疲れたであらう、早く下宿へ行つて休むがよい、下宿の小母さんは親切な人だよ。」

「いゝわ、私、休まなくてもよろしい、此處で待ちますわ。」

「お前まだ食事も済まないだらう。」

「わゝ。」

「それ見ろ、早く下宿へ行つて、小母さんを起して喰べさせて貰ふがよい。故國の話は明日聞かう。」

「私、ひもじかないから……。」

「アハ、ハ、ハ、お前此處に居て腰を掛ける處もなく、僕はもう二十分経つたなら巡廻に出て行つて、林といふ巡査が歸つて来るよ。」

「さう？」と、お琴は時計を見て、「此處は駐在所とは違ひますの？」
「あゝ、田舎の駐在所とは違ふ、僕は今見張の時間で、お前と此處で斯う談話を
をしてゐることもならんのだ。」

折柄、休憩室の電話の鈴が、熱れつくやうに烈しく鳴り出した。
基は直に電話機に就いたが、

「は、は、は、然です……、は……わ？。は、二人よろしい。」と、次第に聲
高く、「あゝあ分かりました。林巡査は今巡廻中です、僕は見張りです、は、は、
は、よろしい、承知しました。」

お琴は此方からじつと眺めてゐたが、あれが電話といふものであらうと思ふ
てゐると、基は急いで出て来て、

「今、絹笠町で人殺しがあつて、非常線を張ることゝなつた、お前は早く下宿
へ行け。」

言ひ捨て、所外へ跳り出たが、
「俣ッ……俣夫……。」と、橋の袂の辻待俣を呼んで来るや、

「お琴、お前はこれに乗つて行け。俣夫、香根崎橋の南詰を東へ入た、第一の
路次を入つた右側の内田といふ家へ送つて呉れ、叩き起して本地の妹だと言つ
て呉れたら分る。」

お琴は何が何やら問答なし、荷物の動くやうに再び俣に乗せられて、はや人
通も稀な市街を、兄の下宿へと送られた。

第二十九回

基は派出所の洋燈をわざと細め、硝子戸を締め切り、蜷川と郵船會社の運河
とが十字に交つて、出入橋と縁橋とが鈎畫の形をなしてゐる袂の、茂つた柳の
蔭に身を潜めて非常線に就いた。

高等商業の高い校舎は闇に黒ずんで、運河に落つる電燈の影揺がす。測候所
の赤い光が、大空の南に當つて一點人魂のやうに浮ぶ。通るものは、時々蒸し
熱い風が何處よりか来てまた何處へか遁げて行くのばかり、殺人の犯人らしい
ものは影さへ見せぬ。

六年の寒暑を警察に慣れて、今は別に辛いとも感はないが、昨夜のことを思ふと、官僚政治の権化と唄はれてゐる國務大臣を誰何めて、しとくと歩行かしたことの氣味よく、今宵は圖らず可憐しい妹を見て嬉しく、基は今や非常線の警戒にありながら、言ひやうもない愉快に満ちて居る。

思へば、満身たゞ浮雲のやうな功名心に驅られて、帝都大學を卒業して故郷に歸つた夏、時も丁度七月、家の裏庭の葡萄棚に攀ち登り、未來の大審院長が未熟の葡萄を撈つて居た時、下にはお琴が仰向いて居た、年は十四、荒い緋の浴衣の裾短く、自分が土産の安物のリボン喜んで頭に飾り、「兄さん、一房、兄さん一房。」と泣き聲で、強請むを面白ことに思ひ、故意と自分ばかり食べてゐたが、如何して足を踏み過つてか、大審院長は挫と地面に墜落つてしたゝか頭を撲つて傷さは傷し、暫くは起きも得ずらなかつたのに愕いて、お琴は大聲を擧げて、「兄さんが死でよ、兄さんが死でよ。」と喚めき立て、その時六歳の潔と共に泣き叫んで、一家内に騒動させたことがある。それから後に想像ひ出すお琴は、何時でもそのまゝのボツナリとした大眼の、裾の短い着物を着た

お琴で、潔は才植頭の六歳の潔であるが、今夜のお琴はもう十九である、髪も濃い、丈も高い、もう立派な嫁さんである。六年見ぬ間におの通り大きくなるものか、潔も定めて悪作になつたであらう、數へて見ればもう十一と。所懐は遠く故郷に歸つて、父母を念ひ家を念ひ、轉じて村を念ふと、曠昔の功名心は洵に夢の如く霧の如く、我身ながらも恥かしく、更に今朝の新聞が論じた「地方改良と人物」なる會心の文句を暗誦する。

學校教師は教科書の蓄音器となり、智識を供給する買人となり、宗教家は教會寺院の堂守となり、所謂慈善金の仲次となり、町村長は會社の手代、村民はたゞ營利の奴、士魂商才全く廢れて地方自治なるものは殆ど商魂商才の人を以て其命を保持され来る。

朋友や知人は、自分に進取の氣魄が無くなつたといは言へ、何を名譽に自分には判官の冠を着やうぞ、判檢事試験に身を窺すは、我が堅實な村の人となるについて、入用な資格を作らうまで、この職論の一節は、實に我が故村の爲に下した鐵槌である、と基思はず振り向くと、先程より哀な聲を呼んでゐた夜泣

圃餓が、赤い屋蓋車を曳いて橋の彼方に佇み、振鈴を鳴してゐると、通りかゝつた一人の婦人が、この深夜にたゞ一人、その車の蔭に立ち止つたが、その亂れた髪丸鬘しだらな帯の垂れ結び、瘠せ面の意地悪さうなあたり、お清姉さんをそのまゝである。ごうぞ父にも母にもよう宵た人の通らぬものかと思ふ折しも、堂島濱の方より大聲の叫が響く。
 ハツと身を構へた利那、法被着た車夫體の男が一散に走つて来る。續いてまた年若い女房が狂亂の姿に飛んで呉る。
 後からは、「待てッ！。待てッ！。」と、疾呼る聲が闇に怖しう響く。その聲は紛れも無い髭の美しい同僚林である。
 基は跳り出た、出るや先づ車夫體の男と引つ組んだ、組んで捻ぢ伏せうとする、女は後から基に武者振附く。何を、と片手にその鬘を引摺むと、素首は基が手に残つて、車夫と組んだまゝ如何した機會か、二人は岸より運河に墜落むや、追跡けて來た林は逡巡もせず、等しく河に飛びこんだ。

第三十回

基が住む堂島裏町の露次の入口に、千本格子で前を圍み、更に小さい杉の丸太で雨垂に犬垣を設置へた清楚な住居がある。檐の電氣燈の磨硝子には「みなみ」と書いてあるが、これは當時北陽の新地で、女侠の男嫌ひの、胡弓の上手として名高い藝妓、松本屋小六の屋形で、小六も此屋では南君子といふ普通の婦人である。

「ご免……、ご免……。」と、二口ばかり、

勇しい蹠蹠輪の自用車を今此處に駆け着けさせて、徐に降りた五十餘の男一人、縞縞の羽織裾長く、縮の浴衣に白い足袋、冠つてゐた麥稈帽を脱いで俵夫に渡すと、禿頭病のやうなそのテカ〜の頭顔が光る。

男は何やら大事さうな包を兩手に抱へ、下駄の音にも氣を置く様子にて、斯う訪ふと、

「何誰はん？」

奥から妖めいた聲が洩れて、やがて格子戸の掛鐵を外して見られたのは、よくもかばかりと思はるゝほど肥れ太つた下婢である。

男は叮嚀に腰を折つて、

「小六さんと申しますは此方さんで………」

「さうだす、あなたはん何誰はんで。」

「私は黒崎から参りました石田と申す支配人でございますが、小六さんにお目に懸りたくて参りました、どうぞお取次を………」

下婢はつくづくと男の顔を眺めて居たが、奥に入つた、やがてまた出て来て

どうぞ此方へといふ。

男は導かれて奥に入つた。

狭いながら、松、楓、葉蘭などを植ゑて、一基の雪見燈籠も置き、數個の岩をも築いた庭に向ふ奥の六疊の間の、開け放つた障子に背を凭せて、小六は皮蒲團の上に坐つてゐる。今宵洗つた黒髪は、肩から背を流れて疊にまで、低く垂れた室内電燈の光に澤々と、そのやゝ首を傾げて、莞爾と笑つて、襟手と剛

ねて居る顔は、眉毛の餘かなだけ、眼の爽かなだけ、徐に潮して循る温い、血の色も見るほど白き頬の福々しいだけ、艶に過ぎて懐いほど。

小六至つて健康な身でありながら、今夜は少し氣分が善くないとて、青樓からの噂せも断つて、日の暮れるほどから好きな小説に讀み耽つて居たが、黒崎からの使者と聞き、急に改まつて、

「あなたはんが黒崎はんとこの支配人はんだつか？」と、色も香もなく問ふ。「ハ、私がその、何で、支配人で………」

畏まり申した男、先づ小六の美しく上品なのに氣を呑まれて、同じ皮蒲團の上に座りながら、片手には扇を、片手には手巾を、頻りにハム／＼と、羽織の袖口を煽ぐ、長い首筋の汗を拭ふ。當世紳士たる富彙の家に、さりとは面白い堅氣な支配人との、黒崎一家の下男下女の總取締、支配人とはいへど、富彙が内庭の小遣錢の番人位と、小六は先づその人柄から推量へた。

男がたいもじ／＼として、用向を言ひかねた様子を見て、「アア、ほんとに熱いことだすな、少とも風がおまへんわ。」

と小六は音もない襦の風鈴を眺めて、男に用事の催促をする。男は、携へて来た紫縮緬の包の重さうな函を、自分の膝の側に引き寄せ、

「實は、その何でございます……、主人が宜しく申しまして、へ、へ、へ。」

可笑しうもない作り笑ひの聲を、小六は聞くのがもう厭である、

「さうだつか、それであんたはんのご用事は？」

と、直に無遠慮に問ひ詰めて、こんどは男の顔を熱々凝視すると、男はますます困つたらしく、

「實は何でございます、主人からぢき〜にお願ひする筈でございますが……この品は輕少でございますが、あなたから、本地さんとか申します警官にお届け下さるやう願ひまして……。」

恭しくその包を押し進め、頭を壁に擦りつけて、漸く擧げた男の額からは、膩のやうな汗が玉と分泌んで流れて居た。

黒崎の支配人といふこの男が、果して何の用事ぞと推しんで居た小六は、ぞつとする程愕いた。

第三十一回

小六は愕いた、否、寧ろ呆れた。

——黒崎はんともあらうあの方が、何といふ仕舞ぞ、ご自分に通行禁止の處へ傳を乗り入れて、まだ本地はんに傲慢に働いて、本地はんの爲めに警察に引つ張られはるや、今度は袖の下から、こんな品物をこの人に持たせて、私を使者にして、どうぞ、堪忍してお呉れやすと言はさうといふ、これは嫌らしい賄賂だな、本地はんがどうして斯な品物を收受らはらうぞ、この間も新聞で嚴しかつたあの役人はん達が、水道や電車路のことで、大勢引つ張られはつたのも斯なことだからであらう。南地の初彌姐はんの内が、家宅捜査を受けられはつたも斯なことであらう——と、思はず戦慄したが、小六もまた性が善くなく、左あらの體で、

「さうだつか、品物に依つては私、届けもしまんがな、これは何だつか。」

男は怖々と、

「何でございますか、私は少しも存じませんが、主人が左様申し附けまして……。」
「何か分りませんか、私も困りまんがな、持つ行て私、何と本地はんに申しま
んの。」

「へ、へ、。」と男は頭を撫でながら、

「實は主人が一向存じませすで……その何と申しまして宜しいか、其處はあな
たから宜しいやうに……。」と、小六が前に堅くなつて言葉も避る。

「妾には毫ともあなたはんの有仰ることが分りまへんがな、つまり、これを本
地はんところへ持てよ、何と言ひまんの。」

「實は、その、何で、私もあなたにお目にかゝるは初めて……。」

「いね。」

小六は憎いほど沈着いてしかも、敵手に向つて下す追撃いよく急に、

「お初にお目にかゝりまんがね、その事ぢやないのだす。」

聲立て、ホ、ホ、と笑つて、「これを持つてよ、つまり本地はんに、この間のこ
とは見通しとくんはれと謝罪りまんの？」

羨む切らぬ男の言葉に、小六が方から言ひ出すと、

「へ、へ、、實は主人が、ツイ賭車通行禁止とは存じませすへ、へ、。」

「あゝ、さう。」

小六は膝を此方に向けて、

「分りました、それではこれは賄賂だつか。」

一句、極めて優しいこの聲は、比首より鋭く男の喉にこたへ、

「わ？。」と、男は叫んで、皮蒲團の上から半這り落ちた。

小六は少しも猶豫はす先程から手に弄つて居た生絹の團扇もて、軽く、男の
前に据ゑてあつた濃紫の縮緬の布紗包を叩いて見て、顔に貧る髪を手で撫でな
がら、真白い雨の耳の後に掻い遣り、

「賄賂だすやろ、賄賂なら何程と最負を受けてゐる黒崎はんの仰でも、妾は嫌
だす。」

ねね、あんたはん、あゝ石田はんだつか……、石田はん、妾ね、賤しい勤を
して、妾は賣つてゐまんが、身と心とはまだ能う賣り物には出しまへん。

黒崎はんには大變な最負を受けて、昨夜平群のご前が見えましたが際にも、松本屋から聘らせて貰ひまして、妾お迎へに参りました途中、あの事は妾側でよう見ておましたのや、その時妾、斯う思ひましたわ、妾が男でおましたなら、直ぐ、本地はんにお味方したいが、口惜しいと、あんまりだすは、平群のご前だつて、大臣ちやおまへんか、一人のお巡りはんを打つなんて、お身分にも似合ひまへんやろ。黒崎はんもなあー！」

何の憚るところもなく述べ立て、

「妾、嫌だす、石田はん持つて歸つておくんははれ。」

襟を正して石田といふこの男を見つめた。

第三十二回

小六は口癖のやうに、「妾が男でおましたなら。」と言つて居る。二十世紀の日本の女の理想は藝妓だといふ位、その藝妓で、これほど美しい容色と藝とを有ち北陽に全盛を唄はれる彼女は、何故に男でありたいと願ふのであらう。

小六が父は、東北の師團に鬼神と呼ばれた、今は世になき鬼貫將軍である、といふことは、小六と今は長の胃病で大阪病院の特等室に、日の目を見ぬ母の小勝との外には知るものがない。小六は父なる鬼貫將軍が俠骨の血を承けて、負けじ魂の強い上に、日露の役、その將軍が戦死せられた號外を手にして、母からそのことを聞いた時、母からその將軍が疎ましい軍服の小照を貰つた時、哭いて哭いて、病になるほど哭き崩れて、二日二夜は眠もせなかつた。小六にはまた煎といふ一人の兄がある、それは誰の子であるかは、お袋の小勝が今に言つて聴かせぬ。この煎は小六とは、全然性質が違ふ幼い時から手にも足にも追へぬ怠惰もので、女のやうな優しい顔で、東京の某中學五年に在學の頃から身持を崩し、醫師になるべき筈であつた身が、今は文士俳優の名乗つて、何處に如何して居るか定住もない、小六はこの兄が泌々と厭で、時には、死んで呉れれば宜いと思ふこともある。

父を父とは夢にも知らず、よしや知つたとして、父の生前に、たつた一口でも父と呼ぶことの出来なかつた小六が身には便に思ふ兄が便とならず、美しい自

分の今の容色と、嗜好で覺けた身の藝とによつて、今こそ何の不自由もなく暮しはするものゝ、朝夕化粧の鏡に向ひ、胭脂粉黛の装を凝す時折、自分で自分に見惚れる下から、母の寝れた姿に較べて、身の終焉を思ふと、何物の財寶も欲しくなく、萌々出るも枯るゝも同じ野邊の草なれど、よし枯るゝ年は積るとても、花の面影ばかりは變らぬやうと祈るごとに、何となく無常をも觀せられ、自分が、「男であつたならば。」容色も入るまい世にも超てるであらうと思ふのが彼女を女侠ともならせ、男嫌ひともならせたのであらう。

この心は、端なくも美しう亦た此處に露はれた。

「ね、石田はん、世には議員はんの辯護士はんのと、妾を最負して下はつたお歴々の殿方で、賄賂で不體裁があつた方はんが二三人もおます、妾今晚黒崎はんから電話で、お前は帽子まで拾つてあげたあのお巡はんの住處を知つてゐるかとお聞きやすから、ア〜それは妾のご近處だすとは申し上げましたけれど、本地はんとは泌々話したこともおまへんのに、どうして斯な賄賂が持つて行ますかいな、斯なことは支配人のあんたはんにも分りますやう、一體これは

何だす。」無遠慮にも小六、引き寄せて兩手に包を解き開くと、美しい半蕨の函が見はれた。

「オー。」と、石田が呆れて顔ふ方には目も呉れず、美しい髪斗を裂き棄て、突き返して、

「お錢があるぢやおまへんか。早く持つて歸つてお呉れやす。」

裾を拂ふて次室へ起つ。石田は全身汗に濡れて、顔に少しの血色もない。

折柄、戸外に「ロ〜」と俥の音が停つて、

「ちよと、お尋ねします。この邊に本地さんといふ方がおまへんか。」と俥夫の聲。小六は本地と聞くより直に戸を細目に開けて見ると、俥の上から一人の婦人が叮嚀に首を垂れて、

「私は兄……。」と言ひかけてまた、「本地の妹でございますが、少とも存じませるので……。」

小六は勢よく戸を引き明けて、

「あら、本地はんだつか。こつちだすこつちだす。」

小走りに走つて路次に入り、狭い仄暗い煉瓦登の上をカヲユロと、忽ち雨戸をトソ〜と叩き、

「小母はん、小母はんちよつて起きて頂戴な。」
内に石田の居ることは忘れてしまつたかのやうである。

第三十三回

絹笠町の人殺し犯人は、その夜の明方に本署に自首して出た。基が林巡查と共に力を協せ、運河の泥水の中で格闘の末引つ捕へたのは、罪状がまだわからぬ曲者で、基はそれを本署に拘引て、今日十時過ぐる頃やうやう下宿に歸るといふなつた。

その俣夫體の曲者、如何に基が調べても、警部が糺しても、白状せぬ。残念なのは、今一人の曲者を取り通したことで是が由々しい悪漢であらうといふとは、基が手に發つた蝶々齒の崩れた髪で想はれる、捕へられた曲者は、自分は全く彼とは關係がない、たゞ眞實の女とのみ信じて俣に乗せたばかりだといふ

が、昨夜林巡查が巡廻中、偵邏の同僚に人殺しがあつたと聞いて、直に堂島濱通りの或る地點を警戒してゐると、怪しい俣が通るのを見附けて、透さず誰何て試ると俣夫も俣上の婦人客も、そのまゝ一散に逃げ出して、遂に俣夫のみ、兩巡查に捕へられた前後の舉動から考へると、勿論女装の曲者であることは疑ない。兩巡查とも全身泥水に濡れ汚ち、本署で同僚の服をば借着したが、基は何時の間にか左の首に少しばかり、負傷をしたのを、眞白な細帯に結ぶと、何か事が仰山に見わる。

疲れきつた身體ながら、妹に會ふ嬉しさに、元氣よく路次の入口まで歸ると、その靴の音、帯剣の響を待ちかねた小六は勝手口から、下駄の音も高々見はれて、
「本地はん、ちよいと、ちよいと。」

その長い浴衣の袂から起る香水の微風に、基が前を遮つて、

「オヤ、あんたはん、如何しやりました。」
活々と俠氣に輝く眼を、更に潤と見開き、眞實憐いて、基が手首の細帯と顔と、見較べて動かない。

「いわ、少しばかり、かすり傷を負いましたばかりで……………」

故意とその手を背後に隠すと、

「オヤ、さう？あの平群はんのことで……………」

「いわ、昨夜少しばかり……………」

「ひどいお恠我で？」

小六は自分の事のやうに、自分の織い手首を握つて見る。

「いわ、ほんの輕傷で、繻帯などにも及ばないので、有り難う、失敬します。」
と、ツイ其處の自分の下宿に歸らうとすると、小六は、指環如く我が兩手を輕く口にして。

「ちよいと本地はん……………」と、眼ばかり細く笑はせて、聲低く、

「昨夜、黒崎はんのどこから支配人が参りました、妾にな、あんたはんところへ羊羹を持つて行けと言やりますの。妾腹が立つて、賄賂だすやろ、嫌だすと断りまして、開けて見てやりましたの、あんたはん、驚くぢやおまへんか、中にはお銀がおホ、ハ、ハ。」

小六は基が退出るのを待ちかねて、わざとこれ告げに出たのである。權威に屈せず、僅に一巡查の身を以て、大臣と争ひ富察と争ふたその意氣の嬉しさと同時に、一方ならぬ最負は受けながら、時の權勢を身の翼に、小雀一羽を殺めんとする猛鷲の大臣富察憎らしく、男ならばと思ふ折柄、黒崎よりとて贈つて来た一品を、心の行くまで痛罵り盡して、基にまで届くるにも及ばず、叩き返したことのなほ嬉しく、基に向つて黙つては居られぬのである。

久しく折々顔は見ながら、昨日の朝の出勤まで、曾て一語も交へたことのない基は、聊か面耻ゆく、立ちながらの談話さへ迷惑と思ふて居たが、あはれ一藝妓の身として、眼中大臣なく富察なく、賄賂を賄賂として現に斥けたといふその女丈夫の烈しい直情には、感情深き身のひたと動かされて、

「さうですか、それはどうも有難う！」

帽子を取つて慇懃に、
「全體如何いふ次第で黒崎さんから……………」

「宜いちやおまへんか、もう返しましたから、ママお早く歸つてお上げ、妹さんがお待ちだす」と何にも拘はるところがない。

第三十四回

廣島を出る時食事をしたばかり、長い途中を汽車に揺られて、何にも喰へずやつと大阪について兄に逢ふて、人殺しといふので、またも總身が縮まる程怖しく、俥に乗せられて兄の下宿に着いたものゝ、お琴は夢をでも見てゐるやうな心地である。

可部阪崎の麓、連なる巒峰に四境を取り圍まれた田園遠く近く青葉に茂つて、天は高く風は涼しく、そして廣やかな家庭にのび〜と育つた身が、俄に暗い狭い、知らぬ路次に入るさへ何となく心地悪く、牢窓をでも探るやうな氣持もするに、下宿とはいへ、素人屋の、五十幾歳と見えるお姫さんが、二分心の洋燈を二階に點して、土瓶に茶を持つて來て呉れたばかり、入口の土間から二疊の臺所を通つて、胸を突くほど急な階子を登つて六疊に入つた時には、お琴は

此處を不思議に思ふばかりであつた。

二階は天井低きこの一室のみで、高い窓の下に据ゑてある兄の机の上にも、三尺に足らぬ小床の上にも、蓋の投げ捨てある瘠せ長い古本箱の中にも上にも、厚い薄い、大きい小さい、幾十冊の書籍が堆く積み重ねられてある。ママ大變な書物だこと。兄さんは明け暮けこの書物を讀んでゐなさることかと、嬉しく、急に四邊を見廻すと、柱には紵の單衣と浴衣とが悄然と懸つてゐる、麥稗帽子と絞の帯とが机の下に見えてゐる、涼爐は此方の上り口に、小さい鍋を傾けて、側には炭斗と脂松とが投げてある。兄さんはママ、此處に六年も住居して、勉強してゐられたのであらうかと、誰見る人もないに、お琴はその獨を謹んで跪いて居ると、やがてお姫さんは亦階子をギョ〜踏み鳴して來て、あなたはんご飯はまだでつか、お蒲團は此處に、ご飯は此處にと、押入を明けて教へて呉れる。丈の低い、白髪、抜け残つた鐵漿の齒を見せてにこ〜と、性質の善さ相な顔であるが、その早口な言葉がお琴には解りかねて、ただ「へ、へ」とばかり、吊て貰ふた蚊帳の裡に入り、なほ汽車に揺られるやうな軀を

横にして、眠たともなく覺めたともなく夢に入つた。

明けて今朝、お嬢さんの親切で朝餉は喰べたけれど、九時になつても九時半になつても、基は歸つて来ぬ。十時も過ぎ十一時に近い頃、やうく待ちかねた基は、元氣よう歸つて来るや、

「お前何か喰べたか……、お前は故郷では鮭が大好物であつたな、今お嬢さんに頼んでおいたよ。」と、帽子を取る帯剣を取る。お琴は背後に廻つて上衣を取る。柱の浴衣と着替へて、机の前に大脇を据ゑ、机の下を捜して團扇を取り出し、

「お前熱かろ……。」と、お琴が方を煽いでやる。

煽がれながらお琴は、
「マア兄さん、手を如何して、人殺しに如何かなさつて？」

「いや、人殺は自首した。これは何でもない傷ぢや、マア善う来た。昨夜も騒いたが、今日見るといよく、大さうなつてゐるに驚く。依然左の目の下に小さい黒子があるなアハ、ハ、ハ。」

お琴は自らその黒子を指尖で抓いて、

「兄さんは大變に老けてよ。」と笑ふ。

「老けたか、お前が来ると知れば鬚髯でも剃つておくのであつた、お前一つ風呂にでも入つて、髪でも結はして来るが善い。」

狭い一室は同胞が親愛の情に満ちて春のやうな。
街路には車輛の軋轆烈しく「氷、氷。」と呼び聲が嘎れ濁いて聞ゆる。

第三十五回

「兄さん、私が脱けて来て、こんなことを頼みますのが腹が立ちますの。」

今晝食を喰べて終つて、お琴は心配顔に兄の机の側に覗く。机の上には、お琴が貯金の通帳と、三十圓を入れた紐の長い財布がそのまゝある。

基は机の上に兩腕を杖いて頭を壓へながら、何事をも言はず妹が、わざとこの大阪に來た次第から、途中の様子を聴いて居たが、

「なに、腹が立つものか。」
擧げた顔には血色が喪くなつて、眼は潤んでゐる。

「お琴ー。」と、先程着いた手紙——お琴が故郷を出る日、六郎治が書いて潔に投函させた手紙を、巻いて頂いて机の抽斗に入れ、妹が方に向き直り、

「僕はね、じつ、に……………」

胸もまず、力の籠つた言葉を押へて、妹の眼を眺めたが、等しくその涙を含んでゐるのを見て、急に形ばかりの笑を見せ、

「お前のやうな善い妹を有つて居るのを幸福に思ふ、お父さんもお母さんも容易ならん心配をして下さるは勿論だが、お前は實に、僕の知己だ。

よろしい、お琴ー。

安心して居てくれ、今までだとして情けて居たことはないが、今年は屹度やる。

やつて見せる。」と、聲はやゝ震へてゐる。

お琴は、自分が来たといふことが、これほど兄に亢奮を興へやうとは思はず、

今はなか／＼兄の決心が怖しくなつて、

「ねね、兄さん、お清姉さんが餘りなことを有仰るでせう。私、腹が立ちましたの。けれど、兄さんが餘りに勉強して病氣になりなされると詰らんわ。來年で

も善いによ、兄さんが一度及第さへして下されば。ねね、さうでせう。」と甘へるやうに言ふ。

「いや、お清姉さんも僕のことを心配して居てくれるのだ。これも嬉しい。そのお清姉さんよりも、村の人達は定めて僕のことを悪くいふだらう、僕はね、

お琴、もう試験に及第したいとも何んとも思はん。況んや判事や検事に成らうとは少しも思はん。歸れるなら今にでも故郷へ歸りたいのだ。」

「わ？。」とお琴がその二重脣を見張ると、「お前に言つたこと分るまいけれど、僕は近頃勉強すればするほど、ますます歸りたくなる。僕が判検事になつたこ

て、それが如何して村の爲め家の爲になる。僕が落第の學費の爲に本地家は傾いた僕が居ない間に村の政治や經濟は紊れて來た。僕は一日も早く歸つて家を

興し村を治めて見たいが、今の世はね、お琴、形式の世ぢや、落第したまゝで歸つては、人が輕蔑する。自分の主義も主張も貫徹せぬ、僕が試験はその爲の

試験ぢや、及第したなら直に歸つて、家の人になつてお父さんにもお母さんにも安心して貰ひ村の爲には、お父さんのこの手紙にもある、豊年が反つて凶年

になるといふやうな事のないやうに働きたい。これが僕の本願ぢや。

「基は自分の妹に對して、言葉があまりに理窟がましようなつて來たのに氣着き、
「まあ、善い、お前が暫く逗留して居る間に、また言ふて聞かす。熱からう、
故郷よりは……。お前氷でも喰べるか。」

「いゝね私、氷やなんか喰へませんの、兄さん私ね、もう一人で故郷へは歸り
ませんの、兄さんがお歸りなさるまで一緒に居て、ご飯でも炊きますの。」

「アハ、ハ、ハ、何故？。こんな處にゐるものぢやない、まあ、あちこち見物し
て歸るが善い。」と、基は團扇をハタタと使ふ。

「嫌。來年まで、更來年まで、兄さんの側に居ますの。」と、眞顔に笑ひ
もせぬ。

「アハ、ハ、ハ、何故？。」

「兄さんが瘡せて居なされること、東京から歸りなすつた時とは全然で違ひます、
私が來て、こんなことを頼んだ爲に、無理な勉強なさつて、もし病氣にでもな
りなされると、私……。」

首を俯れて竊と袂で目を拭ふ。

「あゝ、お琴、もう何も云ふて呉れるな……。」

第三十六回

松籟に通ふ微妙なる胡弓の音が歇んで一座また陽氣となつた時、如何したこ
とか、稻妻のやうに大白が飛んで、向ふの柱で微塵に碎けたと思ふと、破片は
霰のやうに四邊に散る。

「馬鹿め！」

頭上から嗷鳴つたのは富察黒崎。

「無謀！。何をなさいます……。」

颯と起つたのは小六である。

こゝは泉州濱寺の松聲樓、その二階の六疊の間。燕脂のやうな夕映は神戸邊
の空に消れ、暮れ行く茅葺の浦には眞帆も片帆も見えなくなつて、淡路島の淡
影惜しく、漁火次第に數を増す頃。

この夕、小六は黒崎の聘によつて、初彌と呼ぶ友妓とともに此處に來たのである。

温厚篤實な紳士黒崎も、昨夜支配人の石田が歸つての復命を聞いては、沸騰する胸がじつと鎮めては居られぬ。大阪經濟界の盟主である、自ら許す應揚も今は顧る迄がなく、まだその四十に満たぬ青年客氣は、いさゝか暴飲の酔に煽られて、蠅と伺伺ふた脈管が二條額に見はれ、爛々たる眼、調はぬ口振り、どうも形勢が尋常でない、瘡めた女府も肥れた仲居も、美しい初彌も密々心配して、二度三度小六が袂を牽いても見たが、小六毫も騒がず、知らぬ顔を作つてゐた。それも胡弓の響くほどは、さもなくかつたが、一座がツツと騒しうなると、暴に黒崎が機嫌は狂ふて、如何いふ調子からか斯くなつた。

「全體無禮な！ 汝は石田に何と言つた。」

富察はも一個銀盃を鷲掴にしてゐる。第一矢を覗ひ損じて、再び小六が蛾肩に磔するつもりか。

起つた小六は怖げもなく、膝をば掻き合せて行儀よく、前よりも近く黒崎が前

に跪き、

「まあ、喫驚しましたわ。お一盞戴きませう。」

富察が掴んで居る銀盃を取り、初彌に波々と注がせて、口にもせず、指頭で戴せて膝の上に、矯然と笑つて、富察自ら諸車通行禁止の掟を破りながら、警察に同行かれた餘憤が、賄賂を突き返した無念と共に、今自分に飛んで來るのだなど、小六はその見ゆ透くやうな心を讀みながら、

「石田はんにはだすか、それはね、黒崎はんは斯んなことをなさるお方ちやおまへんあんたはん一人のお考やつたらまあ止しなはれ、妾嫌だすよ、斯ないに申しましただけ。」

何處までも平氣な美しい顔。

「勿論、乃公がそんな馬鹿をするものか巡查位に對して……………」

富察はその白縮緬に絡まる金鎖を邪慳に指に巻いたり釋いたり。

「さうだすやろう。それで妾、石田はんたらに然う申しましたの。」

「が汝、賄賂だと言つたな。」

「はあ、言ひました、言ひましたわ。」と、水も滴る大束髪を顔かせ、
「言ひましたわ。」重ねていふ。
「何と？」

富察は裕衣の袖を捲つて、白い腕に力を籠め、グッと膝を押へ切つて、
「何が賄賂だ。無禮な。黒崎もあらうものゝまだ一度も思しい賄賂を授受し
たことはないぞ、も一度言つて見い人聞が悪い！」

「いね。ね。黒崎はん。あんたはんが賄賂を如何う斯う爲さるといふのやおま
へん本地はんごあんたはんごの衝突から、石田はんが彼様ものを本地はん
らばるのは、そりや賄賂やと、申したばかりだす。」

「馬鹿奴。その面提げて何ぢや。貴様が兄は泥棒だぞ。今日の新聞見たか。泥
棒の妹でありながら、他人の賄賂呼はりをする奴があるか。」

「わ、黒崎はん！」
小六は急に膝を繕ふ。
富察の顔には勝利の誇が漲る。

一座の形勢はますます不穏となつて、初瀬も仲居もたい戦慄してゐる。

第三十七回

悪酒に泥酔の客人が何と言はうが、そこは賣藝の身の尋常とて、稟賦の任侠
心は言葉の穂にチヨくと見れながらも、じつと辛抱して、心頭にも懸けない
が、泥棒の妹と呼ばれて、小六が涼やかな兩眼は、叱咤キと凄く吊り上つた。
「何と有仰ります？」

富察一人を小兒のやうに、その丹花の如き口に翻弄んで、彼の是のこ、取り
押へやう方もなかつた、小六は膝にした銀盃に波も立たせなかつたが急にそれ
を盃洗に捨てしまつて、一二寸を膝行り寄ると、怒つて居た今までの富察が顔
には嘲るがやうな笑が漾うて、直角となつてゐた双の肩を緩め、

「今日の新聞を見い汝が兄の蕪といふ前科者の泥棒が、髪を冠つて女房と化け
てゐたのを、あの、本地といふ巡査に捉へられかけたことが、悉しく出てゐる、
汝。まだそれを知らんか。」

「わ？」

小六が面には見る／＼血の色は褪せて行く。

富豪は膝を揺り出して、今は紳士の品位もなく、ふつと長い酒氣を吐いて、
「わ？とは何だ、その圖々しい面！」

「……………」

「その圖々しい面を有つて、他人の賄賂呼ばはりは何事だ、泥棒の妹とあつて
見ると、お里も大抵知れるぢやないかアハ、ハ、ハ。」

敵手が勝利に昂ぶるほど。小六が狭い胸には、押へ難い一塊の混乱が詰め
けて来る。此の座で、朋輩の前で、藝妓と蔑視んで、黒崎さんともあらう方が
何といふ失禮など、

「妾……………」

妾はこれでも鬼神將軍の娘。君國に命を捧げた將軍の娘。藝妓なればとて……

……………と、直にも言ひ放ちたいを、身を悸はせて忍ぶ切なさ、

「妾……………」

さすがは意地でも女性の弱く、涙滴々雨と降る。

「知らない？。兄の泥棒を知らない妹が何處にあるアハ、ハ、ハ、ハ。が、知らないと
外言へまい、その言へない心があるなら、汚らわしい賄賂など人を馬鹿にした
こと言ふな。ア、透いた、胸がいさゝか透いた、初彌、酌だ、酌だ。」

盃洗の銀盃を引いて高く捧げる。

初彌も仲居も、たい富豪の暴き威に懾伏れて、何とも扱ひかねて戦うてゐる。
また扱ふべき迫もない。

忍切れない無念は遂に忍ばれない、小六はその膝越に探た初彌の銚子を奪ひ、
「賄賂やおまへんか、あればかりは、あんたはん、何の爲にお錢の入つたお菓子
の函を、妾の紹介で本地はんに贈らうとしなはつた？、妾の兄は泥棒かて、妾
は他人さんの財欲しうはおまへん、賄賂なんて尙さら使ひまへん、あんたはん、
ご身分にも似合はん弱いもの虐待は止しなはれ……………」

バツと燃ゆるやうな裳裾を蹴つて、三尺ばかり背後に下るや、そのまゝ壘に
伏しついで、大東髪も崩れよと、帛を裂くやうな聲に泣く。

と見た富豪は、餘憤更に一時に炎と燃わて、ものをも言はず、竝べた杯盤を足蹶に任せて、二階の櫓子を駆け降るや、泣き沈んで居る小六には取り合す、引き止やうとする初彌や女將や仲居を叱り着け、帽子も洋杖もそのまゝ、待たせた車に飛び飛つて逃げてしまつた。

第三十八回

その美しい容色に、際乎とした俠骨の香が動けばこそ、小六は北陽で全盛を唄はれ、やんごとなき殿達にも愛でられて、しかも浮名を流さで来たのであるが、今日ばかりは自らその俠骨の爲に泣いて泣いて、思ふまゝに泣き崩折れて、女將や初彌が慰撫も反つてうるさく、松聲樓を悄然と、泣いて俥に乗つた時には、松の枝から松の枝へ、大松小松の茂り合ふ濱寺公園の樹間に、十日ごろの月が射して、茅葺の濱風その輕羅に、夏なほ寒き初夜のころであつた。南海電車に飛び乗つても、人に見られる顔耻しく、故意と片隅に坐つて、難波に着いてからは俥を急がせ、堂島裏町の屋形に歸るや、召し使の下婢を驚か

して慌しくサイダーを呼び、呼吸も繼がず大洋盃にグツグツと二杯ばかりを續け、その日に限つて讀まなかつた新聞を引き擴げて見ると、『女装の悪學生』と三號見出しの『昨夜絹笠町の二人斬りの爲め、出入橋派出所の林巡査が非常線に就いて居ると、年頃二十六七と見える奥様風の婦人を乗せた一輛の俥が、堂島中一丁目の人通り少い邊を駛せて行く、その舉動が何となく怪しく、眞實の女とは思はれぬので、林巡査が誰何めると、俥夫も婦人も俥を捨て、一散に逃げ出したので、直にその跡を追つかけて行く、丁度本地巡査が出入橋の側で同じく非常線を警めてゐたから、此處に四人の大格闘となつたが、怪賊は何處へか逃げてしまひ、俥夫をば兩巡査の手で、蜷川の泥水の中で引つ捕へ、本署で調べて見ると、『娘の蕪』と綽名せられた墮落學生。新地で名高い小六の兄で、彼は新派劇の某俳優一座に加はり、九州邊を徘徊してゐたが、何時の程か大阪に歸り、昨夜その仲間を俥夫の装に仕立て、得意の女装をして東區の某時計店へ忍び入らうとして果さず、阪神電車で神戸へ逃やうとする途中であつたといふことが細々と書いてある。

小六、一通りその記事を読み終るや、手にしてゐた新聞紙をば七八に裂き捨て、直に奥の蚊帳の裡に倒れた。小六の平素を知つてゐる下婢は、懼れ戦いて何事をも得言はぬ、此處にもし病院の母が居たなら、小六は泣いて號んで母を怨んだであらう。

如何しても睡むことが出来ぬ。悪いは兄の薫である。この兄のために世を狭められ、この兄のために人に嘲けられ、なかなか全盛を唄はれる身のいよいよ辛く、今までも幾度か泣かせられたことぞ。鬼神將軍の血を承いで、よし日陰のはかない今なればとて、何故この兄の妹と呼ばれねばならんであらう。この兄の世にあらんほどは、たとへ面影の變らで年の積ればとて、誰を便に世を送らうぞ。再び兄が来たならば、直に警察に突き出すこととせう。再び兄が歸つたなら、そのまゝ斬つて捨て、貰ふことにせう。倒れてゐた小六はそのまま、露路續きの本地が下宿に駆けつけたが、二階の窓には洋燈の灯影が淡く映つて居るばかり、何の聲もないまゝ、さすがに戸をば敲きかねた。

第三十九回

戀に忍んだこともない小六、不埒な兄もるに、同じ露路の續きとはいひながら、本地が下宿の軒下に忍びながら戸を叩きかねてゐたが、家内の時計がたつた一つ、寂しい音を告げたのを機會に、軽く兩戸を叩く。

何の應もない。
 こんどはやゝ力を籠めて、また二個ばかり叩くと、家内に咳の聲がして、

「どなたはん？」
 呼ぶ優しい聲は、何時でも莞爾々々と、齒の抜けた小母はんである。

「小母はん、妾……………」
 細い聲をなほ遠慮すると、

「あゝ、小六さんだつか、今、開けますわ……………」
 やがてマツチを摩る音がして、程なく掛鎖を外して小母さんは戸を細目に開ける。

「ほんまにお氣の毒だすな、小母はん……………」

「いゝわ、何だす？、小六さん。」小母さんは嬉口を開いて笑つて見せる。

「あのな、小母はん、本地さんはもうお寝みだつか……………」

小母さんは小六がまだ座敷着のままの美しい装の姿を眺め、不思議さうに、

「本地さんはな、今晚はお務だすよつて、明日朝でなげにや歸らはりまへん、何ぞ急くご用事がおまんの？」

「オヤ、さう？」

小六は落膽して、下駄の音のみユト／＼とさせてゐたが、

「そんなら、明日伺ひますわ、小母はん大きに……………」腰を折ると、

「そやけどな、妹はんが一人留守してゐやはりまんの、温和しいお方だつせ、呼びまへうか。」

妹はんとはお琴がことである。けれど小六はお琴がことは少しも心に浮びもしなかつたが、小母さんに斯ういはれて、一昨日の夜更けて、仲で来た田舎娘を、自分が此家まで手導したことを思ひ出した。丈の高いポツナリと肥つた、

蝶々指を亂した娘、俣夫にも叮嚀にお辭儀をし、自分に對つては一入叮嚀に、

「奥様、どうも恐れ入りました、有難うございます。」と、信玄袋と風呂敷包と

編蝠傘を持ち添へた娘を思ひ出した、が、お琴に會ふ必要はない。

「いゝ、明日伺ひますわ。大きに押りさん……………」

小母さんはヒ、ヒと笑つて、

「そんなら、明日な、本地さんが歸らはつてから……………」

頻りに點頭いてまた戸を締めた。

憎に兄、また何時そんな變装で歸つて来るかも知れないが、その時は一と思

に切り捨て、貰はう、自分の方からは警察に突き出すこととせう。またたとへ

兄がどのやうな悪業を働かうとも、自分は毫も知らないといふことを告げに來

た小六は、俠骨でもやはり女である。巡查たる本地に斯く明言したなら、それ

で多年の念も露れ、今日黒崎に罵られた口惜しさも幾分は自ら慰められもせう

と、もう明日が待ち遠く、鬼將軍の娘ともあらうものが、兄とはいへ、その父

も知れぬ兄の爲に、今夜の有様は何事ぞと思ふと、残念で溜らず、私が男で

あつたならど、人目もない夜半の露路に、ハンカチーフの朽ちるまで泣いた。側の共用水道栓が、緩んだ螺旋からシューシューとしづくを落してゐる。蜷川の流一個を隔てゝは、新地の某樓の裡奥に、なほ爪弾の絃も響く。あゝ、世に甲斐なきものは女の身である。殊に悲しきはつとめ、の身である。心にもなき笑語を傳り、心にもなき歌謠を賣り、罵られて辱しめられて、十年の後の身を何處の日向におくべきぞ、と思ふと、思ふたどて詮なきことながら、戀しきは、懐しきは、世に亡き父の將軍ばかりである、陸軍少將、從四位、勳三等、某の旅團長として、あゝ、お父様は遠陽とかで戦死された。何故、何故、何故あの病院のお母さんは、お父様がご存命の日に、せめてご出征の日にも、たつた一口でも……。

遂に小六は聲立てゝ泣き出した。

第四十回

生計に何の不自由もない、不自由なければなごてなほこの上の生計をと望む

べき、衣服に何の不自由もない、不自由なければなごてなほこの上の衣服をと願ふべき。富豪といひ紳士といひ、世に時めく殿達も、一度この巷の人となるや、もう富貴でもなく紳士でもなく、横暴な、輕薄な人々のみである。小六はその裏の裏まで知り抜いて、綾羅をとも思はず珠玉をとも思はず。自分が男子であつたなら、兄が剛毅の男子であつたなら、たゞそののみが口惜しく、昨夜も水道の側で泣きに泣いて、一人悄然歸つて寝たけれど、おなじ罵られるものなれば、賄賂のことを言ふて言ひまくつてやれば宜かつたなご、遂に夜明方のみをうつくとして今朝となつた。

風呂に行き、化粧を整へ、下女が給仕にて朝餉を終ると、女髪結が来て、緑の黒髪はまた新しい蝶々となる。もう本地さんも歸られた頃と、白紹の長襦袢に縞縞の單衣、某の畫伯が酔うて淋漓の墨を落して揮つた芭蕉の、これも紹の帯をかつちと締め、再び本地が許を訪はうと勝手口を出た。

折柄、露路の奥からカラコロと出て来るのはお琴である、片手には少しばかりの白米を入れたバケツと、片手には煮けた行平土鍋を持つてゐる。

「アッ！」

お琴は眞つ赤な顔をして、バケツトをも土鍋をも其處におき、急いで細い襟を取り外し、

「奥様、この間は有り難うございました……………」

慇懃に腰を折つて謝禮を述べ、顛りに自分の襟を掻き合す。

小六は零時自失れてゐたが、これが本地の妹と心着き、

「オヤ、マア、あんたはん……………」

見れば見るほど、罪も汚も詐もないたいポツナリと愛くるしい田舎娘である。

「あんたはん……………」と重ねて言つたものゝ、後は何と言つて善いやら分らず、

「今日は。」と口に任せて、「本地さんの妹はんだす？」

お琴はこの美しい小六が姿を見て、尊い方の奥様とのみ思ひ詰め、自分の身が愧しいばかり、殊に小六が流暢な言葉の調子が能く分らず、いらくしながら、

「は、左様でございます。」と、狭い露路の側に寄ると、小六は氣の毒でならず、自分も側に避けながら、

「どうぞお通りやす。」

「いへ、どうぞ奥様……………」

お琴はますます細くなる。

この罪ない人から奥様と言はれると、小六は眞實恥しく、

「オホ、まあ、あんたはん……………」と遁げるやうに、「ご免やす。」と、小走りに本地が下宿に走り入る。

お琴が今までに見た女の中で、小六ほど美しい女はない。その後姿を見送つてゐたが、やがて水道栓の側に行き、バケツトの米を研ぎながら、更に自分が生活の劇變が不思議でならない。

可部阪峠の點間から、瀧と流れて来る水をば、わざと長助老爺が手製の笥で家内に導き、米は大きな倉庫から取り出し、日に幾升を大釜で洗つて、廣い竈所の籠で盛に炊いたものが、この小さい土鍋で、涼爐で、二階でユトク炊くといふことが、まるでまいごこのやうな心地がして、面白く、兄さんが及第なざるまでは、二年でも三年でも、斯うしてご飯を炊いてあげやうと、獨でこ

にこと嬉しく、大阪に來た翌日、故郷では七厘といふのを、かんできたとは知らずに、兄に笑はれたことをも思ひ出して、我ながら面白く耻しいのである。その白米を研ぎ終つた時、基は佩劍の音勇しく、露路の煉瓦を踏み鳴して歸つて來た。

第四十一回

歸つて來た兄の姿を見るより、お琴はいそぐと駆け寄つて、

「兄さん、待つて居ましたのよ。昨夜はね眠られないので、私、あの交番所に行かうか知らと思ひましたかね、道が分らないでせう……。をかしいわ、行平土鍋でご飯を炊いたりなど……。」

その濡れた手を手巾で拭きく、圓い眼を細うにして和々する。

この妹あればこそ、今日は常よりも早く歸つて來た基は、斜に肩より脇に掛けてゐた外套を取り外し、手に携へてゐた靴と共にお琴に渡ししながら、先づ大笑して、

「交番所に來たとして仕方がないさ。それその、靴の中に、泣かないで留守した土産がある。」

「さう、何か知ら……。これ如何して明けますの？」と、外套を自分の腕に掛け、毎日基が辨當を入れて行く鰐口の小靴を明けやうとするを、

「田舎者ぢやな、その釘を押してグツと開くのぢや。」

「斯う？……、あゝ、開いてよ、オヤまあ見事な、葡萄！、梨！。」

「梨？アハ、、、それが梨か。」

「いわ、林檎よ。」

「お前がその顔の色と如何ぢや。」

「オホ、。」

お琴は軽く自分の顔を撫でて、また珍しさに林檎の一個を取り出して眺めてゐると、

「林檎よりも、お前葡萄がなつかしかる今年も家のは澤山生つたであらう？」とお琴よりも基自身になつかしくて、今日の歸り途に買ったのである。

「わい、生りましたよ、たんこく。」

「さう、お前は僕があつたの棚から落ちたのを記憶してゐる？」

「わい、わい。」とお琴は頷き、「兄さんが東京から歸りなすつた年……。」

「お前、その時泣いたねアハ、ハ、ハ。」

「オホ、ハ、ハ。」

一時に笑ひ聲立て、六年の昔を思ふ嬉しさ、兄弟ならでは知られぬ愉快であらう。

彼方の下宿の入口では、小六が竊と此方を眺めて居るとも知らず、基は、

「僕はね、これからまた派出所に行かねばならん。もう三時間先で歸るよ。」

「オヤー。」とお琴は驚いて、「また人殺しがあつて？」

「何有、さう人殺や泥棒があつてたまるものか、戸口調査の爲だ。」

「戸口調査て？」

「これもお前には分らないよ。」と、そのまゝ出て行かうとする。

一日の勤務を汗に終つて、なほ警察事務の爲には、非番の日をも潰されるの

であるが、妹の顔見たいばかりに、たゞこれだけの談話がして見たいばかりに基は歸つて来たのである。

「では兄さん、十二時頃にはお歸りですね。」

「あゝ、屹度歸る。」と、また帯剣をガチャガチャと露路を出て行つた。

お琴はバケツと土鍋とをそのまゝ、先づ兄の外套と靴とを右左に持つて下

宿に入ると、先程から兄妹の談話を手に取るやうに聞きもし見もしつてゐた小六

は、「姉はん、あの本地さんはまたお勤に行かれましたの？」と問ふ。

「は？」と、お琴にはまたその言葉の節が能く分らぬ。

小六は言ひ改めて、

「本地さんはまたお勤に行きなすつたのですか。」と、明瞭と問ふと、お琴は顔を赧らめて、

「ハイ、参りました……。」と、そのまゝ、危い階子を二階に登る。伊豫紵の單衣に友禪と桃色縹子の帯とを締めた後姿は、都會なれない質朴な振だけれど、何處ともなく生々とした點の見ゆるのは、あれまで優しい兄さんがあればであ

第四十二回

らうと、熱々身につまされて小六は太息を吐いた。

巡査の本地が大臣平群と、富塚黒崎とを敵手として争ふた有様を、その夜目のあたり見た小六は、別に本地を羨いとは思はなかつた、言ふまでもなく過失は大臣と富塚とにあるのだから、それを争ふは當然のことと思つた、けれども自分か男子であつたならば、強きもの憎く、弱きもの氣の毒でならず、今まで言葉交したことはないが、折々の朝夕見知つた顔とて、ツイ基の爲に帽子をも拾つたのであるが、敵手の黒崎がますます強きにつけて、今更思ふと、あの時少しも騒がず、潔乎とした態に、自己の主張を枉げず、大臣と富塚とをユトくと徒歩ませた基の人格が大きく見らるゝに、今日は一人の妹に對して、葡萄一房、林檎二個、勤務の中からわざと歸つて、泣かいで留守した褒美だとして、大聲で笑つた優しさ、何といふ美しいことであらう、何といふ陸じいことであらう、と小六は沁々とお琴が羨しく、急に會て談話がして見たくなつて、

「小母さん、あの妹はんに會ひたうおまんな、失敬おまへんやろか」と、小六で問ふと、やかましくミシンを操つてゐた三疊の小母さんは、鐵漿の剝げた長い反齒の残つたのを見はして、「よろしおますやろ、温順しいお方だすさかい、面白い談話でもしてあげなはれ。」

青樓のやつたりとした階子を軽く小刻に登るのと違つて、勾配の急な狭い危い段梯子を二階に上ると、お琴は驚いて、兄が外套と靴とを押し入れに投げ込んだ。取り亂してあつた座敷も、お琴が來てから昨日今日、机も書物も、着物も、みなそれぐの位置正しくなつてゐる。

「ご免やす。」

と、小六襖の陰に跪くと、お琴は貴人に仕へまつる如く、小六より下位には坐るべき處もなく、苛々しながら、自分も襖にすりついて跪き、

「まことに狭いところでございます、どうぞ、あちらへ……。」と上座に請める。小六は一時も早くこの無邪氣なお琴と心易くなりたく、故意と微笑つて、遠慮もせず。

「私小六と申しまんの、どうぞお心易う……今日は失禮だんが遊ばせて頂きに
参りました。」と、懐から金扇を取り出して軽く使ふ。

「サやうでございますか、私は琴と申しまして、本地の妹でございます、あの
奥様に教へて頂きました夜、始めて大阪に参りましたばかりで、何も存じませ
ん、どうぞお心易くお願ひいたします。」と手を突く。

「まあ、お琴はん……妾、これから姉はんと申しますわ、ねね、善いでせう、
あんたはんもね、奥様なご……同様、姉はんと呼んで下さいねオホ、」

打ち解けてお琴に了解り易く言ふ、その姿態から言葉から、碎けた中に氣位
があり氣位の中に言ひ難い親和が溢れて、お琴は心を引きつけられるやうな。
「どうぞ宜しう……」又お辭儀するを、

「ねね、姉はん……」と、小六はもう姉はんと呼び蒐けて、「妾、たつた一人だ
すわ。下婢が一人のみますばかり、母は病氣で入院してゐますし、兄がおまんが
ね、放蕩でしやうがおまへんの……あんたはん、あのお兄イさんだけだつたか？」

「いや、故郷にはまだ姉弟がございます……」

「さう、お故郷は何處で？」

「安藝でございます。」

「オヤ、遠いこと、妾も一度廣島まで行つたとおますわ、あんたはん大阪
見物にお越しやしたの？」

兩人が談話はいよく、隔意がなくなつて来るものゝ、お琴に了解り易いやう
にと使ふ言葉は、小六にはなか／＼骨の折れることである。

第四十三回

十二時を過ぎてても基はまだ警察から歸つて來ぬ。

正直なお琴は、小六に問はれるまゝに、自分は兄に會ひたいばかりに、兩親
と愛弟との家庭を脱けて來たが、一年でも二年でも、兄が試験に及第するまで
は、兄の側で身に適ふだけの仕事をしながら生活する考であることを語つた。そ
の田舎育ちの虚飾ない言葉から身の邊幅から、ポツナリと肥れた二重頤の圓顔

に、心の眞實が漲つて、憎まふとても、憎まれぬ。
 性質が任侠で、しかも鬼將軍の落胤であるといふ人に明れぬ誇の爲に身を焦す小六、三絃を弾き胡弓を鳴らし、歌ふて舞ふて、媚びて諂ふて、そして藝妓は翫手物になるもの、世の殿達に何の眞實があるものぞ、やゝ頑固に結ばれたその心は、怒つては燃わて炎となり、悲しんでは凍て氷となる。或る時は譯もなく寂しく涙が零れ、或る時は勇みたつて何事をも忘れる。あゝ自分ながら奇怪な心だと嘲つたこともあるのに、今日お琴に會談て泌々と嬉しく、心の奥の奥から、世間の煤烟を受けない清い柔和な春風が習々と吹いて来て、昨夜來枯れ寂れて居た林に、若葉の私語を聞くやうに思ひ、兄の薫が徘徊ふて歸つたなら、斬り捨てゝ貫はふとて來たことも忘れ、まだくお琴が談話は聞きたいのを、自分から遠慮して、家形へ歸つた。
 歸つて來ると、直に下婢を走らせて葡萄酒を買ひにやり、明け放つた座敷の縁側に皮蒲團を布き、前栽に向つて茫然と端座してゐると、
 「ご免、……………ご免……………」

忍び聲に蕪所から訪ふものがある。

「ハテナ……………」

と思つて猶豫すると今度は、「姉はん」といふのにトット起て境の障子を開けば、來たのは兄の薫であつた。

小六は「あら」と立すくむばかり驚いた。

薫は威勢よく俣を露路の此方の辻に乗り捨てゝ前後を胸しながら此處まで歩行いて來たので、怪しい金徽章の輝く角帽を庇深く冠り、身には黒綾詰襟の洋服かつちりと、肩より斜に馬上靴を襪に、鐵緑の眼鏡、棕櫚竹の洋杖、ごう見ても東京の私立大學々生が、夏期休業中の旅行か歸省かの姿である。これが小六より五歳の兄の二十八といへど、弟といつても人は疑はぬ優形、女にしても見たいくらゐ。

薫は勝手口から竊と入つて先づ履物にも注意し、故意と姉はんと呼んだのである。

小六の様子には頓着なく、薫は莞爾と微笑つて、直に靴を脱ぎ、洋杖と共に

右手に添へて、遠慮もなくツカツカと座に上り、左手を左右に振つて、

「しづかに、しづかに。」との意を示し、
「乃公はこれから満洲に行く。暇乞に來たのだよ。お前撲つて呉れても善い、叩いて呉れても善い。」と、愕いてゐる小六が側に寄つて囁く。

小六は黙つて、そのまゝ共に奥の間に入つた、手早く襖障子を締め切り、なほ、縮緬や上布や羽二重や絹や、帯に襦袢に單衣に、造作もなく投げ懸け引つかけてあつた衣桁を斜にして身の蔭に、兄妹は言葉もなく對座ふた。

小六の眼からは、ハラリと涙の玉が落ちる、それを拭ひも敢へず、何と言はう、何と號ばうと、水を撒つたほど陰に湿やかな一室を、暫時は床の裝飾時計の音に任せてゐたが、

「兄さん……………」

悄然と頭を垂れて腕を組んでゐる薫に向ひ、

「あなたは、あなたのお父さんを知つてらつしやる？」
その儘伏しつゝいたがキ、キ、と白絹の手巾を腫裂く音がする。

第四十四回

小六は演劇が嫌ひである。否、演劇が嫌ひなのではない、自分は藝妓であればとて、兄の薫は立派な醫師になるべき筈であつたが、其中學の卒業前から墮落し初めて、母の訓戒も自分の諫言を用ゐず、文士俳優、革新劇などいふ一團に加はり中央地方の小演劇を流浪し、一度大阪に來て南地の某座で、阿呆の下女を演つたことがある、小六はその時、朋輩の大勢とこれを見物して、冷汗をたら／＼と流して、それ以來、演劇を見るのが嫌になつたのである。その阿呆の下女が、大學生の姿と化けて訪ふて來たのを、「兄さん」と呼ばねばならぬ辛さがまたとあらうか。今日お琴に遭ふて、その兄妹の友悌い有様を見なかつたなら、小六は直に、この兄を警察に突き出したかも知れぬ。

あゝ、久し振りに出會ふた兄妹が、恙なかつたかと問ふ迄もなく、妹の身として兄に向ひ、その父は？と問ふ惨憺な例がまたと世にあるであらうか、自分は鬼將軍の娘であると思ふと、不屈な兄に向つては言葉さへ峻しく鋭く、

「兄さん、私、あなたを恨みます……」と、白絹の手巾を噛み裂いて、再び擧げた小六が形相は、毗睨が凜乎と釣り上つて、髪の亂れが一綜二綜美しいとも悽いも。

額に膩む汗を拭いて拭いて、黙つて居た薫は、

「いや、小六！」といふを小六は遠しく遮つて、皮蒲團の上を膝行り出で、

「いや、私、小六ではおまへん。小六は藝妓ですが、私、これでも、私、これ

でも……」

湧々と湧き立ちかへる身分の誇が言ひ放ちたく、憤みたく、遣らん方なき狭い胸の暗闇に悶れて、惣身を慄はせて居たが怖へ切れず、

「私、遼陽の戦で立派な最後を遂げられました鬼貫陸軍少將の娘です、君子だす……」

その負けじ魂は斯く叫ばせた。

「わ？」
と改めし小六が顔を眺めかへす兄の薫を恨めしげに睨め、

「私、お母はんをも恨みます、サア、兄さん、一體あなたのお父さんは誰だす？あんたは、少將の子ではおますまい。」

小六は肩で荒い呼吸をする。

「さう？」と、薫は頭を掻きながら、

「乃公はね、乃公はね、乃公が東京で文士俳優になつたとき、お母はんから、犬上辯護士の子ともあるものが……」と皆まで言はせず、

「犬上……犬上辯護士とは誰だす。」

小六は堰き込んで問ひ詰める。

「さう、大阪で、あの名高かつた……」

「アヲ！。あの收賄事件の？」

薫は點頭く。

「今は監獄の？」

薫はまた點頭く。
「まあ、私、如何せう……」

父を同じくせざらんことを願ふた小六は、胤の異ふ兄の父を聞いて、また泣き沈んだ。

犬上辯護士は、もと國會議員でもあつた。一時大阪の法曹界での敏腕家であつたが、一昨年の秋、大阪の某砂糖糖會社が詐偽破産を演つた時、恐喝取財といふ怖しい罪があつて、今は囹圄の身となつてゐる。

折柄、葡萄酒にやつた下婢が歸つて來た下駄の音が聞けた、小六は直に起つて臺所に出で、

「お前はんな、お母はんの病院まで行つて、日の暮れ方まで世話して來ておくれ……………」

そのまゝ座にも上げず追ひやつて、門まで出したと思ふと、外面には帯劍の音がかナヤ〜と響いて、高い靴音が勝手口の外で停まつた。

第四十五回

帯劍の響、靴の音、それは小六が今の先まで待つて待つて、昨夜も今日も帯

ねて行つた、本地巡査が歸つたのであるが、小六は憎い放蕩な兄が現在自分の奥の間に隠れて居ると、この帯劍の響靴の音が悚然とするほど怖しく、勝手口の障子を締め切つて此方から様子を覗ふと、水道の側でバサ〜と聞けて居た水の音がはたと止つて、

「アヲ、お歸り。」

嬉しげな聲がするのはお琴である。

「お、洗濯か……………」と基が聲。

「まあ、遅いこと、もう一時ですよ。お晝食は済みまして？」

「まだ。」

「私待つてゐました。」

手に取るやうに開けて靴と下駄とは共に路次の奥に入つた。

小六は森く胸を壓へて、また奥の座に歸り、

「兄さん、あんたは残念なども何とも思ひなはらんか……………」お父さんは違ふても兄妹だす、あんたは昨日の新聞を見なはつたか……………」

「いや、君ちゃん。」
 薫は細い聲で斯く呼び、衣桁の側の、小六が脱いで懸け捨てた襦袢の下に隠れるやうに、

見たよ。しかし、事實が進ぶ、乃公も随分と墮落したが、まだ泥棒はしない。「では、大手を振つて大道があるけまつか、心に闇い點はおまへんか。私、あなたのために、何程泣かせられましたやう、昨日の新聞についても現在……。」
 と、小六はますます攻め寄る。

「だから、君ちゃん、乃公は満洲へ行くといふのだ、全然心を改めて、……もう内地では誰も相手にして呉れず、君ちゃんにも心配かけるから、彼地に行つて、少しでも御國の爲に盡すやう働いて……實は藝が身の毒か薬か知れないが、満洲土人の女姿に變装して、遠く露領までも偵察に行つて見やうと思ふ。それには同志もある、その筋の人も居られる。今日實は君ちゃんに暇乞かたがた、實は旅費を少しばかり……。」
 眞面目にいふ薫が様子を眺めてゐた小六には、この談話がひたとその女侠の

心に適つて、

「ほんどだつたか、兄さん……。」

「君ちゃんが嘘と思ふなら、仕方がない、乃公はこのまゝ行くとせう。」と、立ち上らうとする兄が手を執つて、

「待つて下さい、私にどうしてお錢がおます?……。」

一間に入つて、筆筒の抽斗を捜してゐたが、幾程らかを紙に、自分が左手の小指に輝いて居た金剛石の指環を惜し氣もなく取り外し、黙つて渡すとまた黙つて受け取つて、薫は、

「君ちゃん濟まない、乃公は何日歸るか分らないが……。」

「宜しうおます、妾かて何時迄も藝妓はして居まへん。兄さん、確かに頼みますわ……此處は危険うおますよつて……。」と兄を思ふ信實の熱涙ハヤク。

「あゝ、君ちゃん、許してくれ、お母さんの病院へはもうご無沙汰する。五年、三年、十年の後、着て歸る錦を見てゐてくれ……。夜間が反つて危険だから、このまゝねね君ちゃん……。」

と、小六が手をしかと握り締めて、蒸は再び勝手から、勇しい學生姿、洋杖を振り廻して出て行つた。

問ひたかつた今までのことも澤山ある。聞きたかつた之からのことも澤山あるが、聞く暇も進もない、閑い身の兄をば一時も早う出してやりたく、小六は兄の後姿を見送つて、思ふがまゝに泣いた。

第四十六回

一晝夜が當務で一晝夜が非番とすれば、一個月に十五日は休まれる道理、さすれば勉強の時間は十分ありとの考で、基は初め巡査を志願したのであるが、毎朝八時に本署に出頭して、被服や携帶品の點檢を受け、警部から犯罪人や保護人の手當を聞き、署長から法律や規則やの訓授を受け、さて受持の派出所に詰めて交代するには、時々正午に及ぶこともあり、一晝夜の勤務を終つて歸らうとすれば、火事だの傳染病だの、貴人の護衛だの祭禮の取締だの、曰く何、曰く何と、殆ど毎日のやうに召集される、今日も現に、戸口調査とあつて、

久し振の可愛い妹に泣々と話す暇もなく、また出かけて行つて、漸う十二時の頃本署に引き上げた。

裏の道場に勇しい竹刀の音が響いて、正廳は森乎としてゐる。内勤の警部も巡査も見えず、卓子のみ形の通りに、偶然にもない静謐である。

基はちよつと四邊を見廻して、そのまゝ道場の方へ行くべく、煉瓦登の廊下を一つ曲らうとして、ハタと出會ふたのは署長の小山警視であつた。

薩州の産、陸軍歩兵中尉、西南の戦には、田原坂での抜刀隊、左の肩先に敵軍の彈丸を受けて、今も左手は思ふまゝに働けないとか、右の足にも二個の刀痕があるが他人はいふ、好きなものは擊劍と酒、嫌ひなものは餅と賄賂、暇さへあれば巡査に擊劍を奨励め、時に幾升を平げたとて、その赭黒い顔に色も浮べぬ、見るからして重さうな二十幾貫の大五體を運んで、機嫌よう莞爾とやつて来る。

基、立ち留まつて敬禮すると、
「や、本地巡査……、君ちよつと。」

そのまゝ、署長室に入り、仰様に椅子に倚る。
基は従つて入つた、そうして替類の積み重ねてある卓子を隔て、署長と向き合つて佇立んだ。

「君、請書を出して呉れ給へ、明日でもよろしい。」と、尙にこゝとしてゐる。この無造作とにこゝとが、多くの巡査や警部を悦んで部下に服従せしむる署長が天賦の徳で、何事にも隔意がなく、上官らしい故意との権勢は毫も見せず、巡査に出遇へば、自分の方から先づにこゝの禮式をする位である。

渡されるまゝ、基は謹で辭令書を請受つた。開いて見ると、その一通は巡査部長に任ずるといふので、一通は何給俸を給與すといふ増俸なのである。

時が今、朝日の勢力たる大臣の威光は巡査基を首にするかも知れぬとさへ同僚の間には寄り／＼噂せられてゐた折柄とて、基にはこの辭令が甚だ不意であつた。けれど硬直なこの署長は、深くこの程の基が行動を感じて、この辭令はその褒美であつたとは、後で同僚は皆言ひ傳へた。

基は、見たばかり、何の猶豫もなく、辭令書をば署長の卓子の上に押し返し今日派出所で認めた辭職の願書をば手早く衣囊から取り出し、状態に入れたまを署長の前にすゝめ、
「辭令書は辱う存じますが、一身の都合に依りまして、私は辭職が願ひたうございます、どうぞよろしく……………」

「辭職？、巡査を罷めたいといふのか……………」と、署長は辭表を開いて見て、
「アハ、何故ぢや、一身の都合といふ丈ぢや分らない。何か、別に善い職業でも見附つたのか。」

署長は泰然として、ムシヤクシヤと鼻の下にも頤にも茂つた半白の髭鬚を撫でながら、基が顔を眺めてにこゝとしてゐる。

第四十七回

小六が歸つて後、飯も涼爐に出來たけれど、お琴は一人で喰べる氣にはならぬ。兄の鹽垂れ浴衣を持つて出て、階下の小母さんの鹽を借り、水道傍で洗濯

をして居ると、基は元氣よく歸つて來た。見れば病人らしかつた鬚髯も綺麗に剃つて、着て居る制服は雪よりも白い。

「まあ、遅いこと、もう一時ですよ。」と、そのまゝ共に二階に上つた。この時小六が許には、犯罪嫌疑の薫が潜んで居らうとは知らう筈もない。

基が佩劍を解いて柱に懸けると、お琴は帽子を取つて机に置き、背後に廻つて制服を脱ぐ手傳をして、これをば壁の釘に懸けながら、お琴は、

「オヤー。」

喫煙げて、基の顔を睥めながら、

「兄さん、あなたは部長さんになつて？」

と今朝まで一個であつた制服の袖口の星章が、二個並んで輝いて居るのを見て、驚いて喜ぶのである。

基は緋の單衣と着替へて、團扇を持ちながら机の前に大胡坐をかき、僅に點頭き、

「實はね……、お琴。」

さなきだにお琴が愛くるしい顔は、もうにこ／＼と、机の上に見詰めて居る。

「實は僕、巡查を止めやうと思つて、今日戸口調査を終つて本署に歸つた時、署長に願書を差し出したところが、署長の小山警視が、まあ善いぢやないか、君は巡查部長に任せられた、司法官を志して居るものが、之れを有り難いと思ふまいが、試験を及第した後には巡查を止すも遅くはなからう。殊に明日からは本署の内勤をやつて貰ふのだから勉強の時間も少しは多くなるさ、願書を突き返へされた。」

お琴は端然と跪いたまゝ瞬もせぬ。兄が部長になつたのを、幸先の善い名譽と思ふばかりである。

「ところが、お前が見るやうに勉強の時間はなし、試験も近づいたことだから、落第して再度巡查になるとても、一應止すことにせうと、是非にご願つたところが、署長は、君が何を不足で止すと言ふのか知らないが、お前にも昨日話したあの平群大臣の一件ね、署長はそれを言つて、大臣はその翌日東京へ歸つてしまひ、黒崎をも一應取り調べたところ、二人には全く犯意がなかつた

ので、黒崎の抱車夫二人を抱留したが、それが氣に入らないのかといはれるのだ。いや、大臣や黒崎が如何ならうと、俵夫が如何ならうとそれは私には何の関係もございませぬ、私はたゞ私の職務を正當に執行したことを、衷心からの愉快としますといふと、それなら尙更辭職には及ぶまい、まあ今日は歸りたまへと、いはれて歸つたのだがお前にも相談せうと思つてね……………」

お琴はまた笑顔になつた。

折柄、「郵便。」といふ聲がして、階下から小母さんが「本地さん、お手紙だつせ。」といふ。お琴は直に降りて行つたが、溢れるばかりいよく榮爾と、

「兄さん、兄さん、潔がね、これ……………」

持つて來た桃色の状袋には、小學校でする細字の清書のやうに、双方の番地まで歪形に明瞭と、本地琴様、本地潔とある。

急いで封を切ると、半紙一面に墨黒々と、

拜啓、姉さんあなたは、僕にうそをついて、大阪の兄さんのところへ行きたされた。僕は泣きましたすが、父上や母上からそのわけを聞いてまた喜びまし

た。どうぞ兄さんが試験に及第なさつて、早くいつしよに歸つて下さい。お清姉さんは今日も來て腹を立てゝゐました僕、兄さんが及第して姉さんと歸りなさるを待つて、お迎に行つて、お清姉さんに言ひかへしてやります。

本地 潔

小さい姉上様

お琴は、我を忘れて聲を立て、幾度もく讀み反して喜んでゐる、喜んでゐるお琴の目の前には、意地の悪いお清姉さんの寝らしい姿が見える、その姉さんを姉さんとも思はぬ愛弟の才槌頭の悪作顔が見える。

黙つて聞いて居る基が兩眼には涙が珠と満ちて居る。あゝ罪ない潔にまでこんな手紙を書かすかと思ふと、老つた父母の愛慮の姿がありくく見える。

第四十八回

兄さんが及第なさるまでは、一年でも二年でも決して故郷へは歸らないとお琴はいふ。基も亦決して歸らしめたくはない。今は司法官にならうとての試験

でなく、たい及第せうが爲めの試験ながら、幾回の落第の爲めにもう頭腦は乾涸きつて、人の心の温い親愛に渴したるた基が情は、故郷はるく訪ねて来て呉れた愛しい妹の爲めに、油のやうに融けて、劇しい警察の勤務も苦るしからず、僅なる寸閑を以ての法律研究も面白く、巡査を止すならば、忽ち兄妹の生活もなりかねるところから、その辭職のことも先づ見合せ、二十圓に足らぬ俸給を節約にして、借二階の六疊に、そのまゝ住まふことに決め、もし今年も落第するならば、お琴は何處かの裁縫や料理を教ふる學校に入り、幸にして及第するならば、相携へて故郷へ歸らうといふ相談も定まつた。

かくして巡査部長となつた後の基は、毎朝出て毎夕歸る、お琴は飯を焚き洗濯をし、惣菜をも買ひに行き、大阪に来てからもう七日となつた。

涼しい朝の間に勉強することで、基は今朝も早く起き、洋燈に火を點けて机に向ふと、遙に警鐘の響が東に方つて聞ゆる。數へて見れば三點である、窓を開いても烟はない。けれど職務柄とて、直に制服を着け帽子を冠り、劍を佩きながら一室を飛び出さうとする、土瓶に水を掬んで階下から昇つて来たお琴は、

「兄さん、半鐘が鳴つてゐますよ。火事です？」と、眼を睜つて驚いたまゝ佇立ち味んでゐる。

「火事だ。僕は行くよ。火を用心に……………」

と、そのまゝ行かうとする。

「何處です？。私、怖いわ。」

「何處かまだ分らない、怖いことがあるものかい、此處まで焼けては来ないよアハ、ハ、ハ。」

「ですけれど私、如何せう、もし焼けて来たなら……………」

「何有、五軒か四軒か焼ける位さ、もし此處まで焼けて来たなら逃げるさ。」

「私、遁げる道を知らないわ……………。あの兄さんの大事な書物やなどを如何しませう。」

「アハ、ハ、まあお前その土瓶を涼爐にかけて、お茶を沸せ。書物なんか焼けても構ふものか、お前何處へでも遁げたら善い。」

「わ？。書物が焼けても善いの、あの多数な書物が……………」

「善いとも、皆何十遍となく讀んで頭腦に入つてゐる。この筆記帖一冊と、宜いか、お前はお前が着物がたつた二枚を持ち出せば宜いアハ、ハ、」

基は机の上の筆記帖を軽く叩いて大聲に笑ふ。忽ち、近い本署の警鐘は烈しく鳴り出した。基は直に走つて二階を降りたが、煉瓦登の露路を走る靴音はなくなつた。

階下の小母さんも、隣家にも近處にも起き出るものは一人もない。今まで脅て火事を見たことすらないお琴は、ぶる／＼と身を顛はせて、高い窓に覗いて見ても、やう／＼白み行く曉の天に、星の光はまだ瞬いて、遠く近く、相傳へて陰に懐い鐘の傳はるを聞くばかり、亂打劇しいのもあれば、一點二點緩なものもあり、颯々と吹く暴風は、戸障子をガツツかせ電信線を唸らせ、悽慘いとも、寂しいとも言ひやうがない。

やがて、隣家の二階の戸が明いて眠むさうな聲に、「何處やる……、遠いな。」

と獨言が聞けたが、大欠伸しながらそのまゝ引つ込んでしまつた。

第四十九回

夜は全く明け放れた、人は皆起き出てそれ／＼職業に就く、警鐘はなほ盛に響き渡りながら、この露路の一廓には何の變つたともなく、階下の小母さんがミシンの車の音、隣家の娘が三味線の稽古、火事は何處とも知らぬ顔の静謐さである。

やがて新聞紙の號外は、飛び交ふ鈴の音勇しく配布された。今朝四時何分、北區空心中から發た火は、折柄の東風に烈して熾炎忽ち松ヶ枝町を焼き、岩井町壺屋町河内町より、此花町は今方に盛に焼けつゝあり。數十日來の旱天に續いて、水道の給水十分ならず、警官消防夫は必死となりて奮闘を續け、軍隊また應援に来ると。されどこの露路には驚き噪ぐものはない。「火元はずつと遠いこれから束だすは、此處まで焼けて來まつかい。」と、小母さんが沈着き拂つた様子に、お琴はやゝ安堵して朝餉を喰べた。

今日は七月三十一日である、空には一片の雲もなく、時は盛夏の灼けつくや

うな日ながら、曉天方から吹き出した颯風は、何となく人の心を煽るやうに騒々しい、殊に都會なれないお琴は、起つても居ても心が鎮らず、マアこの家續きの市街中で、他人さんは能うも皆沈着いて仕事をなさることよと、それを不思議に思ふ位、窓に覗いたり、階下に降りたり、小母さんに笑はれて、兎も角も、平素の通りに座敷も掃除し、柱や机や板の間や、二階階子まで洒き清めた。次いで新聞紙は第二第三の號外を發し正午過ぎの頃、堀川の防禦線は破れて、火は西天滿に飛び、何處まで焼け擴がるか、鎮火の望なしのことに、露路は漸く喫しくなつて、そろ／＼家財道具を片付けやうといふ聲が隣家の二階に聞ける、何ぢや狼狽ものだ、それを唾ふ聲が向ふの稽古屋から聞ける。斯うなつて來るとお琴は、便に思ふ基は居らず、もうじつとして居られない、第一に兄が笑ひながら叩いて見せた筆記帖と、父と潔とから來た一通の手紙と、自分が持つて來た郵便貯金の通帳の中に、わざ／＼長助をして追ひかけてまで持たせて下さつた尊い三十圓を收め、友禪の伊達巻にしかと包んで帯を引き締め、また窓に覗いて見ると、烈しい太陽の光に照されて、焦茶のやうな毒煙は

雲の如く見られ初めた。
 「小母はん、わらいこつたすな。」と、小六の可愛い聲が階下に聞えて、「姉はん如何したはりますか？」といふと、「まあ、小六さん、わらいこつたすな、此處まで焼けて來まへうか。」と、小母さんも太く心配らしく、ニシンも先き程から極めて、内へ外へと下駄ばかり音させてゐる。
 「焼けたつて、構やしませんかオホ、、、、妾、姉はんが如何したはるか心配でな……………」

「姉はんですか、お二階だすわ。」

「さう？妾、ちよつとな……………あ、怖、怖い階子やと。」

小六は二階に昇つて來て、「今日は。」と、直にお琴が窓に倚つて眺めてゐる背後に走り、軽く脊中を一つ叩いて、

「オヤ、まあ、わらいこと。」と覗くと、お琴は急いでお辭儀をせうとするを、

小六は通がさじとお琴が手を握つて、

「まあ、善いわ。ご覧、ご覧……………妾、姉はんが何となく好き……………」

この火事を面白いものゝやうに、和々と聲もなく笑ふ顔の美しいこと、絹上布の帷子に、長襦袢の桃色が滌ふて、太鼓に結んだ帯の緒が、今日は下弦の月に啼く杜鵑と代つてゐる。お琴は、小六がその指に、三個も聯なつた珠の光輝を見た。襟から帯へ、二條の長い黄金鎖が絡んでゐるのを見た。そうして自分が憐な田舎娘であることに気が注いた。

「姉はん、まあと驚。あの怖しい煙、……本地さんはあの火事場になつたか？」

「は、兄は今朝から参りましたの。此處まで焼けて参りませうか？」

「焼けたかて妾持やしまねんが、姉はんが心配してやと思ふて來ましたの。」

「私は、如何せうか知らと心配しまして……。」

「オホ、心配おしやすな、お一人では心細おますやろ、私の屋形へ、さあ、お越しやす。」

言ふより早く、小六は自分の妹のやうに、お琴が手を取つて二階を走り降り急いで自分の屋形に連れこんだ。

第五十回

「こんな可愛い妹はんを有つて、本地さんは仕合者だすな。」と、小六はお琴が膝を一つ叩いて、怡然としたが、又急に眞面目になつて、「姉はん、私、泌々ど此世が厭アになりますわ。一人の兄は放蕩だすし、もう十年も経つたなら、如何して世が送れますやら、私もう、お財も寶も入りまへん、こんな妹はんか、剛毅した兄さんが欲しうおますわ……。」私が男だしたならなあ……。」覺えずほろりとする。

風はますます、吹き荒んで、老松町も焼け、若松町も焼け、此處より火勢は更に猛烈しくなつて、區役所、警察署、裁判所、病院など、もう今方に盛に焼けるながら、火は萬馬の一時に跳り狂ふが如く西へ西へと走つて行く。

巡査が走る消防夫が走る軍隊が多勢駆足で行く。幾百千人の彌次馬と避難者どが、戸外を駆け交ふ雑沓の響は、宛然地震の轟くがやうであるに、小六は庭に向つた自分の居間の、鏡のやうに拭き磨いた椽側に、厚い皮蒲團を並べて布

いて、お琴と斜に膝突き合せ、お琴が身の上基が身の上、さては長閑な可部阪峠の邊の話などを聞いてゐる。

お琴はもう今にも火焰に捲き込められるやうな心地がして、気が氣ではないながら、避難の方法も方角も分らず、問はるゝまゝに答へてゐる。

梅田新道の防火線も亦甲斐なく破れた、軍隊は出入橋一帶の民家破壊に着手したなどとの聲が聞えて、戸外は修羅道の亂混であるに、小六は何も知らぬ風情である。

折柄、表口と勝手口とから、六七人の倭者「黒崎」と襟に染め抜いた揃ひの法被着た勇み男が、手に手に麻縄携へて、土足のまゝに跳り込だ。

「アッ！」

小六は飛び起つて、

「誰だす！ 何をしなはる……」

一番前なる大男の前に立塞ると、男は捲鉢巻を取つて小膝を屈め、

「どうも大變な大火事だす、石田はんの命令でお手傳に來ました。何を申しませ

う。」と、小六が一命の下に家財什寶をば一瞬時に持ち出さうとする勢凄しく、青い煙を蹂躪つて、泥足跡を縦横にべたべたと踏みつける。

小六は髪の後毛を撫であげながら、きつと眼を睜つて、

「石田はんて、あの黒崎さんの支配人？」

「さうだ、さうだ、何處に何がおます、オイ、皆ッ。」と大男が號令を下すと、

はや襖、箆筒、長持へと倭者等は蝗の如く飛び働く。

「嫌だつせ！」

小六が優しい聲は利刃の如く響いて、

「誰が黒崎さんや、石田はんに頼みました。あんたはん方、何處へ持つて行きなはる。」

止めやうとするも聞かばこそ、ヤツサ、エンヤの蒐聲勇しく、鏡臺、針箱、

襖、戸、障子は持ち出される。

「厭だす！ 私、私のものだす、私は私の衣物も箆筒も、このまゝに焼けたか

て善ろしおます、焼けるのを見て、私が勝手に避難ますさかい……」

この、狂氣じみた言葉には耳も呉れず、行李を溢す、箆筒を倒す、緋や紫や黄や緑や、帯に小袖に被布に襦袢に、豪華全盛の小六が衣類道具は、荒くれ男の暴き取り扱ひに、咲き亂れた四季の花をば、一陣の狂風がサツと吹き捲つたやうに、座敷一面狼藉を極めた。

この混亂の最中に、破れるやうな嗚聲が響いて、

「危険！。危険！。火は其處だ。近づけた。近づけた！。」と、跳り込んで来た一人の巡查と二人の兵士は、全身泥に塗れて、六七人の佼者をば、その携へたる櫃を以て叩き拂ふ。アア！兄さんかと思つたお琴は、やつぱり異つた巡查の顔に落膽する暇もなく、

「サア、姉はん！。」

小六はお琴が手を携へて戸外に躍り出る、火焰を誘ふ暴風は白煙を渦と捲いて、四邊には早や人もない。

第五十一回

慕はしい父は世になく、在る母は母らしい心地がせず、放蕩な一人の兄は父の子でなく、母はこの兄を自分に與へて呉れたと思ふと、小六何不足ない全盛の身ながら、自分の一人法師が寂しく悲しく、人事の満足が求めたい心は、聞けば聞くほど美しい親子兄妹の間柄にあるお琴が羨ましく、もう衣物も入らぬ道具も入らぬ、徐に家財の焼け燼すのを眺めて、お琴と共に避難せうと考へてゐたが、裁判所警察署の尊嚴をも、學校病院の仁慈をも、たゞ一炬に焼き盡した火勢は、小六に斯る悠長なる時を與へない。

二女が手に手を執つて外戸に出た時は、近處の堂島小學校の大建築物が焼け崩れて、火はもう四五軒の隣家を襲ふてゐる。

お琴は曾て火災なるものを見たことがない、長閑なる春の半、櫻の花の散る頃、苗代の肥料にせうとて、閑寂なる秋の暮、稻の刈上も終つた時、麥蒔の肥料にせうとて、可部阪崎の麓の故村の田畝の中に、伐り集めた松の生木に土を盛り、其處にも此處にも之を焼いて、薄い紫な烟を廣い空に濛はすを見慣れた外には、灰小屋の一株すら焼けたのを知らないに、あゝ、今避難を運れたので

はあるまいか。

暴風に煽られて低く地面に襲ひ来る烟は、焦茶色の渦を捲いて、吹雪のやうに砂を打ちつけ、灰を飛ばし、一陣急に呼吸を壓逼して、また後より後より追ひかけ詰めかけ迫ると見れば、悪魔の舌のやうな火焰は、柱を走る窓を走る、美しう竝んだ軒の屋根裏を匍匐ふて、隣家の二階に薄い烟が徐に迷ふて見る間にカラ／＼と音がして瓦も煉瓦も破壊れ落ちて、忽ち一團の炎は爆と燃わ上つて今の今まで誰が住居したのか、座蒲團まで布いてある奥座敷に、目も冴わるやうな金屏風、まだ新しい繪襖など、人無き境に火の子火の雨は縦横に暴れ廻つて、見る／＼紅蓮々々と化り行く。

烟は二人を呑んで終つた。

お琴は願いて倒れた。誰が遺棄したか、十三絃の箏が一個、街路の中に横はつて居る。

唐木の火鉢が倒れてゐる、小女の赤いお衣服が棄てゝある、書物がバラ／＼溢れて居る、樽だの蒲團だの看板だのと、一揆反叛の暴軍が、有らぬ奪掠を

恣にして行つた後のやうに、怖しいとも凄しいとも。

「姉はん！」

「姉さん！」

と、互に號叫び立てる又のやうな聲を聞きつけてか、突如現はれた二人の消防夫、鐵兜眉深に冠りたるが、うろ／＼する二女の手を取つて、背中にヒヨリと負ふが早い、まつしぐらに走つて／＼走り逃げ、

「危険い！、危険い！」

何處とも知らず、投げるがやうに卸しておいて、また何處へか駆けて行つた、此處も亦今直に、火の手に圍まるべき處、避難の群衆が混雑の雑踏の最中へ、突貫の掛辭勇しい一隊の消防夫が、蒸氣ポンプを引いて来る。屋根に攀ち登る水道栓を捏ち開る、長蛇の如きホースを引く、その目にも止まらず駆け働く武者振の晴やかさ、今朝よりの疲勞ありとも見ねぬ勇士の中に、泥だらけ水だらけの巡查部長が、暖れ荒れた聲を振り絞つて奔走る。

「アラー！」

と、お琴は覺えず叫んだけれど、如何してこれに耳を借すべき、と見れば、焼けて来る彼方の市街から、栗毛の駿足に鞭を擧げて疾驅る署長の小山警視にハタと出會ふや、二言三言、基は帶劍の柄を握つて何處にか驅け去つた。續いて一隊、小尉の率うる師團歩兵は、西より東へ駆足する。もう、大阪は市街戦の巷となつたのであらうか。

第五十二回

大切な家財はいふに及ばず、戸障子疊敷居、塵芥箱まで、脊に負へるだけ、手に提てるだけ、車に重ねて積まれるだけ後から、猛火に追撃れながら、左なきだに狭き大阪の街路は何處から何處まで、進みも退きもならぬ避難者に満ちて、若きもの壯なるものは夜叉の如く叫び、老いたるもの弱きものは徒に泣き號ぶ。

基は何處へか走せ去つた、軍隊は何處へか突進して行つた。消防夫は縦横に驅け廻る、蒸氣ポンプは盛に煙を吐く、そうして背後からは煙が逆捲いて襲ひ

来る。

「兄さん、兄さん。」と呼ぶお琴が聲は少しも小六には聞えなかつた、小六はチヲとも基を認めなかつた。纖弱きお琴が手を執つて、何一物持ち出したものもなき身の思ふがまゝ、この混雑中を彼方に潜り此方に抜け、漸く電車の街路に出て方角を知り、一直線に南へ南へと、渡邊橋の人波に揺られて、中の島から俚に飛び乗り土佐堀川に沿ふて直に駆けつけたのは、築地のある旅人宿であつた。

「まあ、小六さん如何だすやろ、大い事たすな。私、ほんまに、ほんまに、あんたはん如何して、か知らと思ふて、心配で、……、まあ、お上り。」と自分を持ちあつかひにくさうに肥つた女將は愛嬌の布袋顔で起つたり居たり手を舞はし足を踏み、いそぐと二階の小座敷に請じた。

天神橋を二階の右に難波橋を二階の左に、濼々として流るゝ淀川を緋に染めて、對岸北區一帯は大焦熱地獄と化し、天満橋は何處ぞ、堂島は何處ぞ、盡日の虐征に勝利を誇る劫火の急先鋒は、鐵骨といはず石柱といはず、人間ごもが

何の爲ぞ。」といはぬばかりに、有ゆる防備の障害物をば反つて悉く同類と化し、今方にその暴威を梅田邊に専恣まゝにせるらしく彼方にも此方にも、濃々として黄色に絡まる煙の中より、忽ち一團の炎バツと大空に燃ゆると見れば、風は直に勢を興へて後はたゞ大厦高樓の自ら倒れ自ら壞るゝに任せて、火はますます西へくとも向ふ。

斯くて、盛夏の長き一日も焼け暮れて、空に隅なき十五夜の月魂も、下界の出来事を憐むかのやうに、その光輝も薄れ勝なるに、祝融氏は反つてこれより我等の代ぞと言はぬばかりに、先陣はますます、後隊は八方に擴りて、天を焦す煙は黝く藉く、遂にその燃え盡きんとする處を知らざる有り様である。お琴はたゞ泣き沈む、小六またさすがに、このもの凄き光景に打たれて、茫然と我を忘れてゐたが、下女が持て来たぬる茶をグツと飲み干し、

「姉はん、姉はん……………」
 「お琴が頭から肩から一面に冠つた燼餘の灰を拂ふてやりながら、泣きなはん、泣きなはん、今に本地さんに會はれますよ私も居ます……………」

と涙聲。

「兄さんがね、兄さんがね……………」今朝ご飯も喰へずに出ましたきり……………。書物も皆な焼いてしまいました、たつた。これだけ……………」
 今朝のことゝも語つてお琴は帶上を取り外し、基が日々夜々、研學の餘になつた厚い古びた筆記帳を取り出すと、小六は手に取つて、「まあ〜。」と、眼を圓め、

「姉はんこれさへ出たなら安心でせう、本地さん屹度及第しやはる前兆だすわ。」と、讀めそうもないのに開いて見る。

第五十三回

櫻田門を駈眼と歩んで、基は司法省の表門から仄暗い廊下に出た。控所は勿論のこと、倉庫の物陰庭園の隅々、我こそ司法官たらんと願ふ二千幾百人の學生等、議論を闘はすもあれば講義筆記を耽讀するもあり。君、今年もかど久潤の挨拶を述べると、お互に例年の通りと諧謔けるもあり、譯もなく右往左往に